

第4節 旧石器時代

後期旧石器時代の遺構・遺物はIV層からVII層にかけて出土した。前述したように AT (VII層) より上位の層は混在した状態で出土した。

遺構・遺物を確認した最下層はVII層であったが、その他に炭化材集中区をIX層中で検出した。

炭化材

E4Gc のIX層上部中から1cm前後の炭化材小片が、50cm四方に集中して検出された。精査を行ったが、掘込み等は確認されなかった。炭化材は土ごと採取し、アルミ箔に包み持ち帰った。

これについて古環境研究所に委託し、年代測定と樹種同定を行った。年代測定はAMS法で、補正14C年代 $26,630 \pm 160$ 年BPとなり、樹種はコナラ属コナラ節と同定された。約19000BP以前は歴代補正外の値であるが、通常曆年代は14C年代より、およそ2000年程度さかのぼることから、約28000年前になる可能性が高い。この炭化材の測定年代は、MB3に対比されるIX層の年代とも近いと考えられる。

1 旧石器時代 (VII層) の調査

AT直下であるVII層上面から約850点に及ぶ石器が出土した。そのほとんどはE・F～4・5Grに密集していた。第3節に記述したように、出土した石器には爪ではじいてもとれないほどATが付着しており、水洗作業を行っても完全に除去することはできなかった。石器を傷つけるおそれがあったため、無理にとることはしなかった。これは水分と熱の影響により、火山灰中の成分が石器に密着した結果であると考えられる。

また礫群が4基検出されたが、それらは石器ブロックとは重ならず検出された。SI42はトータルステーションでドットのみ記録した。礫群と認定した礫の密集部以外は上位層に比べ、礫の分布が散漫であった。そのため、礫群としての名称を付すのが容易であった。

VII層出土の遺物を発掘調査終了後に図化したところ、ドーナツ状に巡っていることに気づいた。SI35とSI36の周囲を回むように、大きく二つの円弧を描いている。年代は新しいものの環状ブロックの可能

性を想起させた。

接合関係をみると集中区2と4は明らかに関係性を持っていることがわかる。3と4・5も同時性が認められる。また集中区7と8も同様である。集中区10は単独で存在していた可能性が高い。同様に近接するSI41の形態がSI35・36と異なることも注目される。大きく二つの円弧をA、Bと名付け互いの関係を見ると、3点ほど接合している。距離にすると15m前後である。この環状に巡る石器集中区については、第6節で環状ブロックの可能性を含め考察したい。

【遺物】

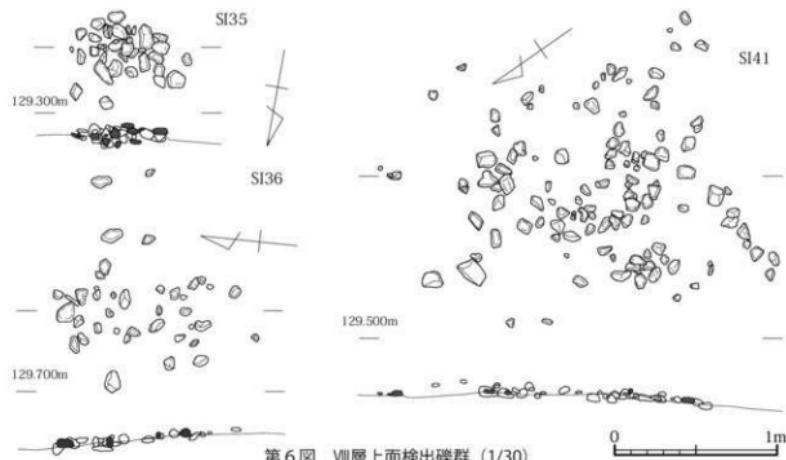
遺物は小形のナイフ形石器と搔器の生産に関連する資料と礫石器が出土した。

石材は流紋岩とホルンフェルスが大半をしめる。残りは、尾鉛山酸性岩類、頁岩、チャート、黒曜石、砂岩等である。AT下位から出土した黒曜石は不純物の多い日東産と推定されるものである。これらはAT上位からは出土しなかった。

1～31は流紋岩1 (Ryu1・黒色系流紋岩) 製である。1～6はナイフ形石器である。いずれのナイフ形石器も素材剥片からの変形度が大きいものの、稜の数条とおった比較的端正な縦長剥片を素材としたものと推測される。ナイフ形石器は鋭い先端部を持つ細身の三角形に仕上げられる。3・6の先端は欠損する。

7～10・16は二次加工ある剥片である。定義如何によつてはナイフ形石器とするべきかもしれない。ナイフ形石器の未製品の可能性も残す。

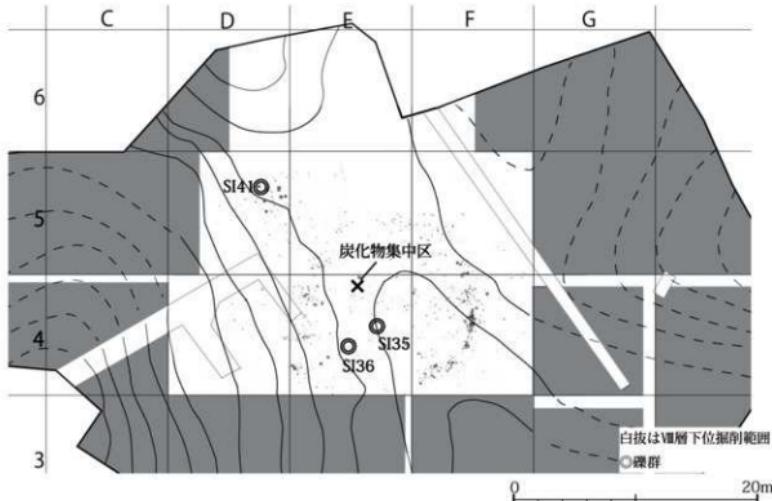
11～14はスクレイバーならびにそれに関連する接合資料である。11は入念な打面調整の上剥離された縦長剥片素材である。右側縁に弱い抉りがみられる。13はスクレイバー(12)とそれに接合する2点の剥片の接合資料である。剥片2点はスクレイバーの素材剥片生産に直接関わるものではなく、スクレイバーの素材剥片が剥離された面を打面に新たに剥離されたものである。12は入念な頭部調整の上剥離された縦長剥片を素材とする。剥片側縁から末端にかけて刃部を設けている。特に下端の刃部は刃角が90°に近い。14は頭部調整の上剥離された縦長剥片



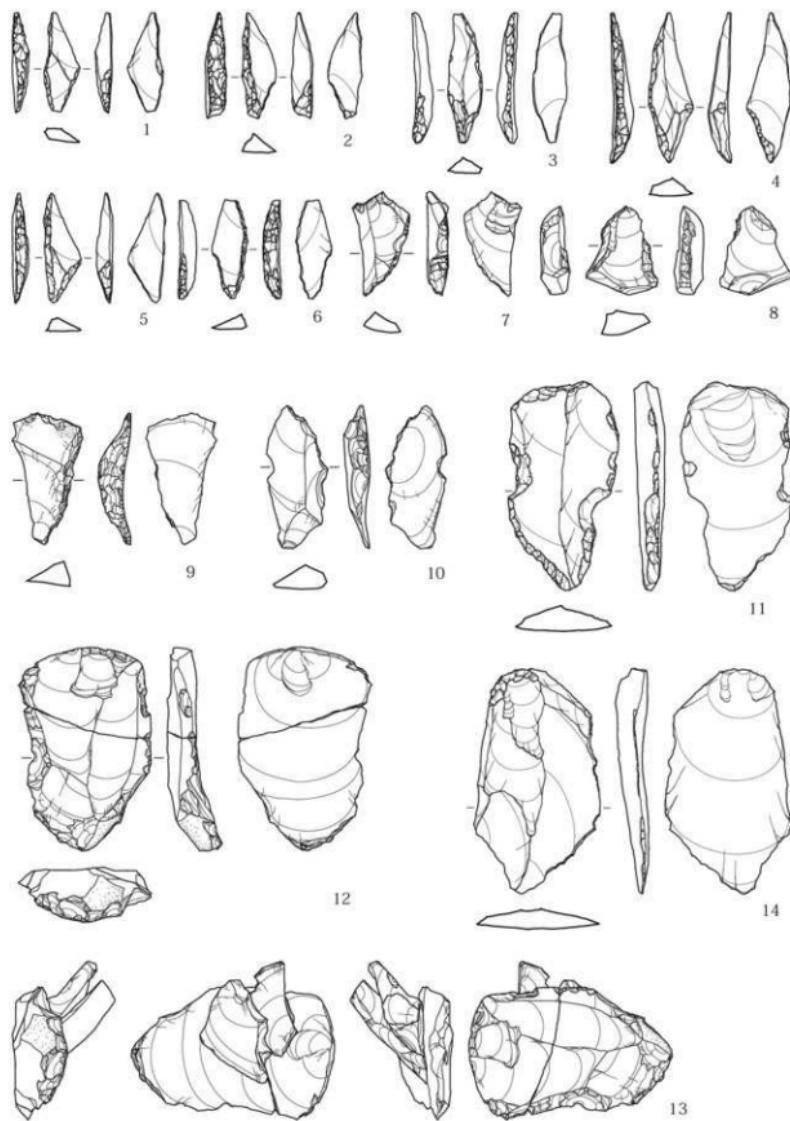
第6図 VIII層上面検出砾群 (1/30)

第1表 VIII層検出砾群観察表

遺構名	Gr.	検出層	最大長 (m)	最大幅 (m)	掘込 (m)	礫重量 (g)	礫の状態	その他の所見
SI35	E4	VII	0.70	0.60	—	14,427		
SI36	E4	VII	1.25	1.35	—	8,081		
SI41	D5	VII	2.50	1.90	—	27,703		
SI42	D5	VII	—	—	—	3,956		点データ

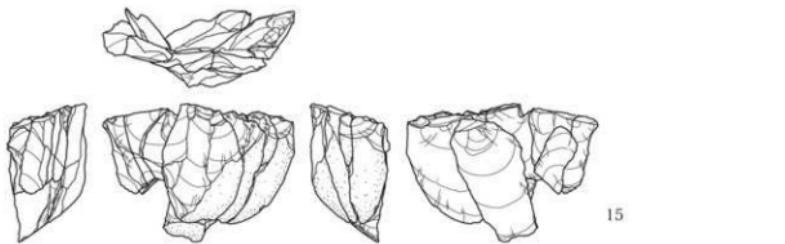


第7図 VIII層上面遺構・遺物分布図 (1/400)

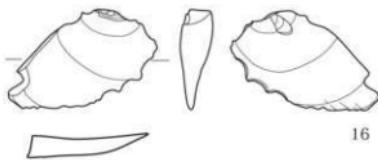


第8図 旧石器時代（VIII層）の石器1 (2/3)

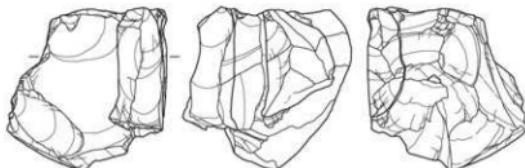
0 5cm



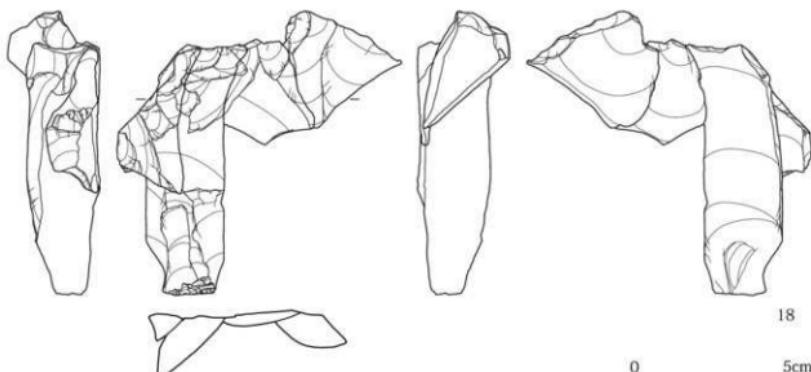
15



16



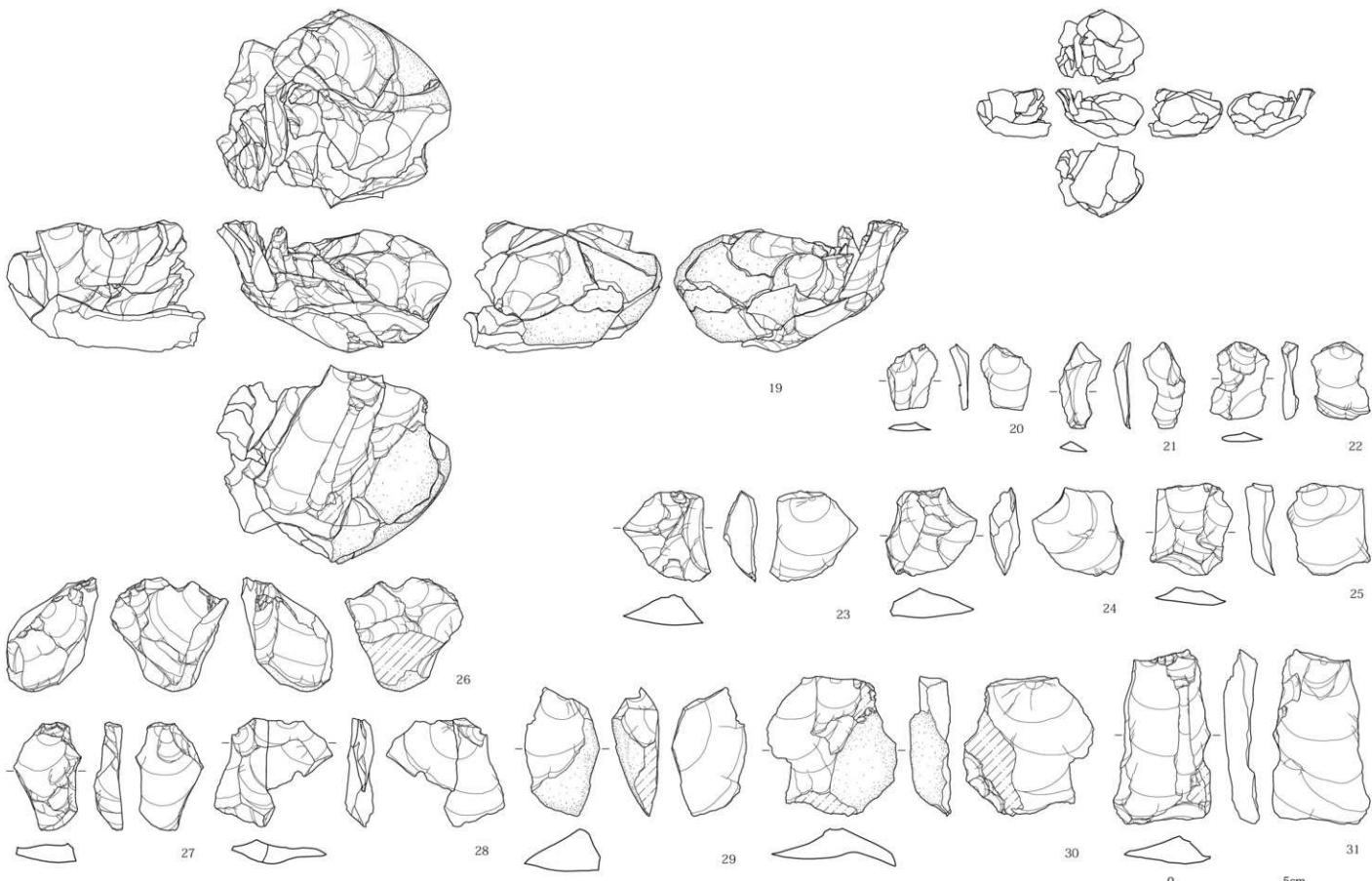
17



18

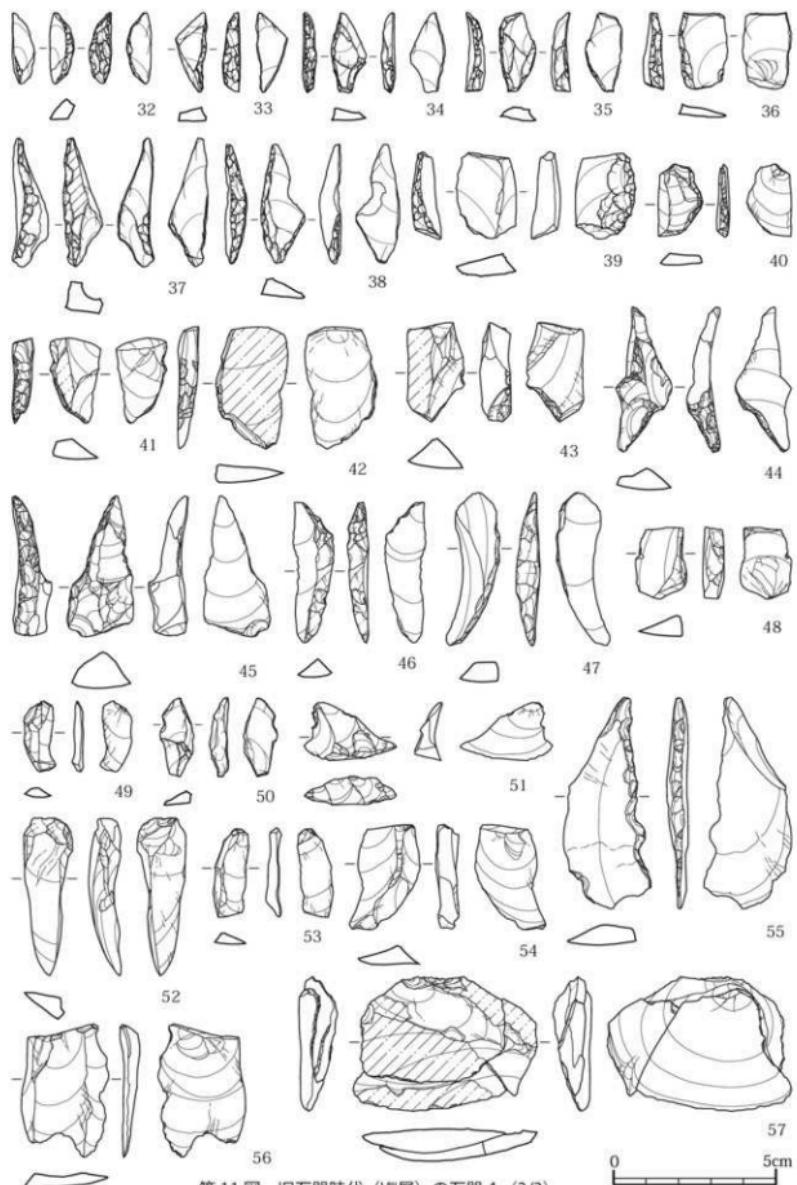
第9図 旧石器時代（VII層）の石器2 (2/3)



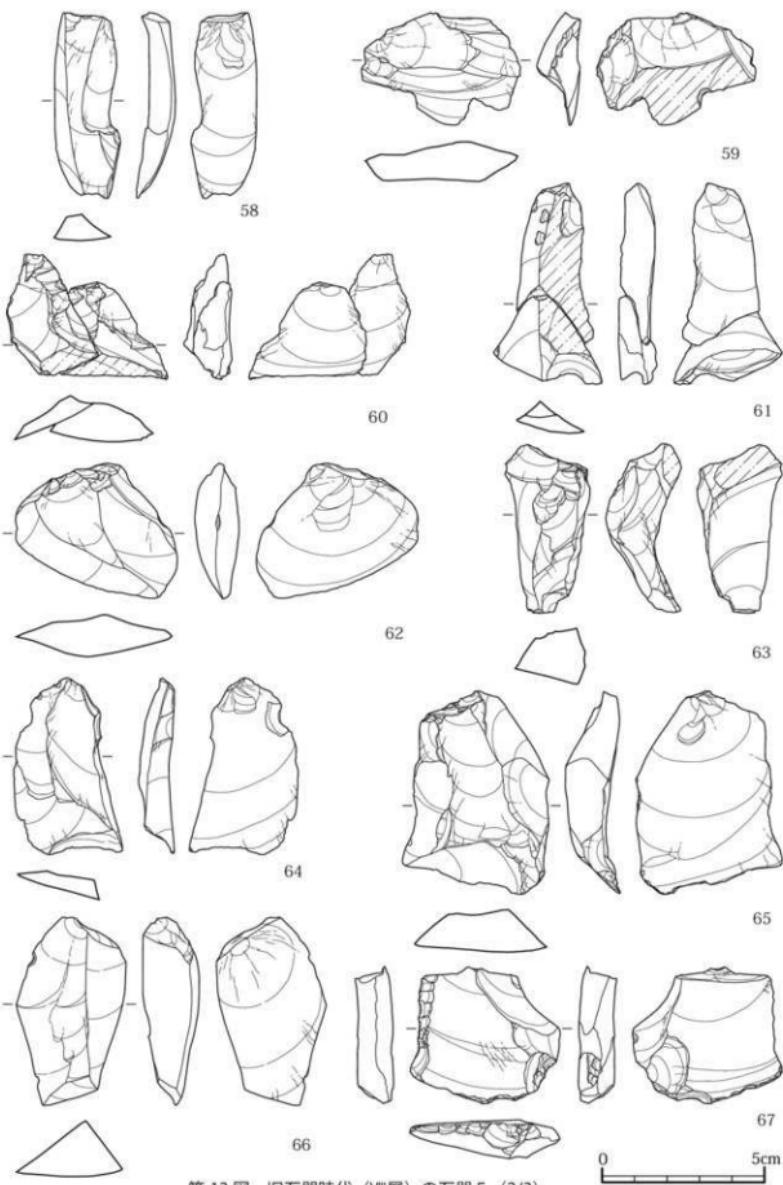


第10図 旧石器時代（VII層）の石器3 (2/3)

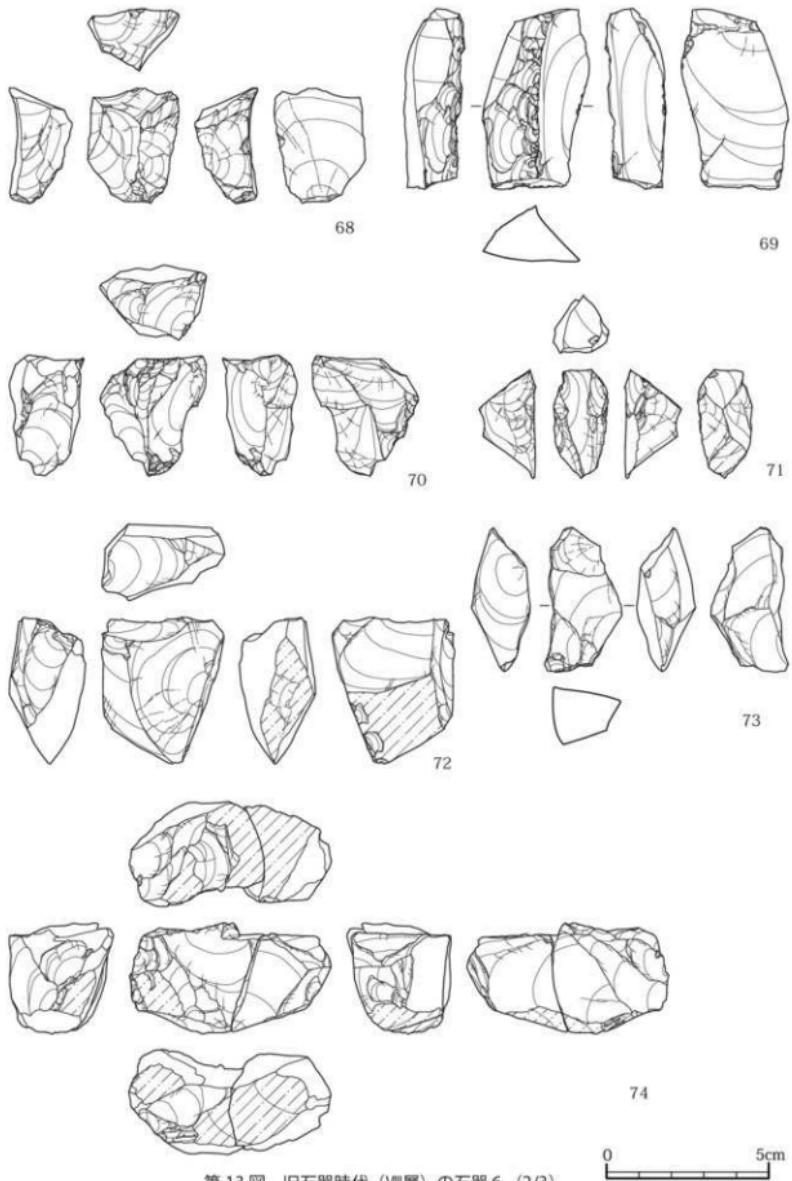
15 ~ 16



第11図 旧石器時代（VII層）の石器4 (2/3)

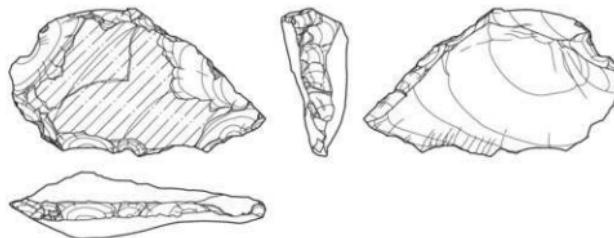


第12図 旧石器時代（VIII層）の石器5 (2/3)

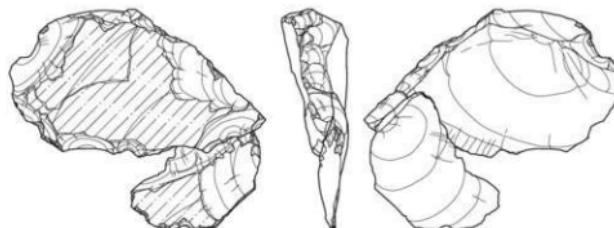


第13図 旧石器時代（VII層）の石器6 (2/3)

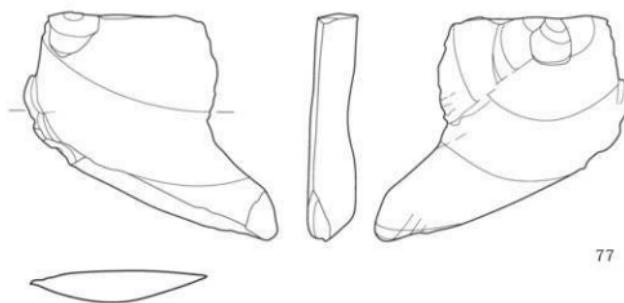
0 5cm



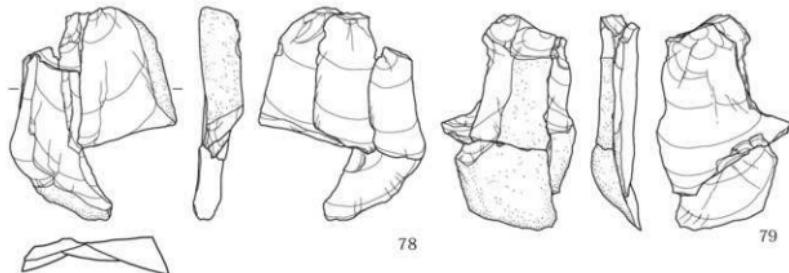
75



76



77

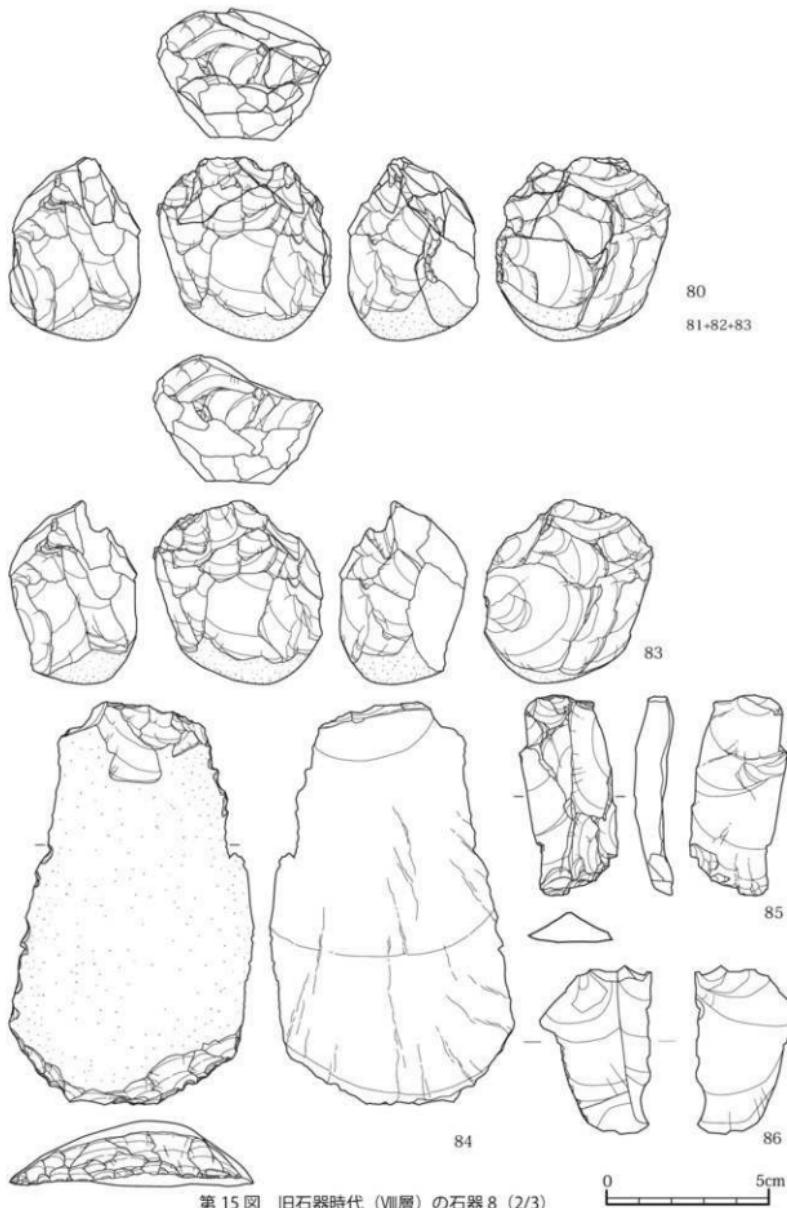


78

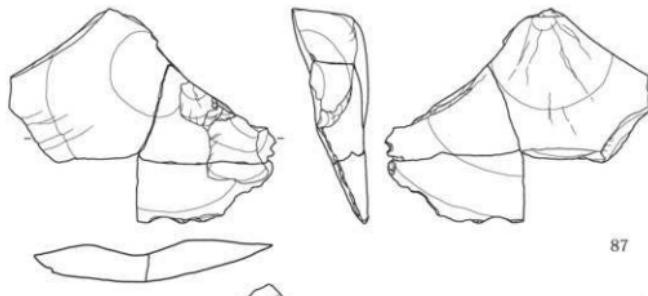
79



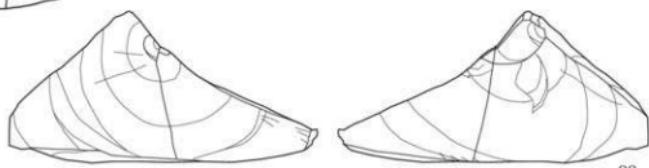
第 14 図 旧石器時代 (VIII層) の石器 7 (2/3)



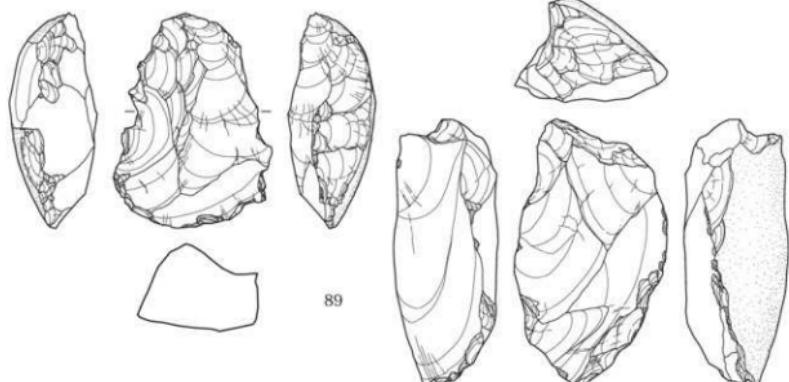
第15図 旧石器時代（VIII層）の石器8 (2/3)



87

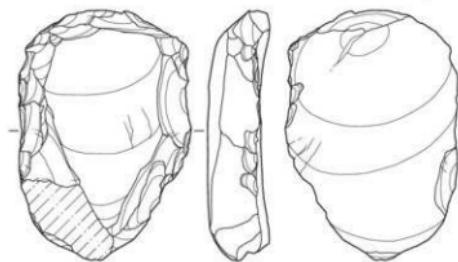


88



89

90

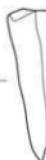
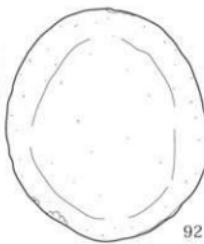


91



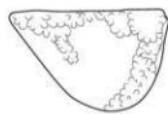
第16図 旧石器時代（VIII層）の石器9（2/3）



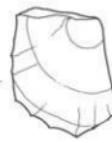


92

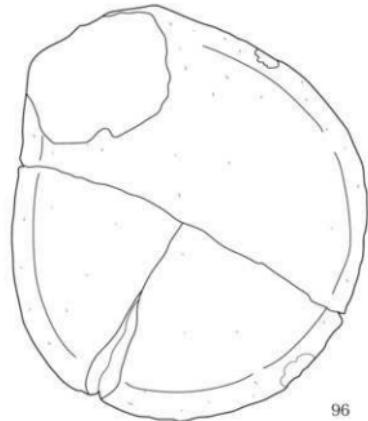
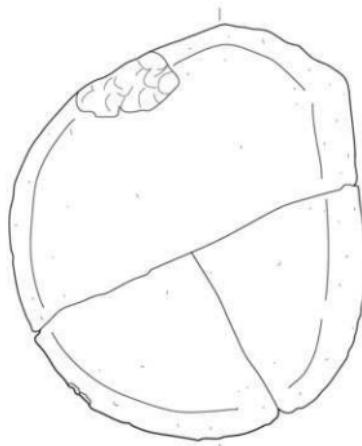
93



94



95



0

10cm

第17図 旧石器時代（VIII層）の石器 10 (1/2)

素材である。二次加工はあまり明瞭ではないものの剥片下半にみられる。

15は剥片どうしの接合資料である。接合の確認できた剥片2点がそれぞれ縦長剥片・不定形剥片であることからも理解されるように、生産された剥片は縦長を志向しつつも、結果、様々な形状になったとみられる。打面は一定枚数連続して剥片剥離が済むまで固定され、その上で打面転移している。剥離前の打面調整・頭部調整は見られない。

18は剥片どうしの接合である。あまりに部分的な接合のみの確認であるため剥片剥離の全容は知りえないものの、長さ7.5cm幅3.5cmの端正な縦長剥片1点が含まれている。頭部調整の有無に注目すれば、4枚の剥片剥離のうち、端正な縦長剥片の剥離時ののみ頭部調整が見られる点は、目的剥片が縦長剥片にあつたことを推測させる。

19は20~31までの接合資料である。一母岩より大形剥片を剥離した後、小形剥片も統いて剥離するものである。目的剥片は31のような縦長剥片であつたと見られる。23~25の不定形な剥片も頭部調整が見られることから目的剥片であった可能性がある。26は石核である。

32~77はホルンフェルス2(Ho2・茶色系ホルンフェルス)製である。この石材は表面がきなこ状に激しく風化するもので、中には表面が風化によって大きく剥落するものも見られた。

32~39はナイフ形石器である。流紋岩1製のナイフ形石器と比較し、素材・加工・最終形にバラエティがある。32は素材剥片の形状が全くわからないほどまで二次加工されている。33は左側縫合下辺の剥離面を、石器完成後の欠損と見るか整形のための折断と見るかによって全く異なるものとなる。図化は前者の可能性で行ったが、後者であれば37・38に近い大ぶりのものに復元される。34・35は基部を欠損している可能性があるものの、風化が著しいためプランティング面との切り合いか明確でない。34・35は36と同じく、小さな縦長剥片素材であり、石器基部側に素材打面部をあてることで共通している。37・38は同石材製のナイフ形石器の中では大型である。37は節理が背面に残され、その石質の影響か大

きく湾曲した縦長剥片を素材とする。38は稜の数条とおった比較的端正な縦長剥片を素材としたものと推測される。鋭い先端部を持つ細身の三角形に仕上げられている。

40~48・55は二次加工ある剥片である。定義如何によってはナイフ形石器と言えそうなものも含んでいる。また、ナイフ形石器未製品の可能性のあるものも見られる。

49~54・56・58・59・62~66・77は剥片、57・60・61は剥片どうしの接合である。

67はスクレイバー、76はスクレイパー(75)と剥片の接合である。67は厚手の斜軸に抜けた剥片素材で、剥片末端に刃部を設ける。

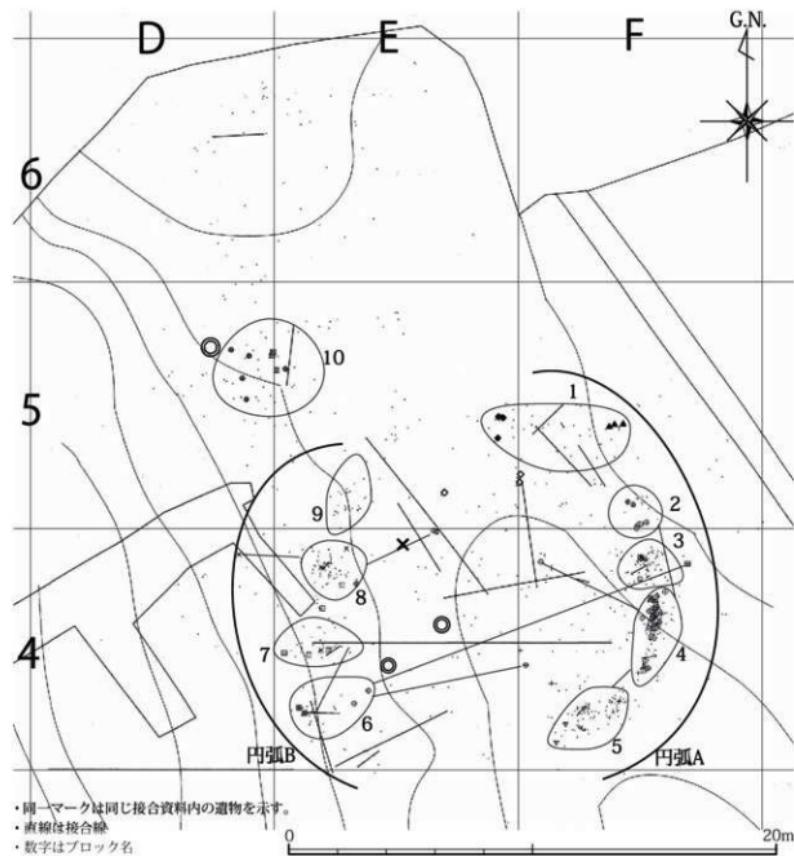
68~73は石核、74は石核がアクシデンタルに分割したものの接合資料である。68・69は断面三角形の分厚い縦長剥片を素材として小形の縦長剥片を剥離するものである。石核作業而成形に伴うファーストスピールの可能性を残す。

78~86はホルンフェルス・頁岩・チャート製等である。78・79は剥片どうしの接合である。80は石核(83)と剥片の接合である。84は頁岩製スクレイパーである。85・86はチャート製で86は微細剥離が見られる。87~89は流紋岩2(Ry2)製石器、90・91はホルンフェルス製の二次加工剥片である。

敲石類は2点出土した。92は硬質の砂岩製で、側面から下端部にかけて面を作るような敲打痕が見られる。特に下端部の敲打痕は強く、広い意味では“局部磨耗跡”と呼ばれる敲石の一類に相当しよう。94は96の台石に近い石質の砂岩製である。一端のふくらむいびつな縫の上下端に敲打痕が残される。裏面はもともと平坦な面であり、その中央あたりに弱い磨面と見られるすべらかな部分がある。

96はやや粗い石質の砂岩製台石である。敲打痕・摩滅といった使用痕の類は明瞭でない。側面に部分的に弱い赤化が見られる。

なお、93は94・96に近い石質の砂岩製のものである。背面には縫面があり、縫面は弱く赤化しているように見える。打面は剥離面であり、縫面ではなく意図的に剥離されたものと理解した。



第18図 遺物接合状況分布図 (1/200)

第2表 VIII層出土未掲載遺物観察表

No.	Gr.	器種	所見
K1		石核	直径10cmほどで打面調整を行わず、一方向から縦長剥片を連続して剥離。下端は礫面が残っている。
K2		搔器	長軸7.6cmの縦長剥片を素材とする搔器。末端部を軽く調整。
K3		搔器	長軸8.5cmの縦長剥片を素材とする搔器。末端部を調整し一部礫面を残す。

2 旧石器時代(AT上位石器群)の調査

第1～3節にも述べたように、本遺跡では遺構と遺物の出土層位に不整合が生じており、かつ同時期の遺構であっても異なる層位で検出される可能性がある。特にAT層や心部層はその影響が大きく、単純に遺跡の変遷を追うことが困難である。

一方で、Ⅲ～Ⅶ層及びその他の混在層では、多量の石器と礫群等の遺構が確認された。とはいっても、遺物は水平分布においても垂直分布においても、二次移動が激しいと考えられ、厳密な原位置的検討は行いかない。

しかしながら、第1節に考察したような遺跡形成サイクルを考慮すると、調査区内にも原位置に近い水平分布を多少なりとも反映している個所があることが予想される。また遺構は、ある時点での一定の生活面を反映していると考えられる。従って、それぞれの地点でわかる範囲で、時間軸に沿った層の対応関係を把握していくば、有用な情報を引き出すことが可能である。

そのため、ここではⅢ～Ⅶ層をAT上位石器群として一括して取り扱い、遺構と遺物の基礎的な整理を優先して行いたい。遺物については、型式的操作と並行して、若干の相対的な前後関係を反映するであろう一部の層位ならびに、大まかな水平分布を併用して、個々の遺物の帰属年代を推定していきたい。遺構については、検出層位の詳細な検討によってその時間的変遷を追っていく。

本項目に図化した出土遺物の配置は、まず、層位を問わず、石材を最上位基準にして大別し、次に器種及び類型を細別している。トゥールに伴うと考えられる石核や剥片類は、トゥールとともに共に掲載している。

このほか、層位が安定していたため、一部、試験的に層を記録して取り上げた箇所では、関連性を持つと考えられる石器が一定範囲で出土したため層位を優先して報告している。また、石材よりも器種を優先した個所もある。

以上のように配置基準はフレキシブルであり、その詳細は、個別の当該遺物項目に随時記述す。

石材の分類は第8表と遺物観察表を合わせて参照

されたい。

また、遺構についても先に形態分類を行い、検出状況を加味し概要を示していく。

概期に属する遺構として、礫群36基と土坑2基を認定した。遺物はナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、搔・削器、礫器、細石刃期の石器、石核、敲石等が出土した。

【遺構】

礫群(第19～23図)

礫群を以下のように分類した。詳細は、第3・4表に検出層の母元と所見を一覧にしている。

I類：小形のもの。

a：40cm程度の範囲に礫が密集しているもの。掘入みがあるかの様に土中に礫が入り込んでいる。

b：礫が40cm程度の範囲にまとまっているけれども個数が少ないため、認識しやすいもの。

II類：一定範囲に密集しているもの。

a：大形の礫を使用しているもの。

b：小形の礫を使用しているもの。

III類：密集しているとはいえないが、一定の範囲に礫が集まっている。周囲と明確に線がひけるもの。小形の礫を使用している。

IV類：礫の分布が帶状で、明確に範囲を示し得ないが、あえて認定したもの。

I類にはSI7・9・11・14・15・17～19・21・24～33・37・38・40、II類にはSI3・23・34、III類にはSI3～5・10・12・39、IV類にはSI6・16・20が該当する。

SI8は現地で図化は行ったものの、自然要因によって遺跡に落ち込んだものと判断した。

SI7とSI9は2基に分離される可能性がある。SI32は磨石のような砂岩が接着し、完形礫となった。

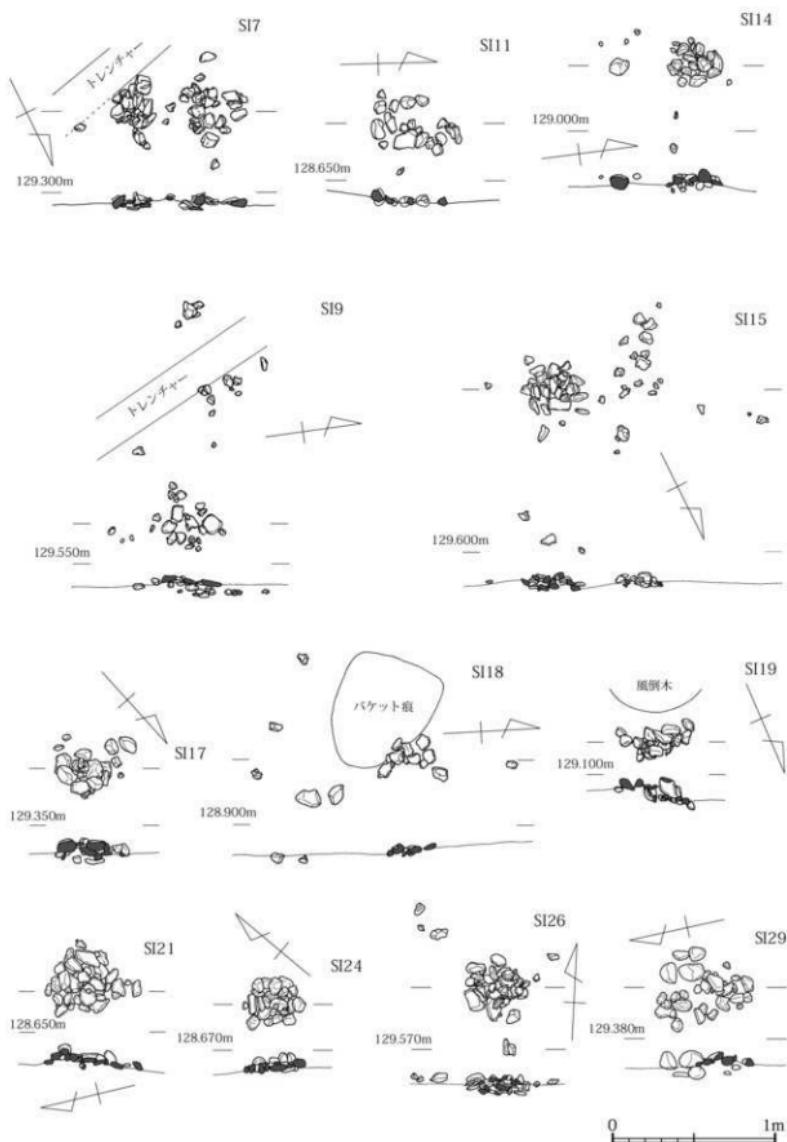
また、SI11はSI3を検出、掘り下げた後に、その下層で検出された。状況から、SI3の下部ではなく別遺構であると判断した。

SI22(第25図)

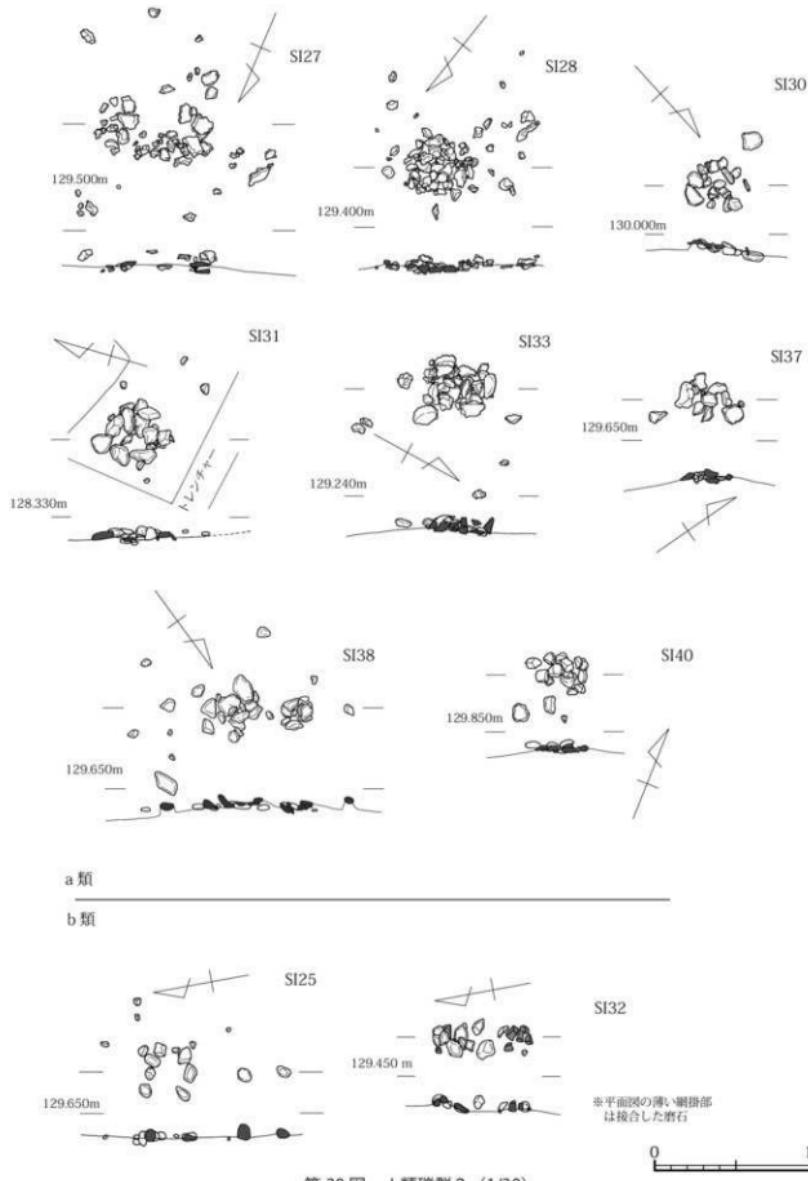
また、上記中に分類しなかったSI22のような遺構

第3表 I・II・III類礫群観察表

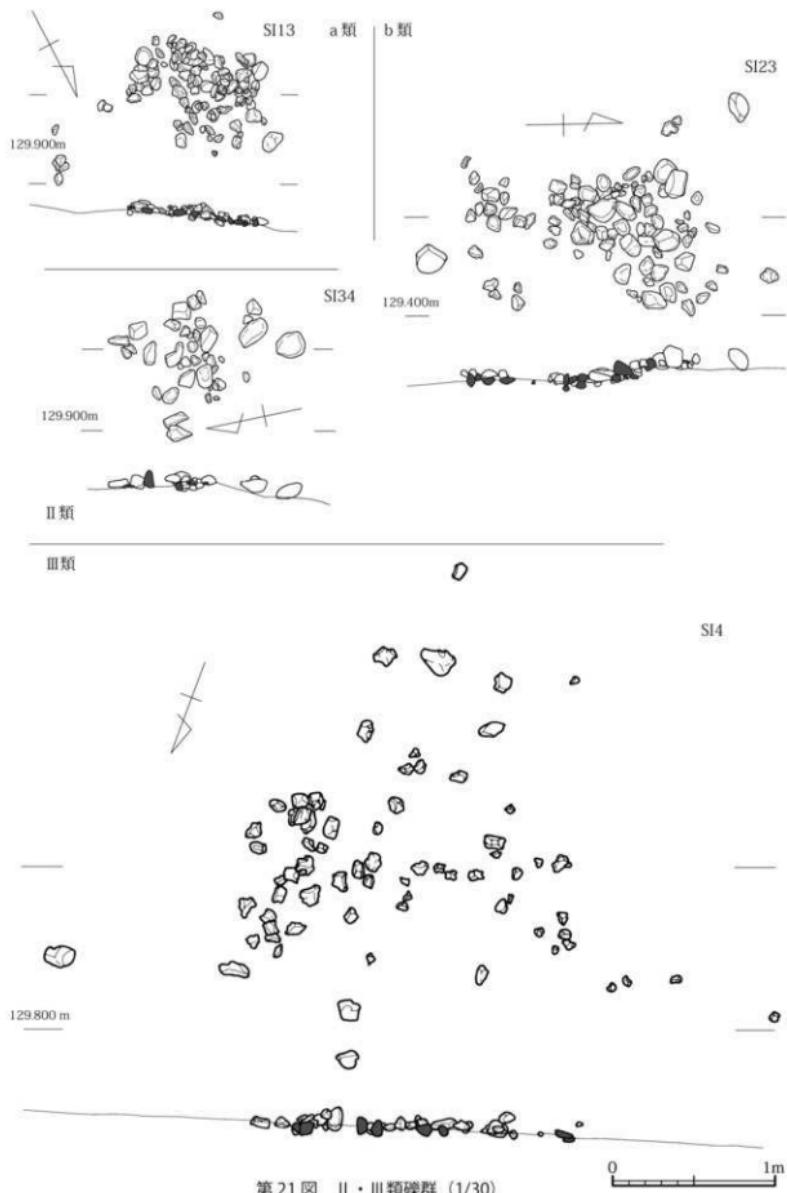
遺構名	Gr.	棟出層	最大長 (m)	最大幅 (m)	掘込 (m)	礫重量 (g)	礫の状態	その他の所見	類
SI7	E5	AT上の褐色土層中	1.1	0.7	—	8.878	板状に破損した礫を使用。赤化度は強い。	2部にわかれ可能性がある。	I a
SI9	E4	ATの堆積が薄い箇所の上上の褐色土中	1.5	1.0	—	3.693	板状に破損した礫。礫が下部に入り込む。	2部に分かれ、一つはI aトレンチャーにきらっている可能性がある。	I a
SI11	D4	AT混じり層中。	0.6	0.6	—	6.779	板状に割れた礫を使用。赤化度は弱い。	SE3の下で検出された。	I a
SI14	D3	—	0.8	0.8	—	2.952	丸い破損礫を使用。赤化度は強い。	—	I a
SI15	F4	AT上の褐色土中	1.6	1.5	—	9.094	下部の礫の中に入り込む	—	I a
SI17	D5	AT混じり層(というよりAT堆積が弱い箇所の上面)の上面で検出	0.5	0.4	—	11.323	丸い破損礫を使用。赤化度は強い。 礫土の上に入り込む。	—	I a
SI18	D5	AT流れ層で検出。 SI17と同じ	1.9	1.0	—	5.638	板状に割れた石を使用。赤化度強い。	パケットで半分破壊されている。	I a
SI19	E2	AT混じり層上。SI13と同層だが、風削木で動いている可能性あり。	0.5	0.3	—	3.906	板状に割れた石使用。風削木により、礫が移動し斜めに立っている。	風削木により、礫が傾き、立っている。	I a
SI21	D3	AT混じり層上面にわずかに残る褐色土層中。	0.6	0.5	—	6.838	板状にわれた石使用。礫が土の中に入り込む。	—	I a
SI24	D2	AT混じり層上面	0.4	0.3	—	5.372	小さな破損礫使用。赤化度は強い。	—	I a
SI25	D5	AT上の黒褐色土上	1.2	0.7	—	5.535	赤化度の非常に強いチャートの円礫	弧状に配置	I b
SI26	E5	AT上の褐色土中	0.9	0.9	—	9.074	下部の礫の中に入り込む	—	I a
SI27	E6	SI26・28と同じ	2.5	2.6	—	6.995	板状に割れた石を使用。赤化度は少し強い。中央部に礫が落ち込むようになっている。	—	I a
SI28	E6	AT上の褐色。SI26と同じ	2.0	1.8	—	7.963	板状にわれた石を使用。礫が土に入り込む。赤化度は強い。	—	I a
SI29	E2	AT混じり層上面で検出。その下は茶褐色粘土質上。	0.6	0.5	—	9.072	小さな破損礫構成。赤化度は強い。	—	I a
SI30	F2	AT上の褐色土中	0.5	0.5	—	3.572	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。	—	I a
SI31	D2	AT上の褐色土中	0.7	0.8	—	6.054	板状に割れた礫を使用。赤化度は少し強い。	—	I a
SI32	D6	AT上のATや黒斑がブロックに入る褐色土層中	6.0	2.5	—	4.464	砂岩が覆り、接合すると完形の円礫になる。	砂岩の磨石と思われる物が接合	I b
SI33	E6	AT上の黒色ブロックのまじる層の上	2.1	1.7	—	10.930	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。	—	I a
SI37	E6	AT上の黒色ブロックのまじる層の上	1.2	0.6	—	4.292	板状に割れた礫を使用。赤化度は強い。	—	I a
SI38	E6	SI33・37と同じ	1.4	1.0	—	7.604	板状にわれた石を使用赤化度は少し強い。	—	I a
SI40	D6	AT上の褐色土層中	0.5	0.4	—	3.054	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。	—	I a
SI13	E3	AT混じり層上。	1.4	1.1	—	15.032	小さな破損礫構成。赤化度は弱い。	質の良い凹凸岩懸性岩を使用。	II a
SI23	E6	黒斑混じる褐色土上の褐色土中。SI34と同じ。	2.3	1.4	—	56.147	段丘礫をはいでその中身を加工して使用。赤化度は強い。	—	II b
SI34	D6	SI23と同じ	1.3	0.9	—	24.371	段丘礫をはいでその中身を加工して使用。赤化度は強い。	トレンチャーで破壊されている。	II b
SI3	D4	ATを含む黄褐色土の上部	1.0	1.4	—	7.710	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。	トレンチャーで破壊されている。	II b
SI4	E3	ATの堆積が薄い箇所の黒褐色土上。	4.3	3.0	—	38.649	少し大きめの礫が散漫に散らばる。	赤化度は強い。	II b
SI5	E4	AT上の黒褐色土中	1.2	1.9	—	4.040	板状にわれた礫使用。赤化度は強い。	—	II b
SI10	D5	AT流れ込みそう上の褐色土中。	1.9	0.9	—	13.359	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。	—	II b
SI12	F4	AT上の黒褐色土中。	3.2	2.4	—	8.892	小さな破損礫構成されていた。赤化度は弱い。	—	II b
SI39	D6	V層下部で検出	1.0	0.7	—	4.612	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。	—	II b

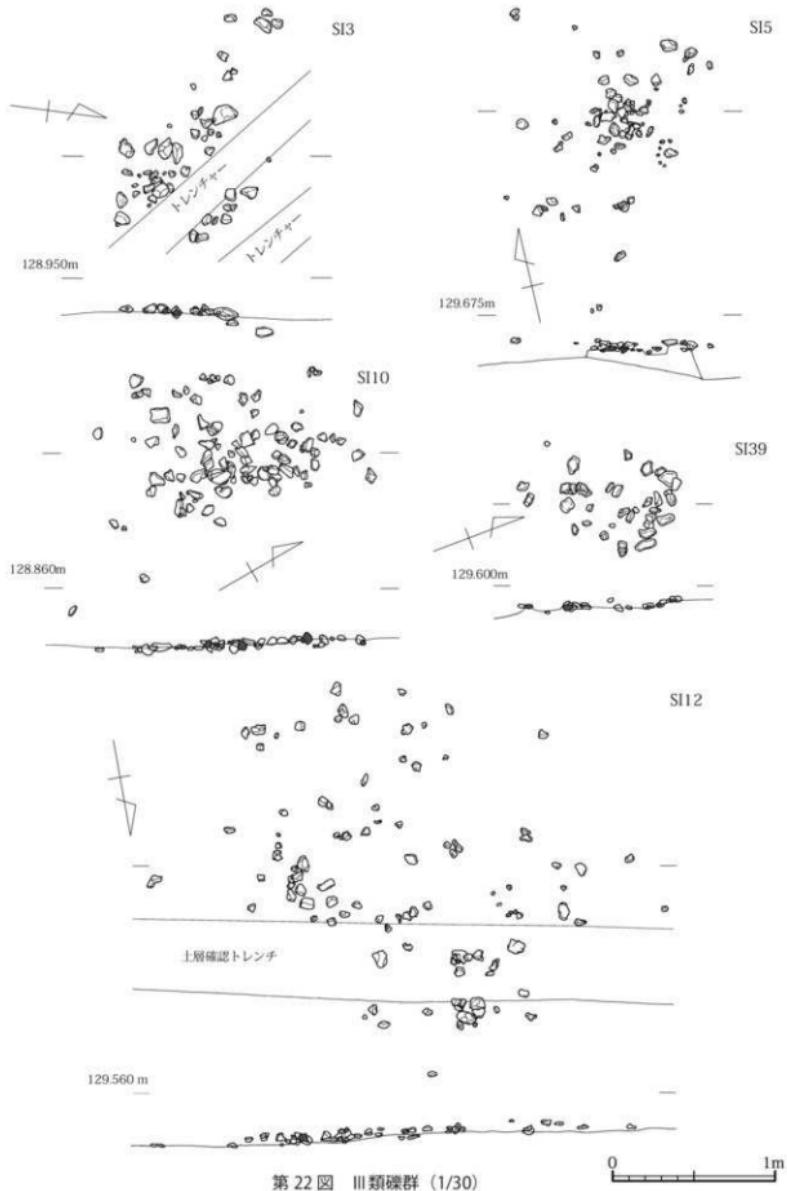


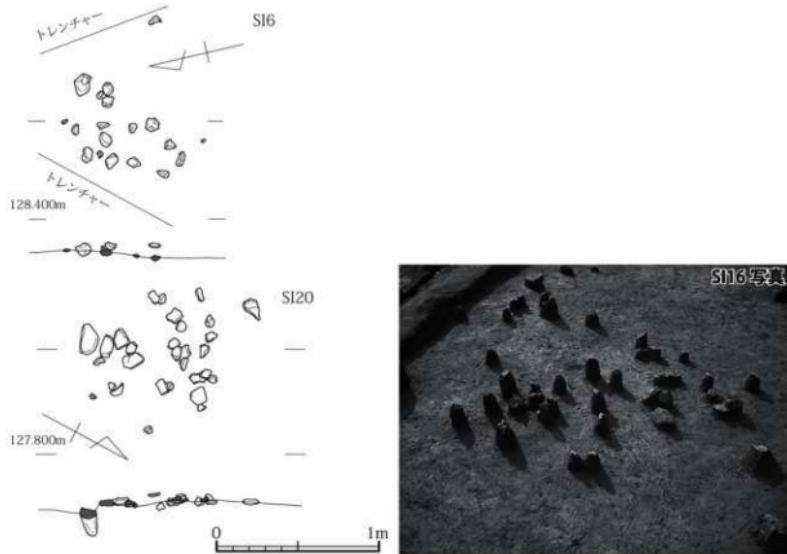
第19図 I類礫群1 (1/30)



第20図 I類礫群2 (1/30)



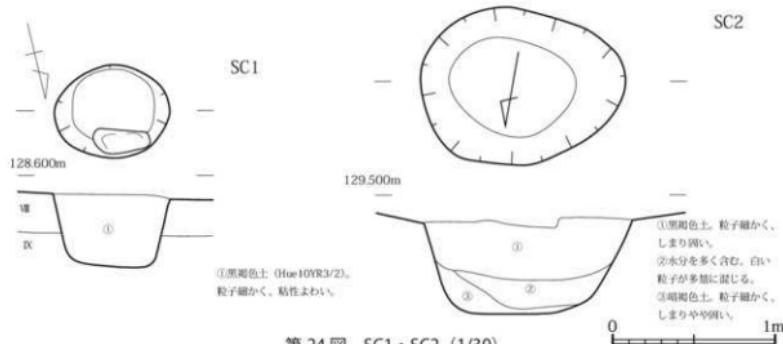




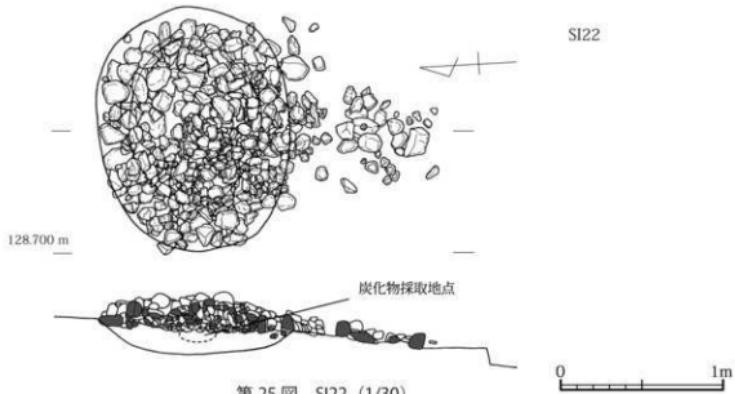
第23図 IV類砾群 (1/30)

第4表 IV類、その他の砾群観察表

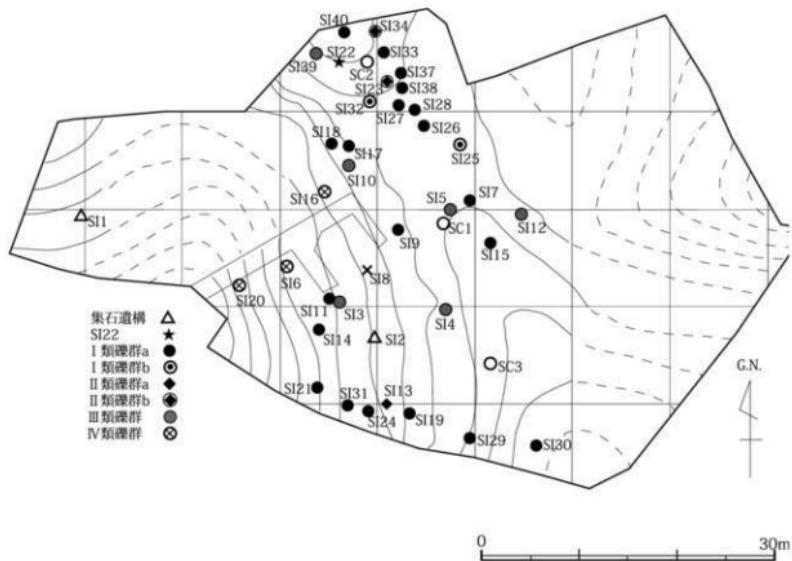
遺構名	Gr.	検出層	最大長 (m)	最大幅 (m)	掘込 (m)	砾重量 (g)	砾の状態	その他の所見	類
SI6	D4	ATの二次堆積の黄	0.9	1.0	—	3.658	小形の破損砾で構成。		IV
SI16	D5	褐色土中の ATの二次堆積の褐	—	—	—	9.814	赤化度は強い。 小形の破損砾で構成。 点データで記録。		IV
SI20	C4	ATの二次堆積黄褐	2.2	1.7	—	7.874	小形の破損砾で構成。		IV
SI8	D4	黒褐色土の堆積した	—	—	—	非計測	赤化のみられない入頭	落ち込みの可能性。	
SI22	D6	Ⅳ層中。上部は K-Ahは消失	2.1	1.5	0.25	175.406	段丘砾に復元できた。 大の分離。	炭化物。黒色理土。 非常に強い赤化度	



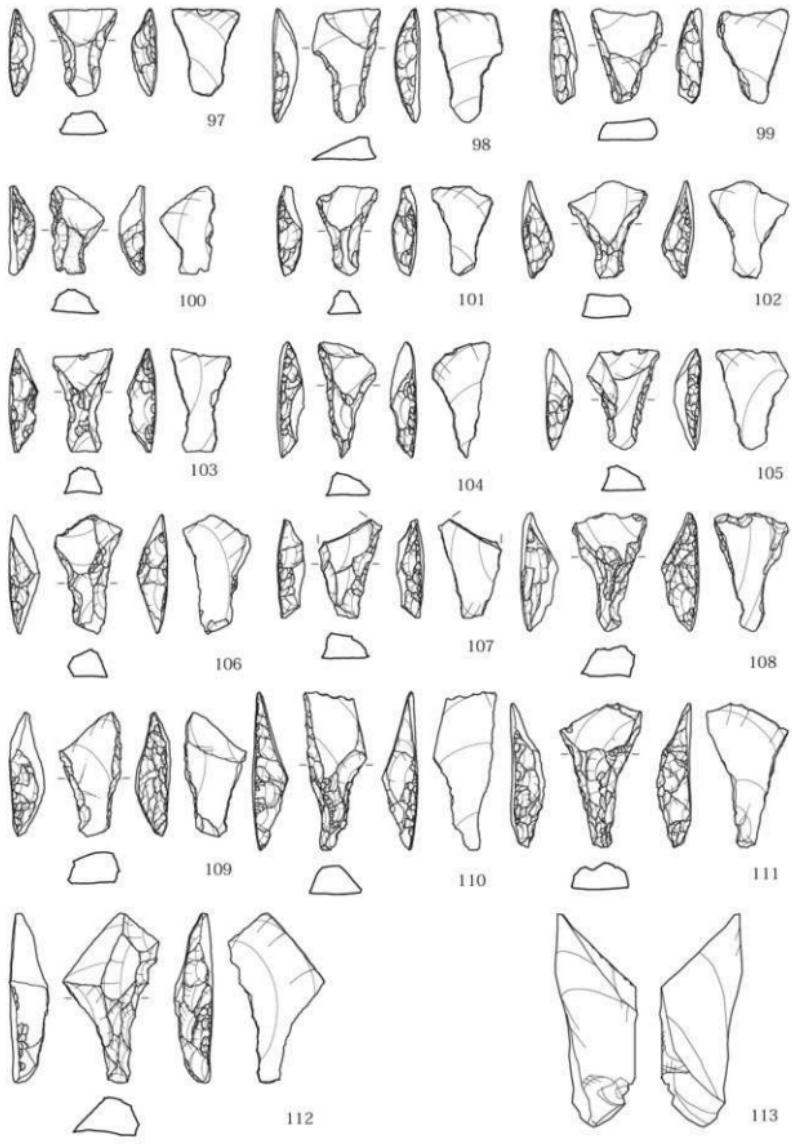
第24図 SC1・SC2 (1/30)



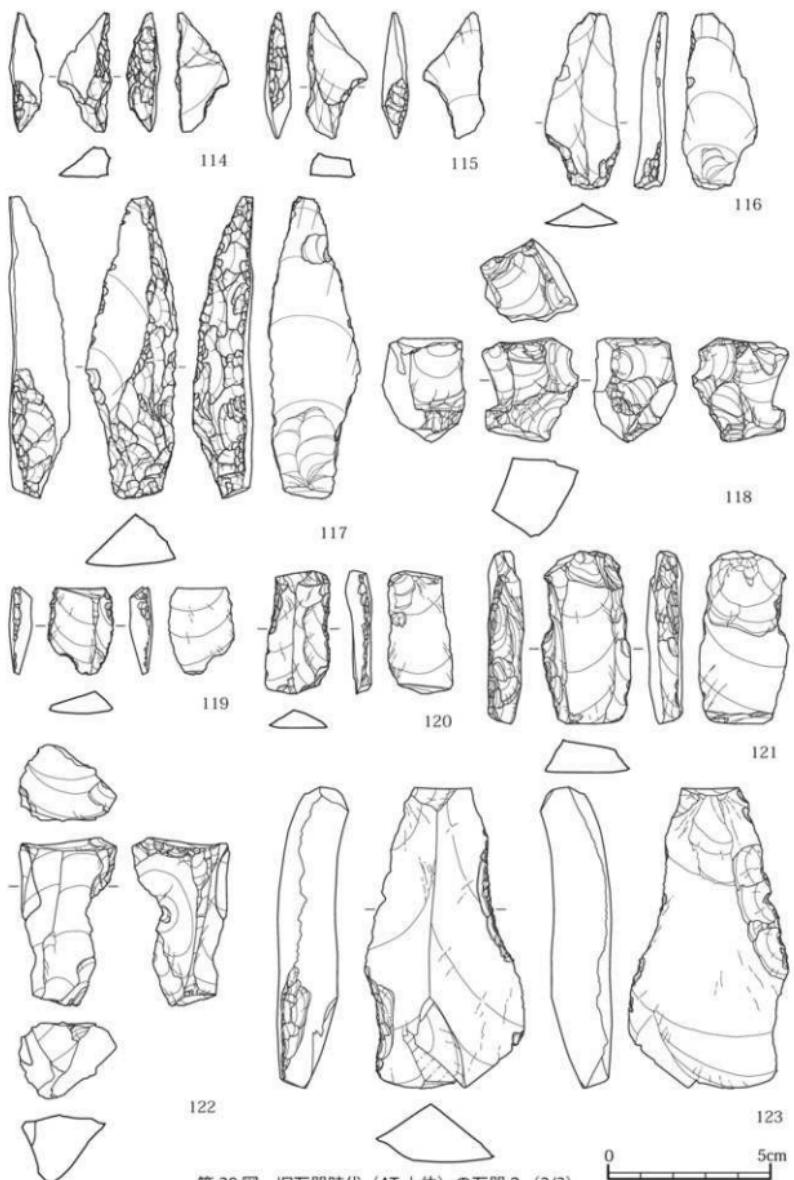
第 25 図 SI22 (1/30)



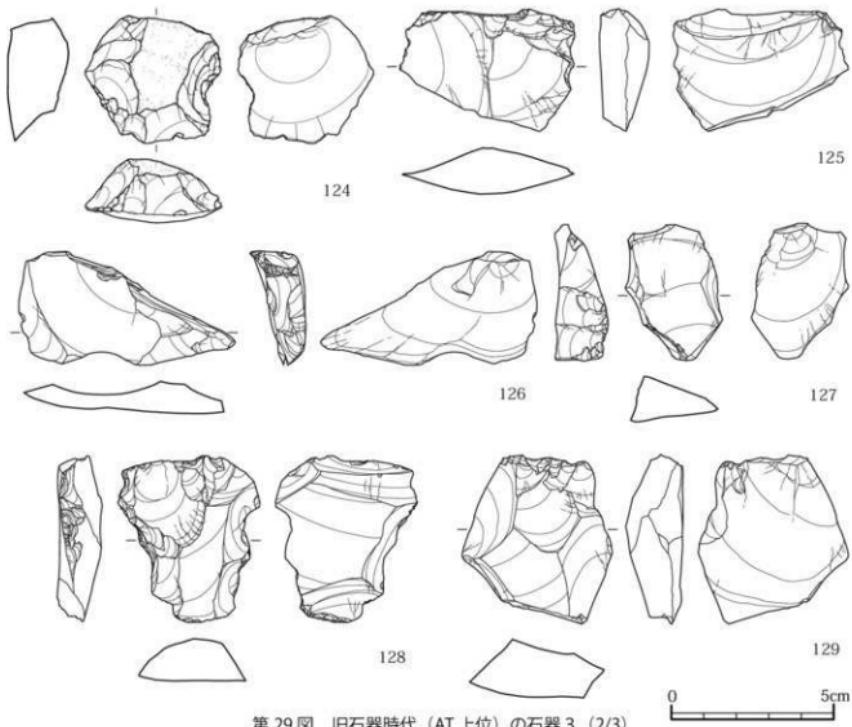
第 26 図 AT 上位遺構配置図 (1/500)



第27図 旧石器時代(AT上位)の石器1 (2/3)



第28図 旧石器時代(AT上位)の石器2(2/3)



第29図 旧石器時代(AT上位)の石器3(2/3)

がある。これは、直径約15mで深さ約25cmの掘込みを有し、上部に礫が盛り上がる様に密集している。その規模と形態からは、通常集石遺構と判断されるであろう。

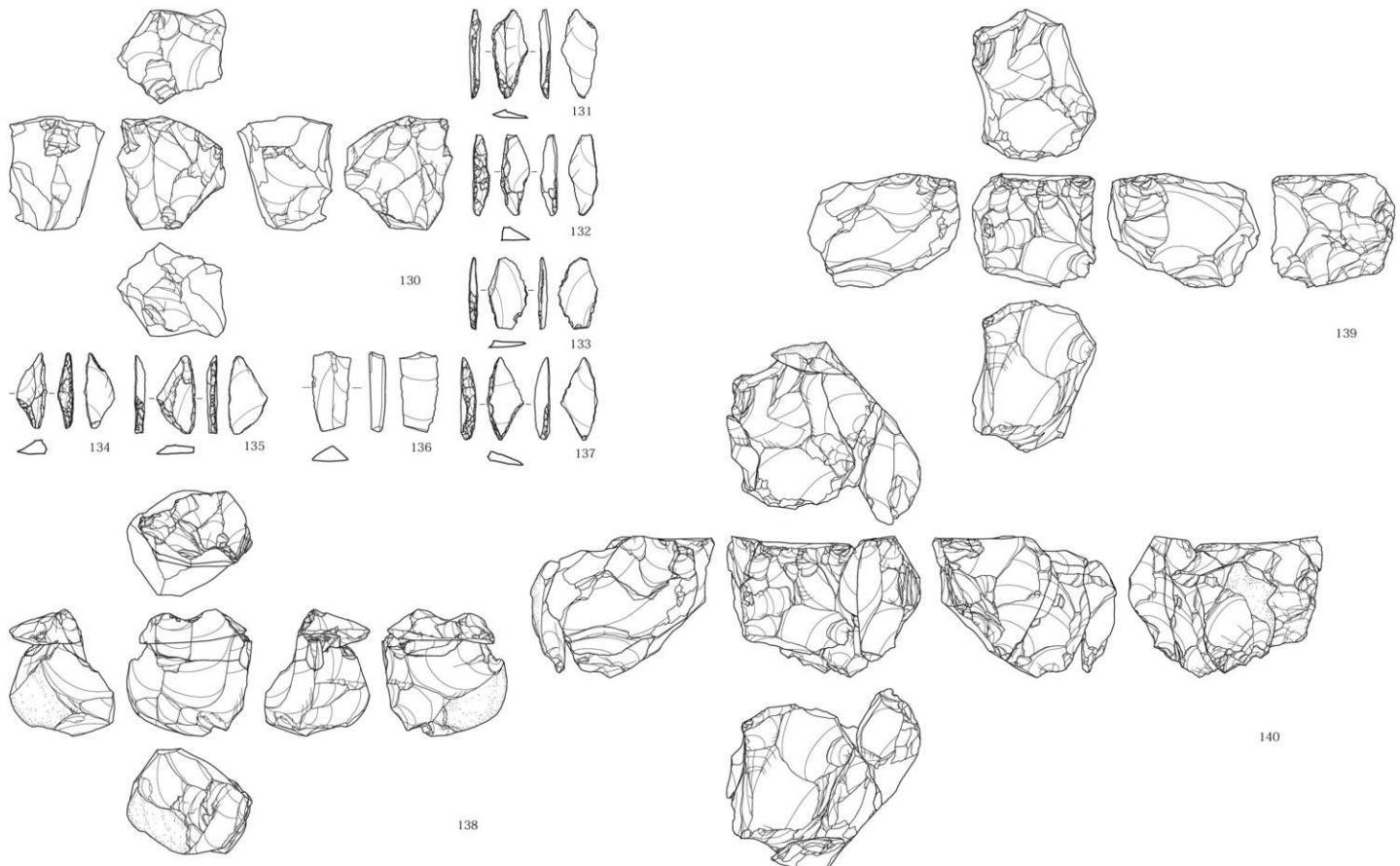
しかし、掘込み内で出土した炭化物をAMSによる年代測定にかけたところ、補正14C年代14240土60年BP、曆年代BC15120という値がでた。これは細石刃期に比定される年代である。周囲からは出土した遺物は、旧石器であった。炭化物は直径1cm程度で分析資料としては、決して大きいとはいえない。

第53図は調査区内の礫重量の分布を表している。礫群が存在する周辺に礫が多く認められる。そのため、周囲の礫と同化を行おうと思う礫群との線引きにゆれが生じた。特にD4・E4Grでは、二次的に流れ

たと考えられる礫も多く存在した。逆に、D6・E6Grは周辺に礫が多く存在するものの、I・II類礫群のような局所に密集した礫群が多かったため、判断が容易であった。D5・E5Grはその中間の様相を呈していた。A4Grの周辺礫は明らかに二次的に流れ込んだものと判断できた。

土坑

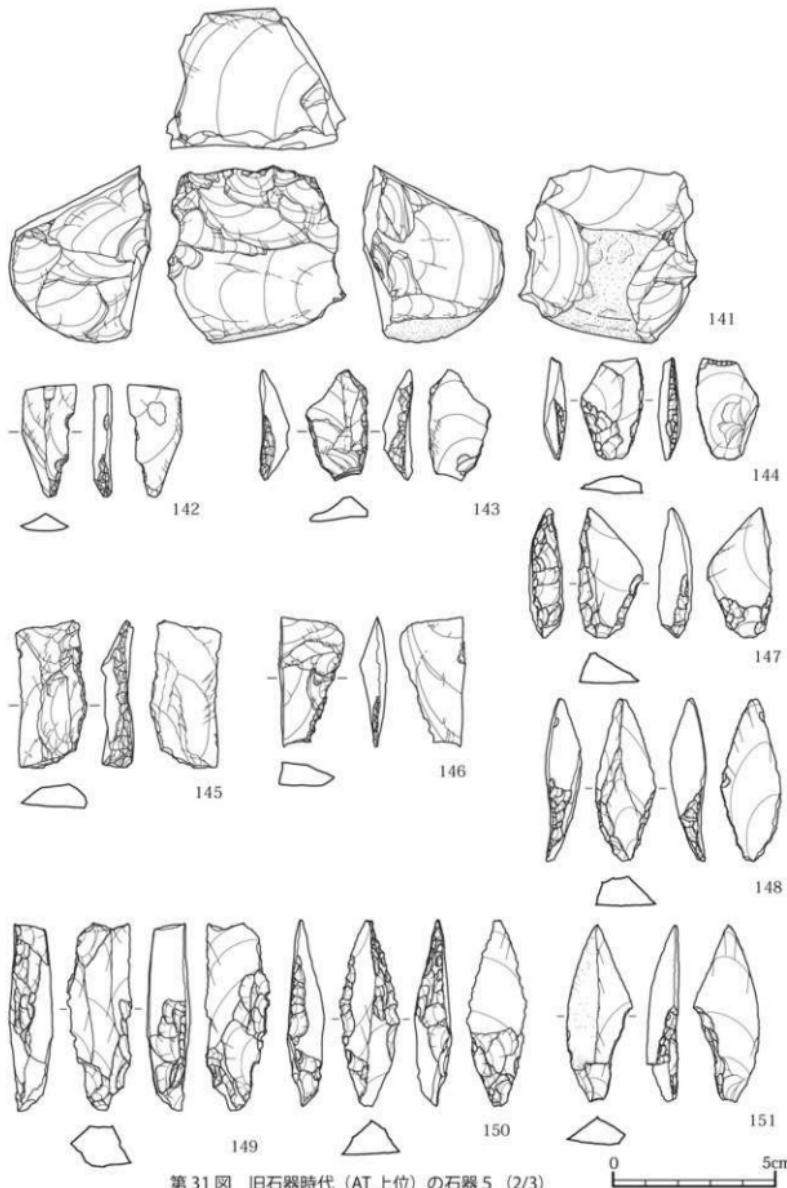
SC2はVI層中で検出された。SC1はVII層上面で認識したが、本来の検出面はSC2と同じと考えられる。SC2・3以外にも同様の土坑を確認したが、図化していない。調査中に遺構かどうかの判断を迷ったためである。土坑の性格は不明であるが、近隣の朝倉遺跡(未刊行)でも同様の遺構が出土している。



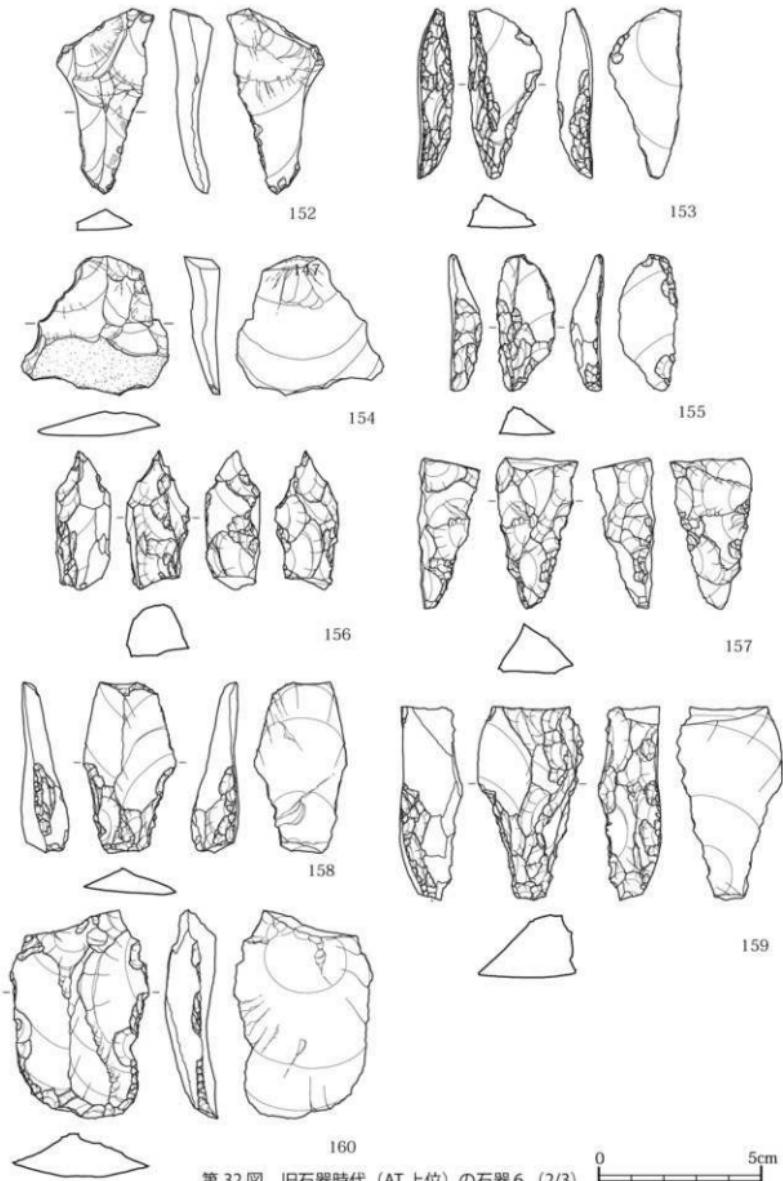
第30図 旧石器時代(AT上位)の石器4 (2/3)

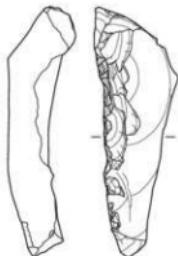
0 5cm

37 ~ 38

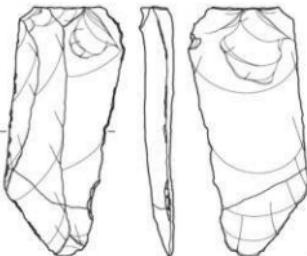


第31図 旧石器時代(AT上位)の石器5 (2/3)

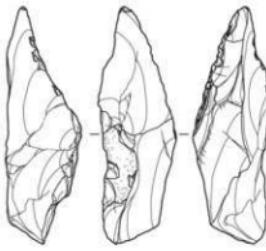




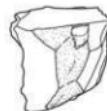
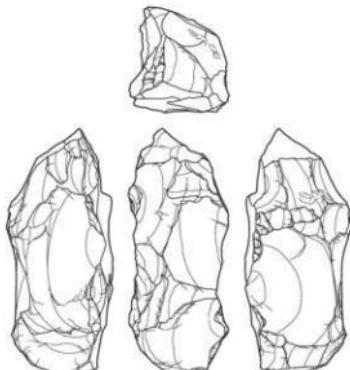
161



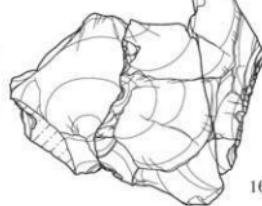
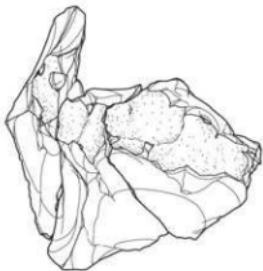
162



163



164



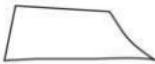
165

第33図 旧石器時代(AT上位)の石器7 (2/3)





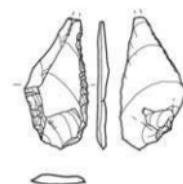
166



167



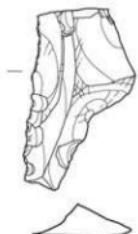
168



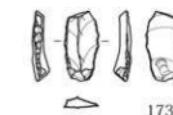
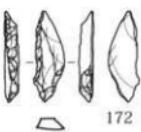
169



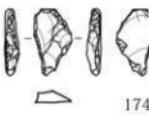
170



171



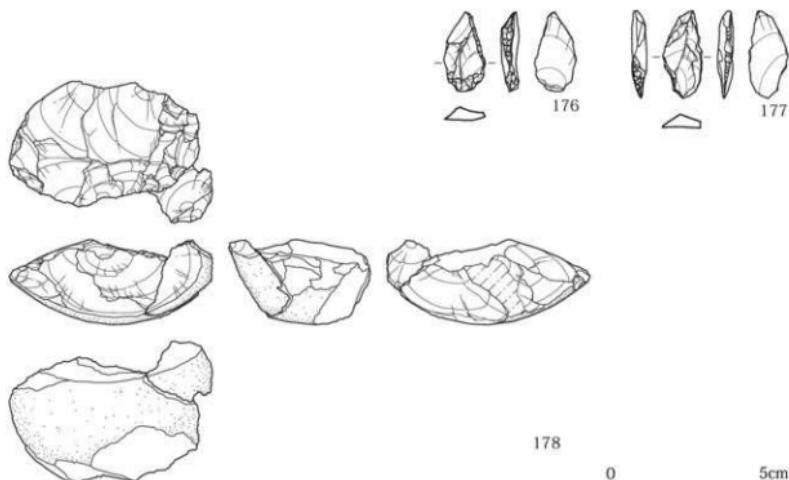
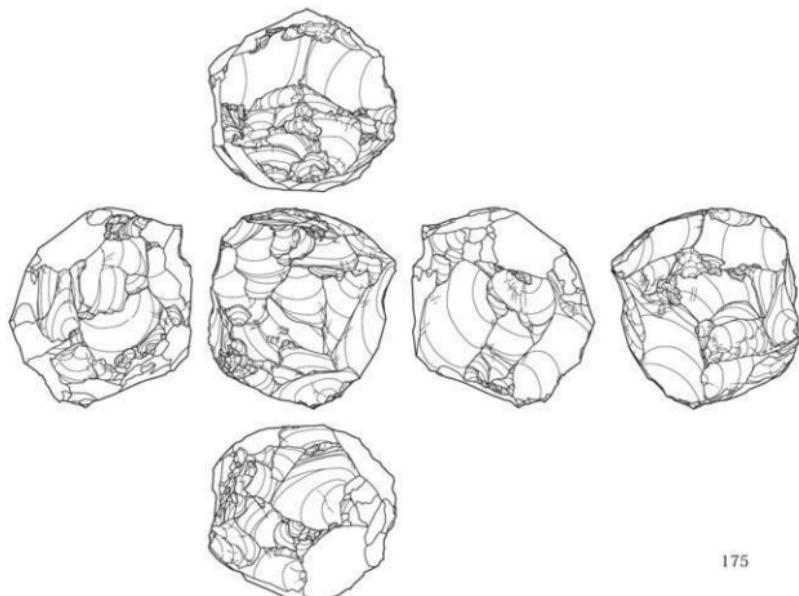
173



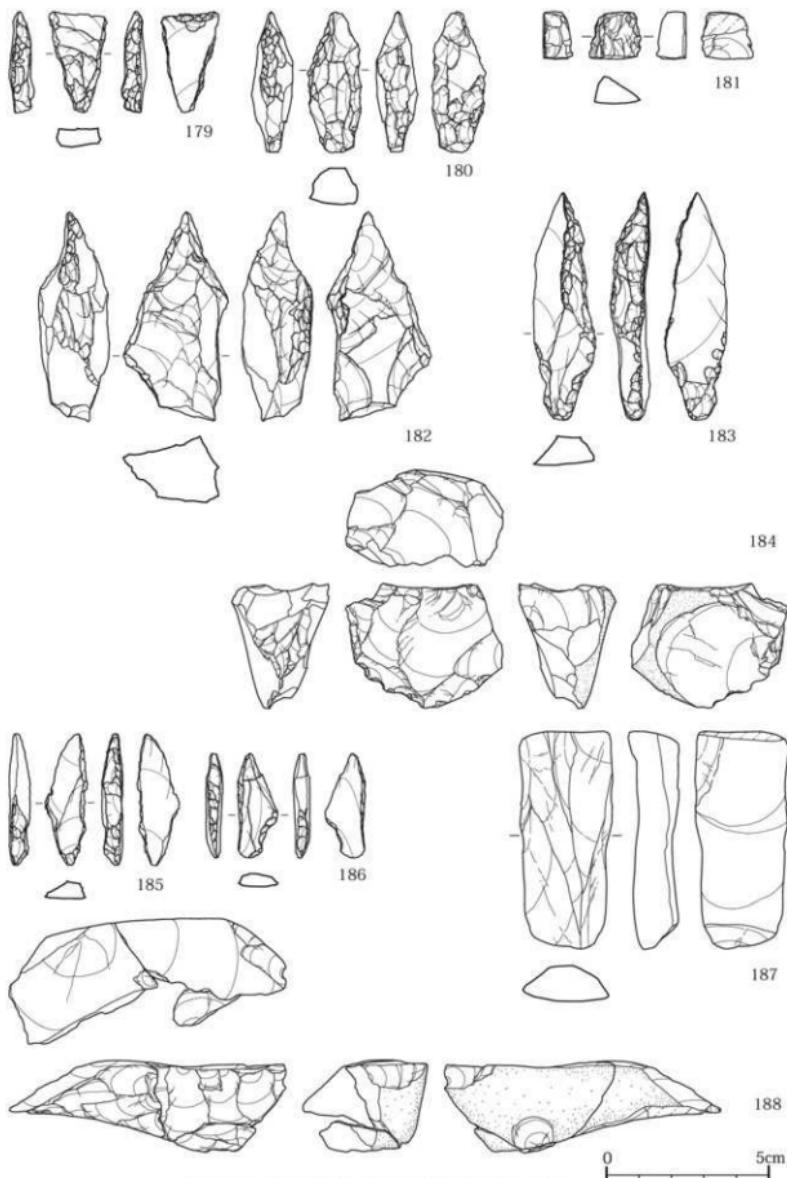
174



第34図 旧石器時代(AT上位)の石器8 (2/3)

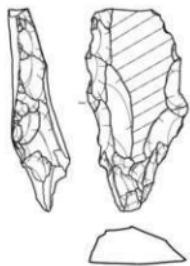


第35図 旧石器時代(AT上位)の石器9 (2/3)

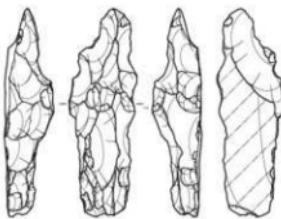


第36図 旧石器時代（AT上位）の石器 10 (2/3)

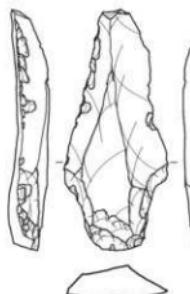
0 5cm



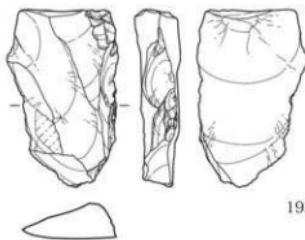
189



190



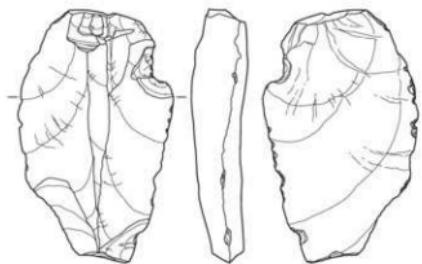
191



192



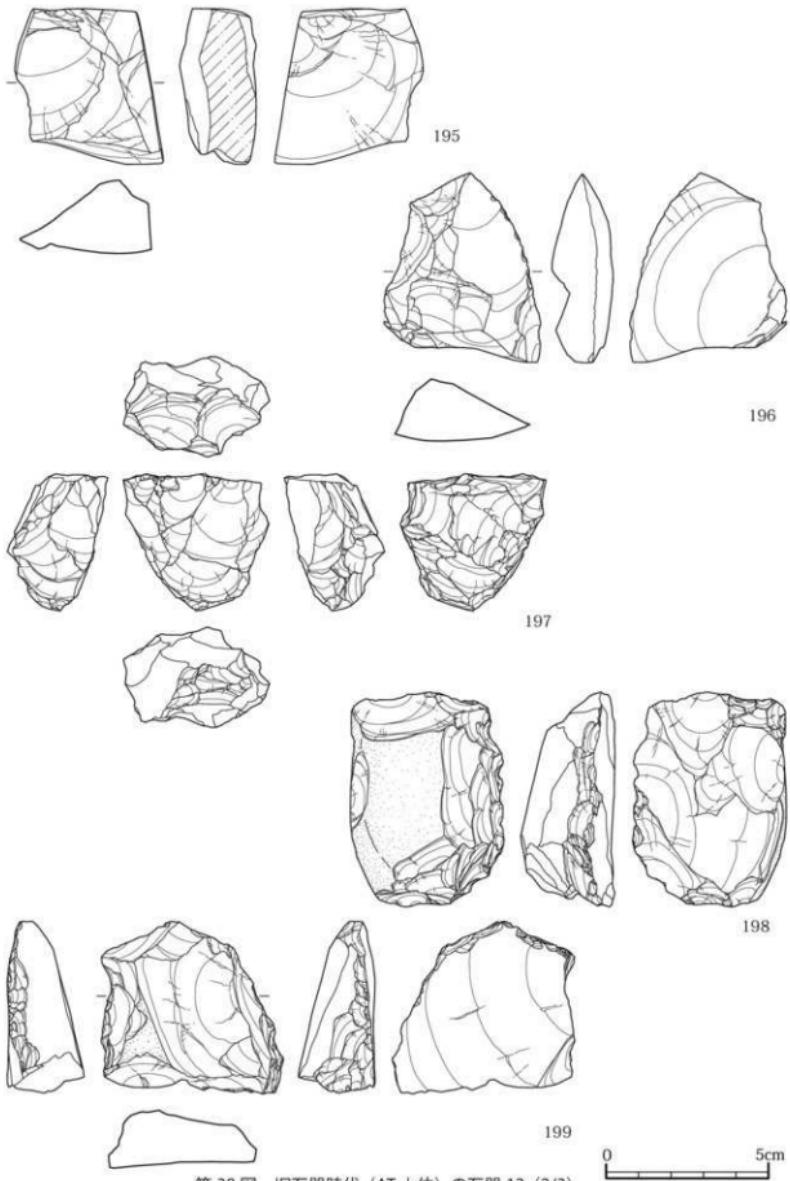
193



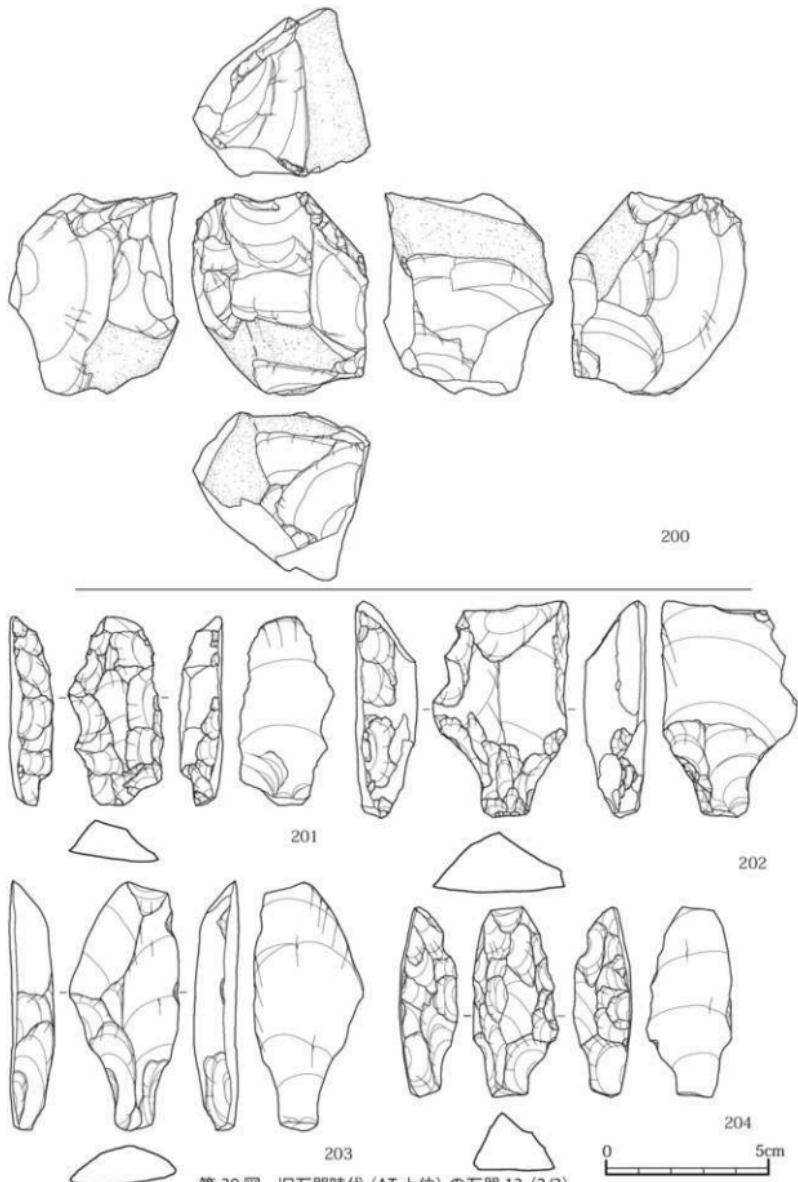
194

第37図 旧石器時代(AT上位)の石器11(2/3)

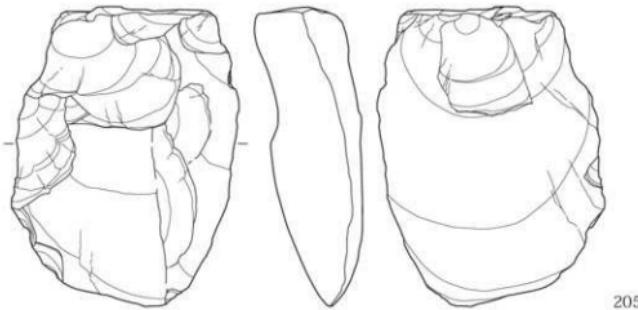




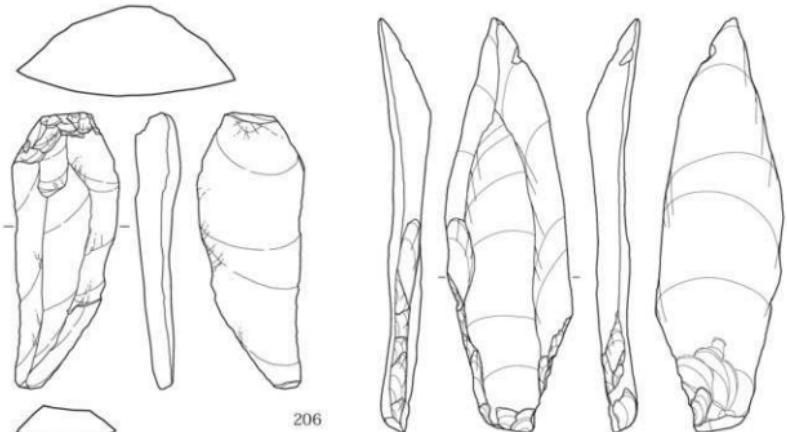
第38図 旧石器時代(AT上位)の石器 12 (2/3)



第39図 旧石器時代(AT上位)の石器 13(2/3)

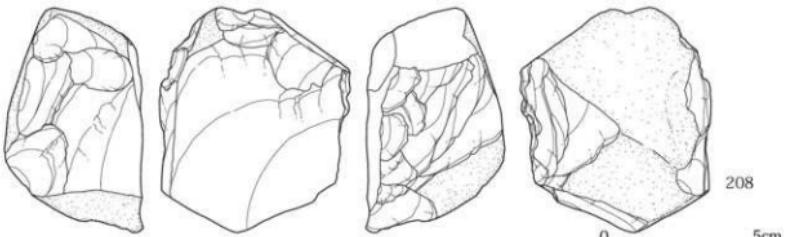
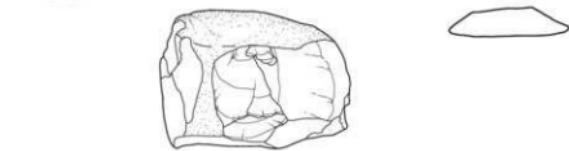


205



206

207

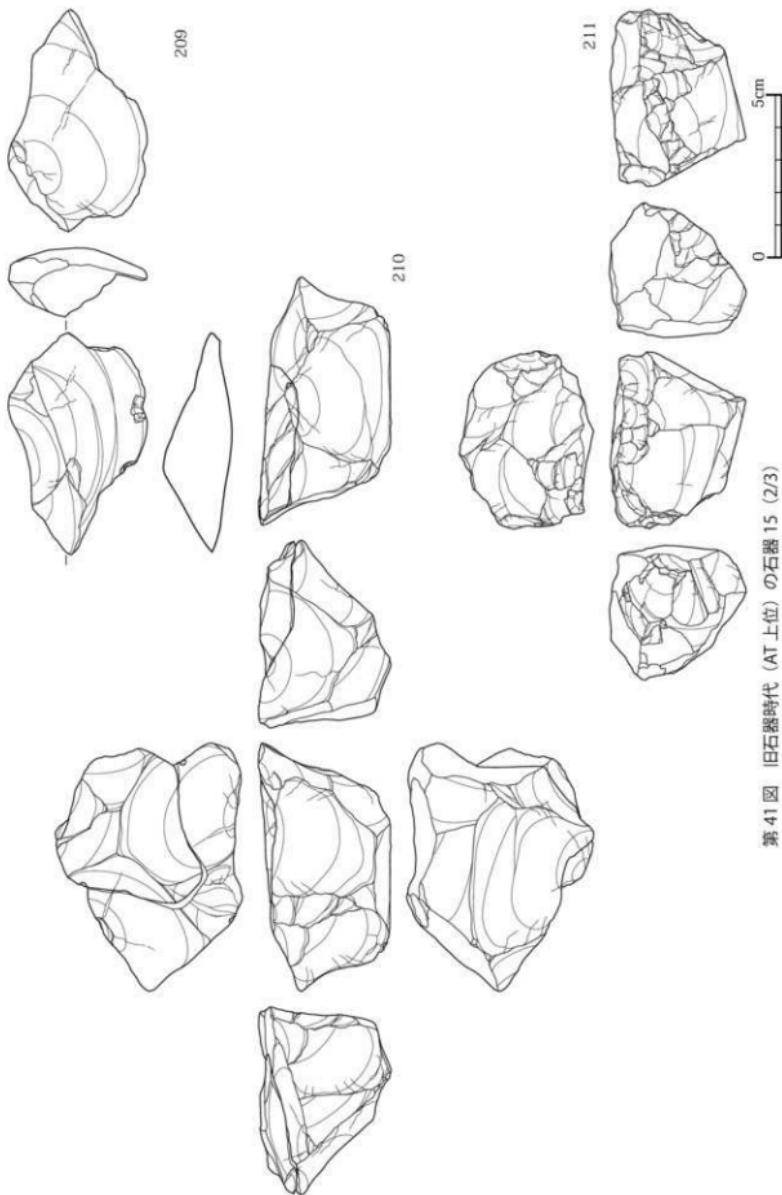


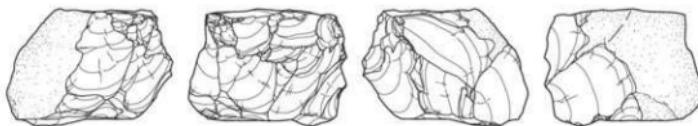
208

0 5cm

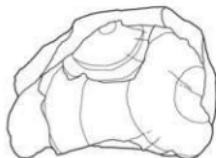
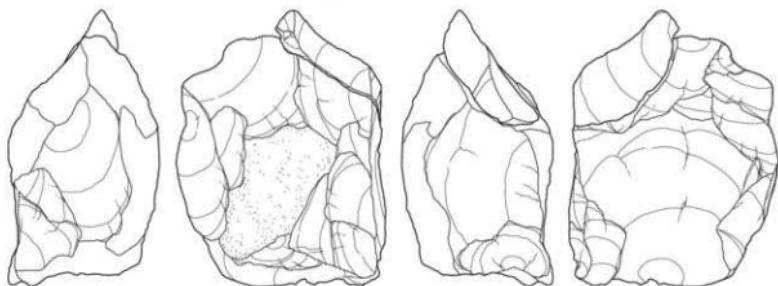
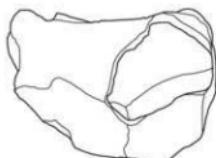
第40図 旧石器時代(AT上位)の石器14(2/3)

第41図 旧石器時代（AI上位）の石器15 (2/3)

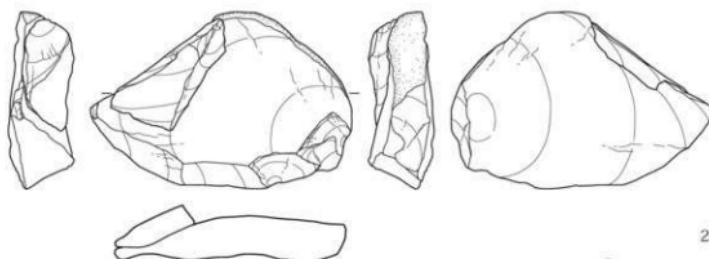




212



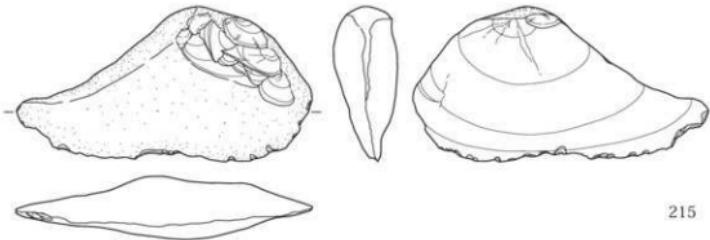
213



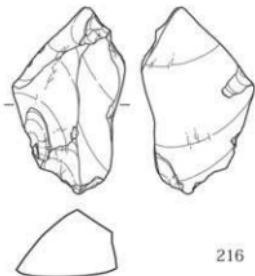
214



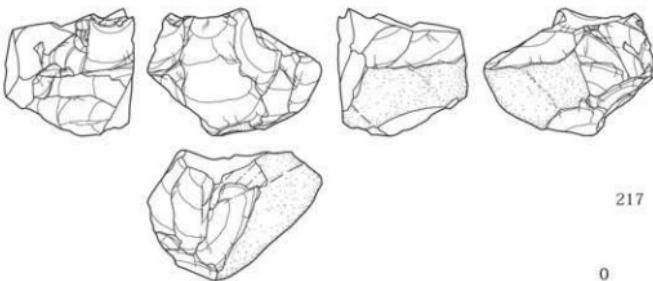
第42図 旧石器時代(AT上位)の石器16(2/3)



215



216



217



第43図 旧石器時代(AT上位)の石器 17 (2/3)

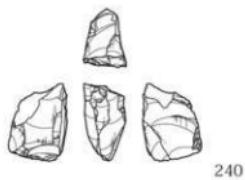
【遺物】

第31図148～150はVI層から出土した。151はV層から出土した。細石刃関係の遺物はまとめて報告している。第44図218～240は黒曜石である。218～220は器種のみから細石刃期とはいきれないが、素材となる黒曜石が他の細石刃核と同様であったため、このカテゴリーの初めにもってきた。第45図240は表面がざらつき青灰色を呈している。北部九州産と考えられる。他に同じ石材としては石核とチップが見つかったが強化の度合いが違う。

AT上位石器群を最も特徴づけるのは、台形石器の一群・狸谷型ナイフ形石器ほか各種のナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・大形縦長剥片素材のスクレイパー類・敲石等である。石材利用には流紋岩・ホルンフェルスを中心に、特異なものとして尾鈴山酸性岩類製石器の一群がある。個別石器については図表を参照いただくとし、主な剥片剥離について触れておく。138は寸詰まりの縦長剥片を剥離し、90°打面を入れ替え、引き続き同等の剥片剥離を進める。140は適宜打面転移しつつ不定形剥片を剥離する。



第44図 細石刃文化期の石器1 (2/3)



240



241



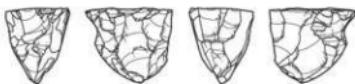
242



243



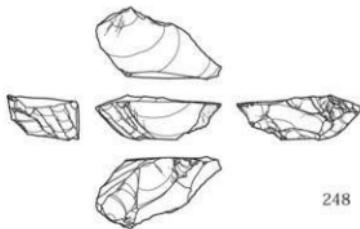
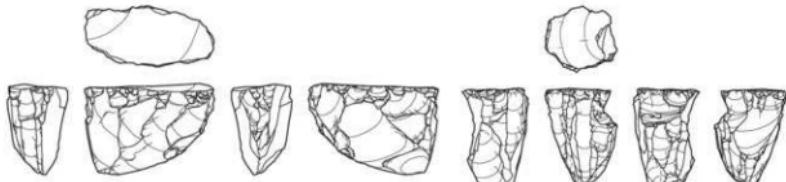
244



245



246



248



247



第45図 細石刃文化期の石器2 (2/3)



249



250



251



252



253



254



256



255



257



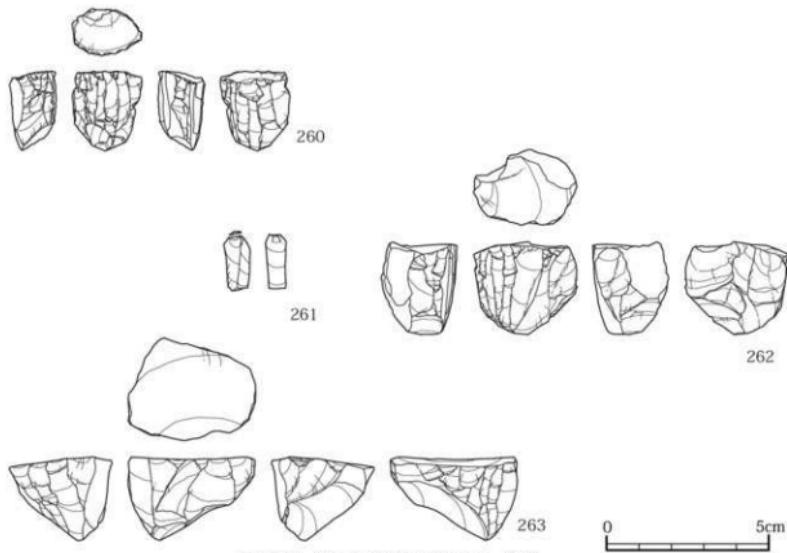
258



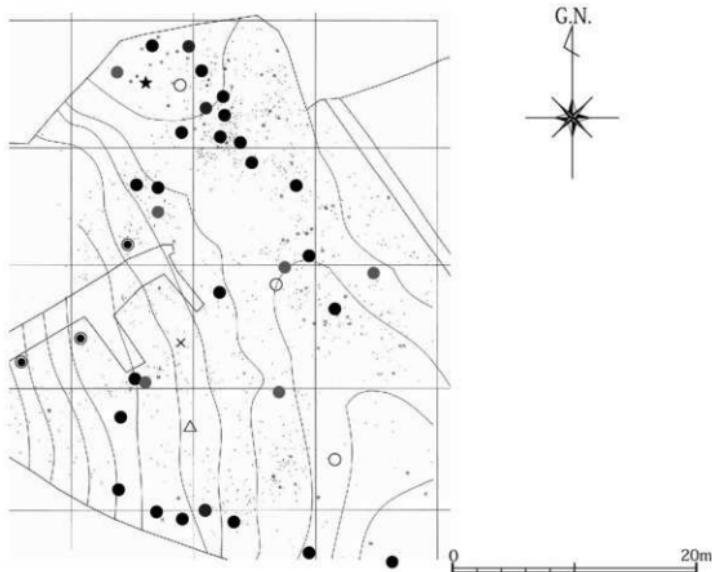
259



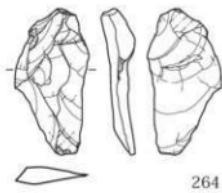
第46図 細石刃文化期の石器3 (2/3)



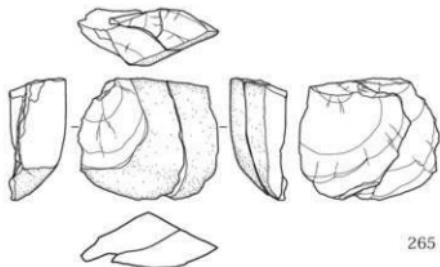
第47図 細石刃文化期の石器4 (2/3)



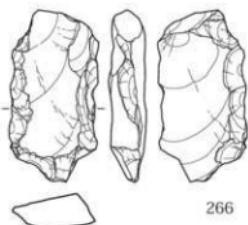
第48図 AT上位遺構と遺物の関係図 (1/400)



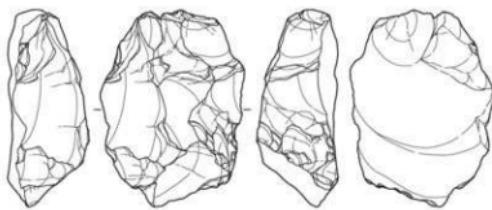
264



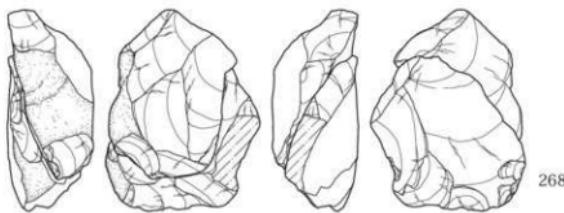
265



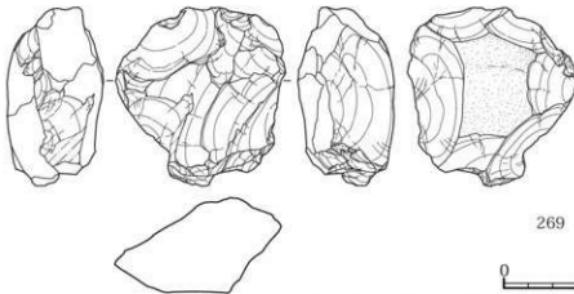
266



267



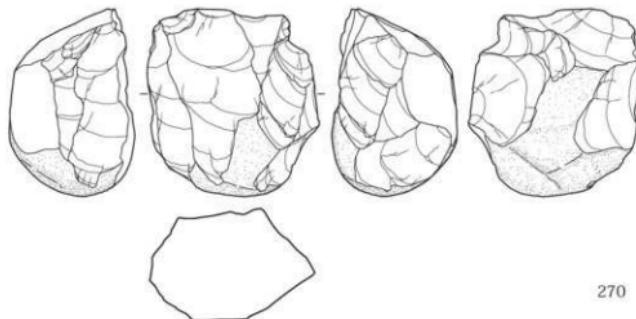
268



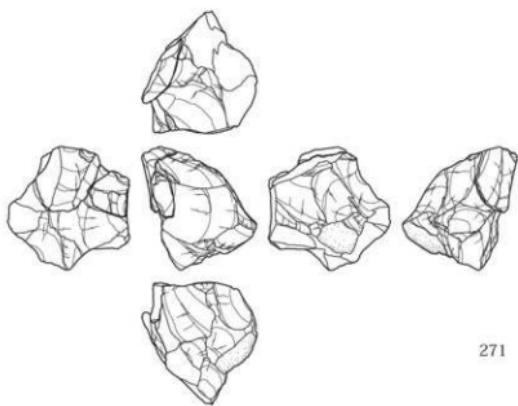
269



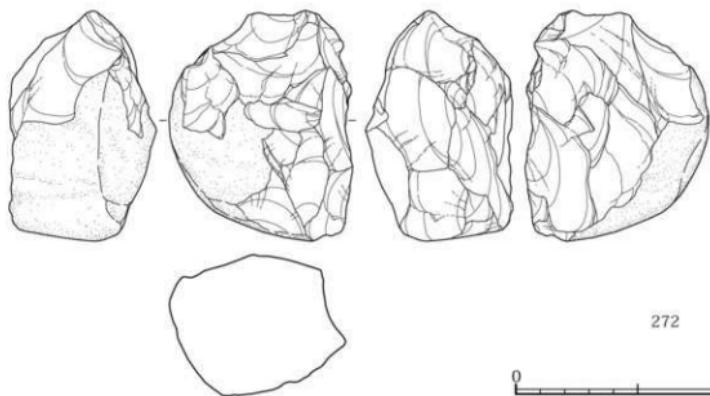
第49図 旧石器時代(AT上位)の遺物18(1/2)



270



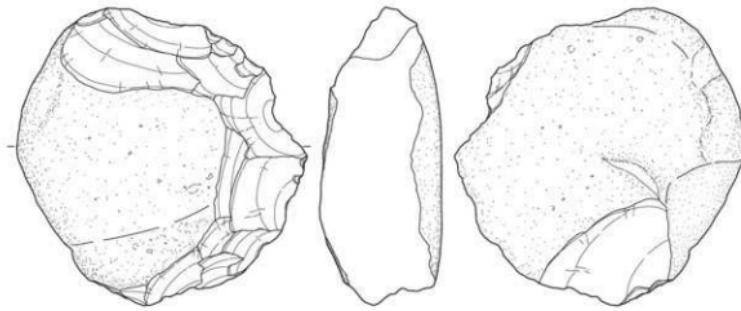
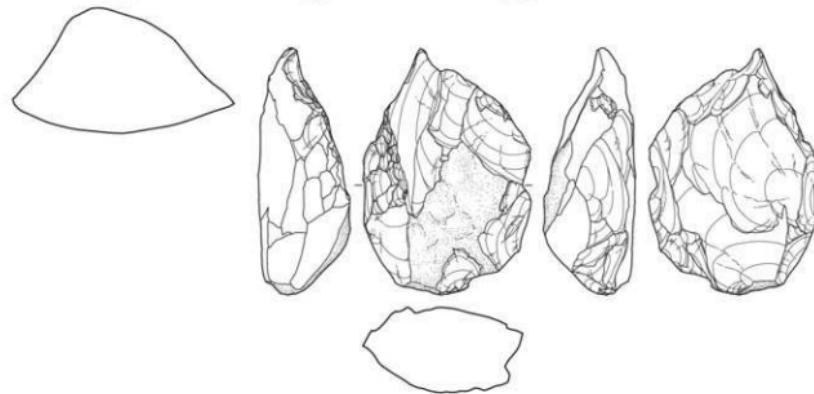
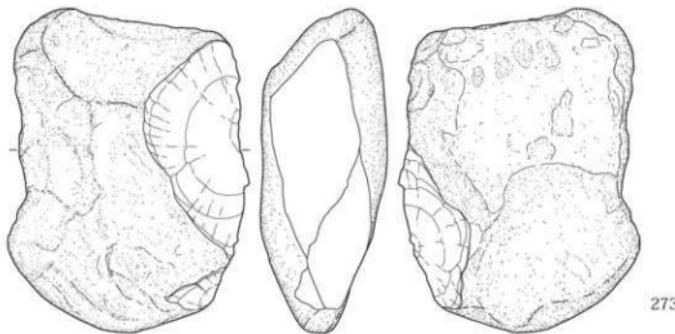
271



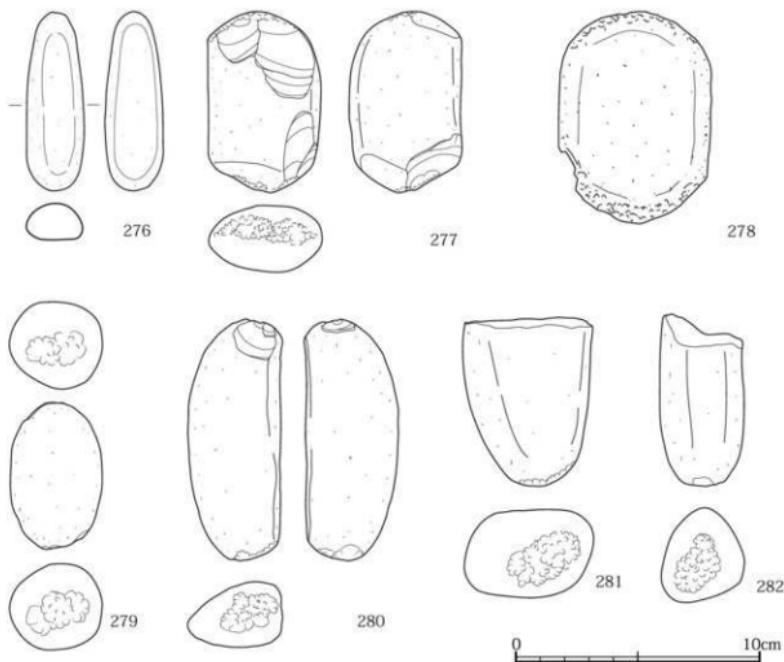
272

0 10cm

第50図 旧石器時代（AT上位）の石器 19 (1/2)



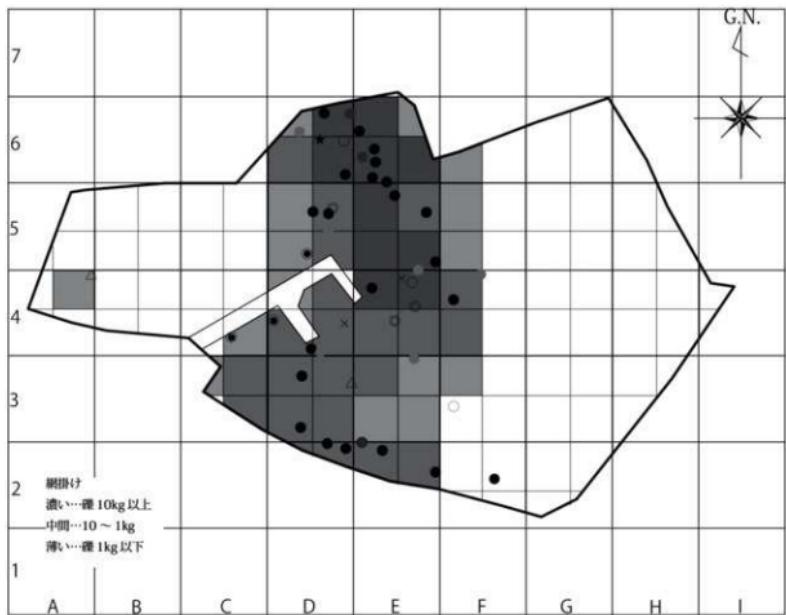
第51図 旧石器時代(AT上位)の石器 20 (1/2)



第52図 旧石器時代(AT上位)の石器21(1/2)

第5表 AT上位出土未掲載遺物観察表

No.	Gr.	器種	所見
K4	一括	石核	直径5cmほど。小型の剥片を剥離。植器に転用した可能性もある。
K5	E3	石核	直径4cmほど。打面調整はない。小型の剥片を剥離したと考えられるが、兩段状に剥離している。末端は尖る。



第53図 AT上位構造と礫分布の関係

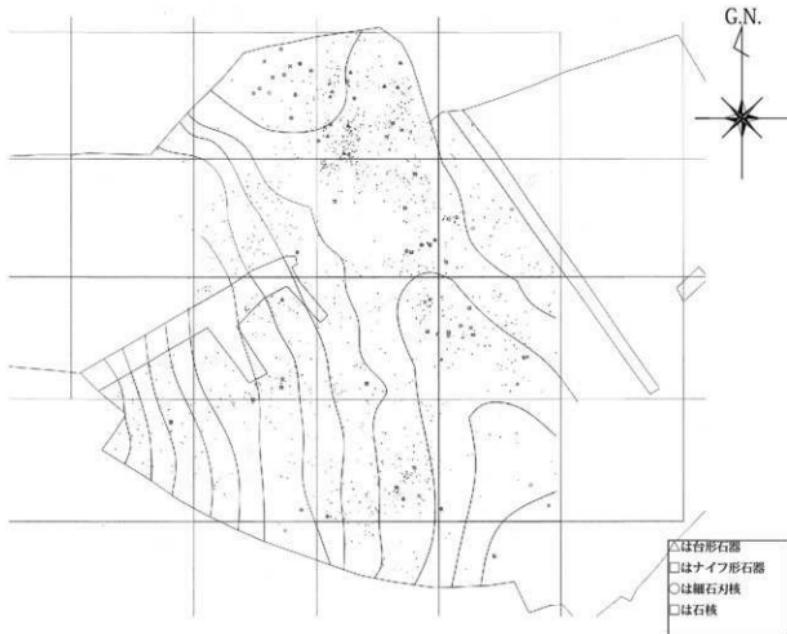
141は幅広剥片等を剥離する。164は最終的に先行剥離面を打面として幅広剥片を剥離する。165は石の目に沿った非常に平滑な打面の獲得には成功するも、その後の剥片剥離はことごとく階段状剥離となっている。そこで剥離軸を石の目に沿った方向に打面を変え、縦長剥片を剥離している。175はあまり打面を固定することなく、90°あるいはそれを超える剥離角で剥離する。剥離は石剥片となる。

尾鉢山酸性岩類製石器群は転石利用である。270のように打面作出の後、縦長剥片を連続して剥離するもの(270)・打面と作業面を交互に入れ替えつつ剥片剥離するもの(礫器272)・礫面より直接剥片剥離するもの(273・礫器275)がある。得られた剥片の一部は粗い剥離が加えられるものもある(266)。

細石刃文化期は細石刃・細石刃核で構成される。

本来伴った可能性のあるスクレイバー類や剥片・石核については明確に分離困難である。黒曜石1を用いる細石刃生産は、元々小さい原石こともあって小規模である。礫形状によっては石核成形を介在しつつ打面作出をし、打面調整の上、細石刃剥離をする。

流紋岩1・2を用いる細石刃生産は、いわゆる船野型を主とする。打面転移は一部を除いて見られず、平滑な打面から打面調整なく細石刃剥離をする。255のように細石刃剥離面と打面のなす角度が90°を超えるものや、258のように余すところなく細石刃生産を継続するものも見られる。252・256は作業面再生あるいはアクシデンタルなものである。247畦原型であるが、通常平坦な打面に斜め方向の打撃が加えられ、西脇法の影響がみられる。



第 54 図 AT 上位遺物分布図 (1/400)

第5節 繩文時代

縄文時代に帰属する遺構・遺跡は数が少なかった。土器は摩滅した破片点数が埋没谷から見つかったのみであった。そのうち型式が判斷できるものに、厚手の塞ノ神式土器があった。小片であり、本遺跡の性格を代表すると考えられなかったため、図化しなかった。

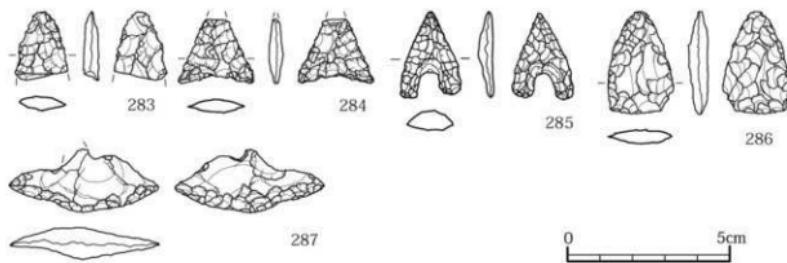
図化した石器の内、撹乱以外から出土したものは 283・286 である。302 は安山岩製の石匙で上部が欠損している。表土下のⅢ層から出土した。286 は全面風化している。これらの遺物は早期に属するのか、草創期に属するのか明確ではないが、包含層出土のものは早期の可能性が高いと考えられる。

S1 と S2 は確認調査中に検出されていた。両者とも掘込みを持ち、礫は上部に盛り上がるよう集積され、掘込み中には密集していない。円形の半分に

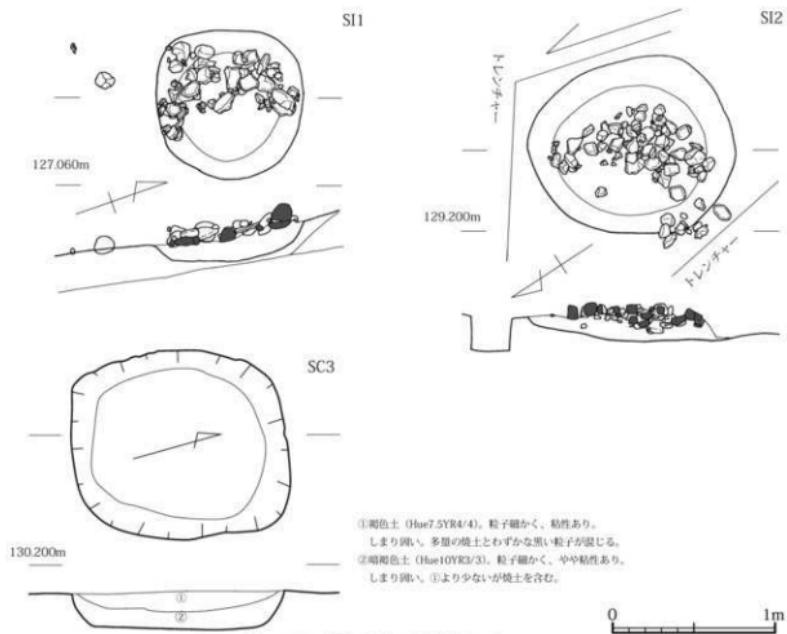
礫が残っていないのは、意図的に掻きだした結果かもしれない。

掘込み中からは炭化物が見つかり、そのうち S1 の年代測定と樹種同定を委託して行った。S2 出土のものは細片のため分析に適さなかった。年代は AMS で補正 14C 年代 12090 ± 60 年 BP、曆年代は BC12150 であった。これは草創期といってよい年代である。基本土層でいうと X 層上面で検出されており、その上面にローム層の二次堆積物かぶさっていた。遺構の周囲から、時期判断の材料となるような遺物は出土しなかった。樹種同定の結果はコナラ節であった。

SC3 は焼土を含む土坑である。調査時は S2 と名称を付していたが、整理の段階で SC3 とした。検出層から概期に属すると判断した。同様の遺構が新富町東原原遺跡等でも見つかっている。



第55図 繩文時代の遺物 (2/3)



第56図 繩文時代の遺構 (1/30)

第6表 集石遺構・土坑観察表

遺構名	Gr.	棟出層	最大長 (m)	最大幅 (m)	掘込み (m)	礫重量 (g)	礫の状態	その他の所見
SI1	A4		0.9	0.6	0.20	21,188	板状に割れた尾跡山醜性岩。赤色度は低い。	炭化物が多く混じる。理上は褐色だが、炭化物でしみのように黒色化している感じ。
SI2	D3		1.1	0.9	0.18	27,506	—	微細な炭化物が多く混じる。黒色理上。
SC3	F3		—	—	—	—	—	—

立野第5遺跡における放射性炭素年代測定と樹種同定

試料と方法

試料名	地點・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SI-1 集石遺構	炭化物	酸-7%削・酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.2	SI-22 集石遺構	炭化物	酸-7%削・酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.3	E4 グリッド, IX層	炭化物	酸-7%削・酸洗浄, 石墨調整	AMS

測定結果

試料名	測定No.	^{14}C 年代 (Beta-) (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)
No.1	212956	12120 ± 60	-26.6	12090 ± 60	交点: cal BC 12150 1 σ : cal BC 13200 ~ 12810, 12350 ~ 12100 11990 ~ 11890 2 σ : cal BC 13260 ~ 12770, 12370 ~ 12060 12020 ~ 11880
No.2	212957	14250 ± 60	-25.5	14240 ± 60	交点: cal BC 15120 1 σ : cal BC 15420 ~ 14800 2 σ : cal BC 15490 ~ 14740
No.3	212958	26640 ± 160	-25.5	26630 ± 160	-

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 割定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。INTCAL98 では、約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ完全ではなく、今後も改善される可能性がある。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率) と 2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線上に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ・2 σ 値が表記される場合もある。

樹種同定

試料	地點・遺構	結果 (学名/和名)
1-1	SI-1 集石遺構	Fagaceae ブナ科
1-2	SI-1 集石遺構	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
3-1	E4 グリッド, IX層	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
3-2	E4 グリッド, IX層	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節

(1) 試料

試料は、SI-1 集石遺構および E4 グリッドの IX 層から採取された炭化材 4 点である。

(2) 方法

試料を削割して新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柾目)、接線断面 (板目) の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科

横断面: 年輪のはじめに大型の道管が 1 ~ 数個配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晚材にかけて道管の径は急速に減少する。

放射断面: 道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節には二次木要素であるコナラ、カシワ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 1m、径 60cm ぐらいに達する。

ブナ科 Fagaceae

横断面: 部分的ではあるが大型の道管と火炎状に配列する小道管が見られる。

放射断面: 放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面: 放射組織は單列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかであるが、試料が小片で広範囲の観察が困難であることから、ブナ科の同定にとどめた。

【文献】

Stuiver et al. (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹木の細胞. 木材の構造. 文永堂出版, p.49-100.

第6節 小結

【概観】

立野第5遺跡では、主に旧石器時代の遺構・遺物が出土した。小高い風通しの良いこの地で、数時期にわたって旧石器人の生活が、営まれていた状況を明らかにすることができた。遺構・遺物は埋没谷を避け、一定範囲に集中して出土した。後世の造園などで大きな改変を受ける以前は、さらに多くの遺構・遺物が存在していたのがうかがえる状況であった。また、自然地形による過去の遺構・遺物の流出の後に、さらに遺構が形成されるというサイクルも見受けられた。そのため原位置を保っている遺物は、調査区中央部の一部であった。

本遺跡は、面積に比して密度の濃い遺跡であり、地形改変以前の人類の足跡は、さらにまさるものであったことが推察される。見つかった旧石器は、宮崎1段階編年のうち第3～10段階が認められ、各時期においてて通勤の拠点となっていたのであろう。

特に、Ⅷ層出土の第3段階に属する石器群、AT上位出土の台形石器群や石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器群は注目に値する。また尾鉢山麓に近い事もあり、確実に旧石器時代に属する尾鉢山酸性岩類の石器が出土した。ただし遺構に関しては、段階全てにおいて存在していたとは言い難い。とはいえ、斜面地かつ、水流の影響を受けやすい地であったにもかかわらず、当地が好んで生活の場として選択されていたことがわかるのである。

【AT下位石器群の剥片剥離】

Ⅷ層上面で一定範囲に集中して石器が出土し、良好な資料に恵まれた。宮崎編年第3段階に位置する石器群である。接合資料を中心に、立野第5遺跡における剥片剥離の状況を明らかにすることことができた。

右ページの図では石材ごとに剥片剥離の流れを整理している。

主体となる石材は黒色系流紋岩（以下黒色系 Ryu）と茶色系ホルンフェルス（以下茶色系 Ho）である。これらは、原石に近い、あるいは石核素材段階での搬入が認められ、2、3種の剥片剥離が見られる。茶色系 Hoには石の節理が多く、剥離に制約がでて

いるが、石材が風化する以前に、石材の差を認識していたかどうかは考えにいれておく必要がある。

客観的に入ってくるものが、白色系流紋岩（以下白色系 Ryu）、頁岩、チャート等で、いずれも大きめの剥片単体での搬入である。これらは搔・削器生産と密接に結びついていると考えられる。特に白色系 Ryuは横長剥片状態で持ち込まれ、搔器に加工された可能性が高い。

黒色系石材と県内北部系石材である白色系 Ryuの遺跡における疎密は、本遺跡が位置している、宮崎平野北端部の石材環境を如実に表している。遺跡内への搬入量の違いにより、目的とするトゥールにも制約がでていたと考えられる。

以下、図に従って説明したい。

残核A…打面削離の見られる小形の石核。ex)27・72

残核B…断面三角形の分厚い剥片を利用した小形の石核。片側、或いは両端から剥離する。限界まで剥離行程を終えた石核では、残核Aと区別がつかない場合もある。ex)69・70

残核C…比較的大型で、打面一方向。ex)K1・83

Sc 1a…縦長剥片素材の搔器。素材剥片の形態をいかし、端部を軽く調整して成形。ex)11・12

Sc 1b…縦長剥片素材の搔器。長軸側が寸詰まりに加工される。ex)67

Sc 2…横長剥片素材の搔器。ex)75・87

剥片剥離I…一つの石核素材（おそらく分割壁か）

から小～大形の剥片を一連の工程で剥離していくものである。縦面に近い方は大きめの縦長剥片、内部に行くにしたがって小さめの縦長剥片を剥離する。大形剥片のうち縦長のものは Sc 1a となる。しかし、茶色系 Ho では石材の性質により、しばしば、寸詰まりな縦長剥片や主要剥離面側に極端なカーブを描いた剥片が剥離される。そのため、黒色系 Ryu より成形のための調整が多く施され、結果、長軸側が寸詰まりとなる場合がよく見られる (Sc1b)。同様の理由で、茶色系 Ho からは横長剥片も生じやすく、Sc 2 となる。小～中形の剥片はナイフ形石器に加工さ

れる。

剥片剥離II…分割砸から、打面一方向で小～中形の縦長剥片を周縁から連続して剥離する。剥離された剥片は比較的規格性を持つ。目的とする器種はナイフ形石器。残核Cが残る。黒色系Ryuにのみみられる。

剥片剥離III…断面三角形の分厚い縦長剥片を石核材料として、小形の縦長剥片を剥出する。剥片剥離Iの一連の工程から分離して現れている可能性と、素材剥片状態で持ち込まれて発生した可能性とがある。茶色系Hoのみにみられる。目的とする器種はナイフ形石器でも細石器とも呼べるような、特に小形のものであろう。

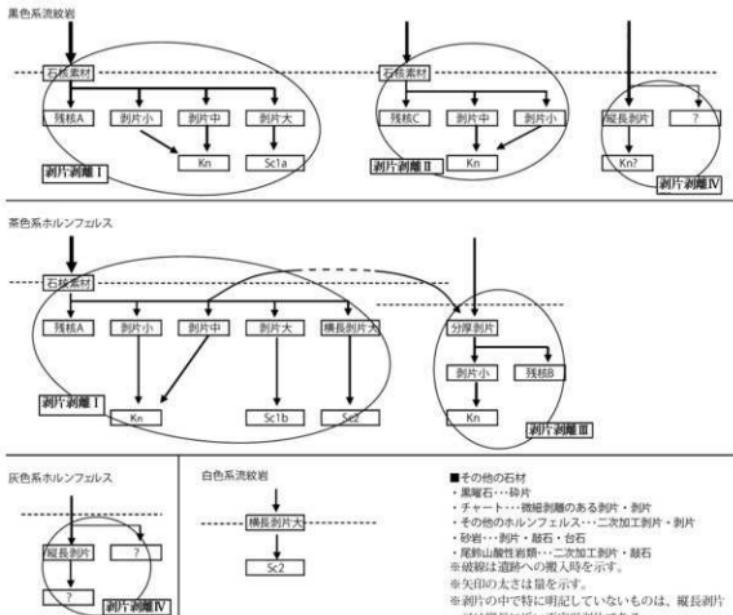
剥片剥離IV…定型的な石刃に近いような縦長剥片を連続して剥離する。客体的で、目的とする器種はよくわからない。これに伴う石核もみつかっていない。

【環状ブロックの可能性について】

V層上面出土の遺物分布図を見ると、数個の石器集中区が、ドーナツ状に輪を描く平面分布となっている。中央部には遺物集中区と重ならない形で、環群が位置している。これはいわゆる環状ブロック群と呼ばれるものに該当するのであろうか。宮崎県内では、今まで環状ブロック群は認識されておらず、本遺跡での遺物分布が環状ブロックの一つであるとすれば初見となる。

積極的にとらえるとすれば、第一に明らかに見た目が環状をしていること。石器ブロックどうしに接合関係がみされること。二つのグループにわかれるように見える切れ目のうち、下部か上部が入り口と考えることができること、等があげられる。

消極的なとらえかたも考えられる。まず、二つの円弧AとBとの判別性である。A、B内それぞれでは接合関係が頻繁なのに対して、AとB同士ではそれほどではない。これらの間には接合関係は確かにある



が、数点にすぎない。A同土、B同土の接合に比べ明らかに少ない。そして、集中区10は単独で存在していると予想される。また、関東地方の環状ブロックに頻繁に見られる局部磨製石斧が出土していない。しかしこれは、宮崎県内自体での旧石器時代の磨製石斧の出土例がわずかであることを考慮する必要があるだろう。最後に、時期が27,000年という年代を持つAT直下の出土であり、環状ブロックとしては年代が新しいことがあげられる。IX層出土の炭化材のAMSがBP26630の値を示すことを考えてもVII層出土の石器群がそれ以上年代を遡る可能性がないといえる。

筆者が、本例が環状ブロックの可能性を持つと認識したのは、入稿直前であった。恥ずかしいことに、平面分布を何度も見る機会を持ちながら、ふと原稿を覗いた当センターの諸兄に指摘されるまで、全く頭の片隅にもなかったのである。そのため、本書で基礎的で詳細な検討を行うことができなかつた。調査中も意識がなかったため、環状を意識した形での写真を撮影できていない。

それには、環状ブロックがでるはずがないという思いこみが一因であったよう思う。今後、石器の出土状況を現場で広範な面的にとらえ、記録していく視点を持てば本遺跡の類例が増えてくる可能性もあるのではないだろうか。今後の検討と類例の増加に期待したい。

【AT上位石器群の評価】

報告本文中では図表中心の報告となつたため、ここで改めて特徴的なことについて整理しておきたい。

まず、白色に風化する石材を用いた、台形石器・狸谷型あるいはそれに類する切出形ナイフ形石器の存在が挙げられる。これらの石器背面に残された剥離面構成等から、素材剥片は厚手の矩形剥片あるいは不定形なものであり、剥離方向も多方面からランダムに進んだようである。これに近い剥片剥離の見られた石器群として、宮崎市佐土原町長蘭原遺跡や高鍋町北牛牧第5遺跡第II文化層の一部等が挙げられる。また、同質の石材製石器には剥片尖頭器クラスの重量を持つ大形のナイフ形石器や二次加工ある

剥片など、端正な縦長剥片素材の石器群が一定数見られるのに対し、石核がなかった点が注目される。

剥片尖頭器と縦長剥片素材の削器・縦長剥片等が1ブロックを形成し、石核等は持たず製品・剥片状態での搬入が予想される例が宮崎市高岡町永迫第1遺跡第3地点、佐土原町長蘭原遺跡等で見いだされている。206・207の剥片尖頭器・二次加工ある剥片はおそらく同母岩であり、ともに剥離された可能性が高い。また、石材・母岩は様々ながら、剥片尖頭器や縦長剥片素材の加工工具類、縦長剥片もいくつか出土しており、本遺跡でも、剥片尖頭器と縦長剥片素材の削器・縦長剥片等のまとまりがあったと見てよいかもしれない。

尾鈴山酸性岩類製石器の一群は驚くような内容を持っている。転石から打面を作り出し、縦長剥片を連続して剥離する例の存在は、当時あって流紋岩・ホルンフェルス等の良質緻密な石材と同等に利用されたことを示している。打面と作業面を交互に入れ替えつつ剥片剥離するもの（礫器とも見える）もやはり同じである。ただし、得られた剥片についてナイフ形石器等に加工することはなかったようであり、本遺跡から出土したのは粗い二次加工ある剥片のみである。こういった様相からは、尾鈴山酸性岩類はその他大勢の剥片石器石材と同等の位置付けで剥片剥離が企画されたと見てよい。しかし、得られた剥片はやはり細かな加工には向いておらず、結果、粗い加工程度にとどまつたのではなかろうか。剥離されたのみの剥片も観察したものの大半は風化が激しく使用痕等を見いだすことが叶わない現状がある。積極的な評価が許されるならば、尾鈴山酸性岩類製の剥片等については刃器等として利用があった可能性が高いと言えよう。

石材利用の上で、尾鈴山酸性岩類とともに特徴的なのがチャートである。石材の主となるわけではないものの、ナイフ形石器・角錐状石器をはじめAT上位石器群の中で複数時期にわたってチャート製のものが散見される点は興味深い。本遺跡と地域的に隣接する、宮崎平野部の中でも小丸川・一つ瀬川流域（川南・高鍋・新富町、宮崎市佐土原町ほか）では意外にチャート製石器は少なく、新富町東側原第1遺跡・

音明寺第2遺跡・高鍋町牧内第1遺跡・野首第2遺跡等で小形の台形石器に多用され、あるいは小形の角錐状石器の一部に見られる程度である。今後、資料の豊富な五ヶ瀬川流域をはじめ地域別の様相も検討の視野に入れていくたい。

本遺跡のAT上位石器群については、近年、類例が急増中の国府型ナイフ形石器をはじめとする瀬戸内技法関連資料は見られなかった。こういった点も含め、今後の継続した資料操作が必要である。

【細石刃文化期について】

細石刃核について、黒曜石1を用いるものと流紋岩1・2を用いるものとが一定量出土した。これらを細石刃生産の流れの中で比較すると、まず圧倒的に原石サイズの大小がある。次いで、細石刃剥離にあたって、黒曜石1は打面調整を介在、流紋岩1・2は打面調整なし、という相違点がある。また、細石刃剥離面と打面のなす角度が90°を超えるものは流紋岩1・2に限られるという点も興味深い。細石刃生産に関わる石質の問題に過ぎないのか、はたまた時期・集団差による製作上の癖が表出したものなのか、今後も検討を深めたい。

【礫群の変遷】

第Ⅲ章第4節でⅠ類とした、小形の礫群が特徴的に検出された。遺物と同様に遺構も密度が高い。これまで幾度も、本遺跡では遺構の変遷を単純に追うことができないことを述べてきた。ここでは、第4節での整理を元に礫群の変遷を追っていこう。

ポイントとなるのはSI3とSI11の出土状況である。SI3はⅢ類礫群、SI11はⅠa類礫群である。Ⅰa類礫群がⅢ類礫群より古いとする。他のⅠa類礫群の検出層をみると、層位の安定していないところはATの二次堆積層の上の黄褐色土で多く検出され、層位の安定した箇所ではAT上位の褐色土上又は中ほどで多く、検出されている。それらと比較してⅢ類礫群であるSI10、SI39は相対的に上位層で検出されている。次にⅡb類礫群はⅠa類礫群よりもほとんど差はないといえ、相対的に若干下位層検出である。時期が古い順にⅡb類→Ⅰa類→Ⅲ類という変遷が想定可能である。

また、Ⅰa類礫群は掘込みを持っていた可能性が

高いと考える。同様の形態の礫群が牧内第1遺跡や鹿児島県耳取遺跡で検出されている。特に牧内第1遺跡は、石材こそ異なるものの、傾斜地に並ぶように配置されている点、埋め込まれるような礫の配置等、非常にⅠa類礫群のあり方と似通っている。礫群と石器ブロックが重ならない点も同様である。立野第5遺跡のⅠa類礫群は牧内第1遺跡の後期旧石器時代二期と並行すると考えてよいと思われる。

この時期に相当する石器群であるが、礫群と石器ブロックと重ならないことと、立野第5遺跡での層位の不安定さから、確実なことはできなさい。

【年代測定について】

本遺跡では集石遺構2基についてAMSによる年代測定を行った。そのうちSI1は草創期、SI22は細石刃期に比定されるような年代がでた。SI22はいかにも集石遺構といったような、規模と形態を持つ。けれども、SI22の周辺で土器や石器等の縄文時代遺物は出土せず、石匙がその上層で出土しているのみである。むしろ、細石刃核の多く出土した箇所に位置しているのである。

2003年時点で行われた九州内の集石遺構の集成では草創期と呼ばれる資料はわずかであるし、該当するような規模の遺構は存在しない。県内では細石刃期の礫群には類例は見受けられない。

年代測定の誤差の可能性ももちろんある。しかし現在、遺跡で集石遺構が検出されると、あまり検討せずに早期とする傾向があると思われる。早期とされている集石遺構の中に草創期、或いはさらに古い年代に属する可能性がないのか、一考してみる余地があるだろう。

参考文献

- 九州閲文研究会 2003 「九州縄文時代の集石遺構とそれが」
- 宮崎県石器文化講話会 2005 「宮崎県下の石器時代遺跡概観」
- 『旧石器考古学』66 『旧石器文化講話会』
- 笠懸科学院文化資料館 2005 『第40回企画展 環状ブロック群』
- 原田茂樹編 2005 『牧内第1遺跡(四次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第104集

第IV章 立野第2遺跡の調査

第1節 層序

本遺跡の土層は基本的に安定していたが、台地の先端部をいくつに分けて徐々に堆積が薄くなっていた。現地は調査直前まで竹が繁茂しており、IからIIIa層までは竹の根によってふかふかとした感触の土となっていた。同時に、II層はブロック状にしか残存しない箇所もみられる。I層は畑地耕作土の上に腐植土がのっており、さらに分離可能であるが、表土として一つの層ととらえた。X I層以下は白色の粘土層が続いているが、埋め戻しの際に重機で深掘りを行ったが、1m以上掘り下げるでも疊層は確認できなかった。

上述した竹根の影響等もあり、層が上下して出土した遺物もあったが、おおむね縄文時代早期の遺物はIII・IV層を中心に、旧石器時代の遺物はV層を中心に出土した。

以下、各層ごとに記述する。

I層：表土・造成土

II層：鬼界アカホヤ火山灰層。竹根の影響により、しまりは柔らかい。

III層a：黒褐色土 (Hue10YR2/3)。粒子細かい。粘性なし。しまりはやや柔らかい。
b：暗褐色土 (Hue10YR3/4)。粒子細かい。粘性なし。しまりはやや固い。

IV層：褐色土 (Hue10YR4/4)。粒子細かい。下部の方に小林鉱石と考えられるオレンジ色の粒子をわずかに含む。やや粘性があり、しまりはやや固い。

上面で集石遺構が発見された。

V層：にじい黄褐色土 (Hue10YR5/4)。粒子細かい。粘性があり、しまりはやや柔らかい。
礫粉が発見された。

VI層：褐色土 (Hue10YR4/4) 中に暗褐色 (Hue10YR3/4) の固いブロックを多く含む。AT由来と考えられる白い粒子が混じっている。しまりは固く粘性があり、粒子はやや細かい。

VII層：姶良Tn火山灰層。明褐色 (Hue10YR6/8) を呈する。

VIII層：黒褐色土 (Hue10YR2/3)。非常に固くしまっていて、乾燥するとすぐにクラックが入る。粒子が細かく白色の粒を含む。粘性弱い。

IX層：黒褐色土 (Hue7.5YR3/2)。固くしまっているかⅧ層よりは柔らかい。粘性がややあり、粒子は細かい。

X層：褐色土 (Hue7.5YR4/6)。粒子細かい。水分を多く含み粘性強い。しまりはやや柔らかい。

XI層：明褐色土 (Hue7.5YR5/6) 水分を多く含み粘性強い。しまりはやや固い。粒子は細かいが、砂利を含む。

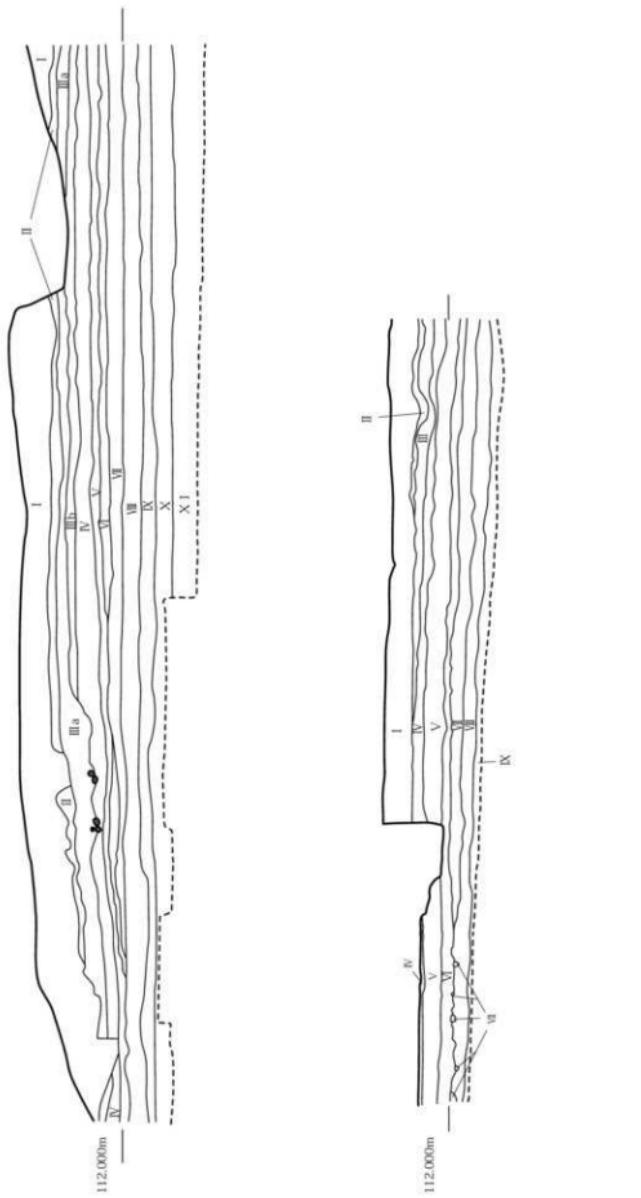
宮崎県埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道関連の発掘調査で遺跡間の共通理解を図るために、基本層序を作成している。立野第2遺跡の層序を都農町域基本層序¹⁾にあてはめると、それぞれⅢ層 (ML1上部)、IV層 (ML1下部)、V・VII層 (ML1～ML2)、VIII層 (ML2)、IX層 (ML3) に対応される。

しかし、(宮崎県埋蔵文化財センター 2006) でも問題としてあげられているように、既存の基本層序に対応させてローム層を区分するには、宮崎平野北部の状況は限られた情報量しか持っていない。また、都農町所在の遺跡間でも堆積層の差が見られ、層位の齟齬は起こっており、必ずしも共通理解が得られているわけではない現状である。その意味で、都農町域基本層序は暫定的ともいえ、ここにあげた対応関係は検討を前提としたものであることを明記しておきたい。

1) 都農町埋蔵文化財センター 2006『東九州自動車道(都農～西諸浦) 埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI』では、調査域が県北側に移るにつれ、当初新富町域で設定された既存の基本層序が対応しない場合が多くなっていることを指摘している。そして、新たに都農町域基本層序について整理を行っている。

5m

第57図 土層断面図 (1/60)



第2節 確認調査の概要

確認調査は平成17年6月1日から平成17年8月1日まで、立野第1遺跡（一次）確認調査、立野第5遺跡の確認調査と平行して行われた。確認調査対象面積は当初400m²とされていたが、現地実測の結果212m²であることが判明した。調査実日数は20日間である。

約2m×3mのトレンチを3箇所設定し表土を重機で除去したのち、人力で掘削を行った。Ⅲ・Ⅳ層から繩文土器、石器等の遺物が出土した。集石遺構の一部と考えられる赤化礫が多数検出された。1Tからはチャートの碎片が多数出土した。遺構と遺物が多数出土することが確認されたため、それ以上掘り進まず、対象区212m²全てを本調査とすることを決定した。

第3節 調査・整理の方法と方針

1 調査の方法

調査は、排土処理等の便宜上A区とB区に分割して行った。A区を調査中はB区に排土を置き、その後A区を埋め戻し、排土置き場とし、B区の調査に移った。しかし、それでもなお排土全てを処理することができず、立野第1遺跡へ排土搬出を行った。調査区は西側を除き急斜面に面していたため、安全上、用地より1m程度内側を掘削した。VI層上面で等高線を作成し、VI層以下はトレンチ調査とした。

任意杭を一点設置し、これを基準として記録を行つ

た。この任意杭には、立野第5遺跡で国土座標を基準にした測量杭が設置された後、そこから調査員が座標を移した。出土した遺物はトータルステーションで位置を記録した。

散礫は写真で範囲をおさえ、集石遺構、礫群は全て1/20で図化した。集石遺構の認定は散礫を除去後に行つた。散礫の粗密により、集石遺構の認定が平易な箇所と困難な箇所とがあったが、認定のしやすさにかかわらず、一定の厚さで全て礫を除去した。そのため図化を行つた段階では、本来の検出形態をおさえきれていない可能性が生じたが、散礫除去作業中に推定できることをできるかぎり注記した。

礫は石器が含まれていないか確認し、その場で石材、赤化、破損状況について肉眼で記録した後廃棄した。一部の礫をサンプルとして持ち帰った。

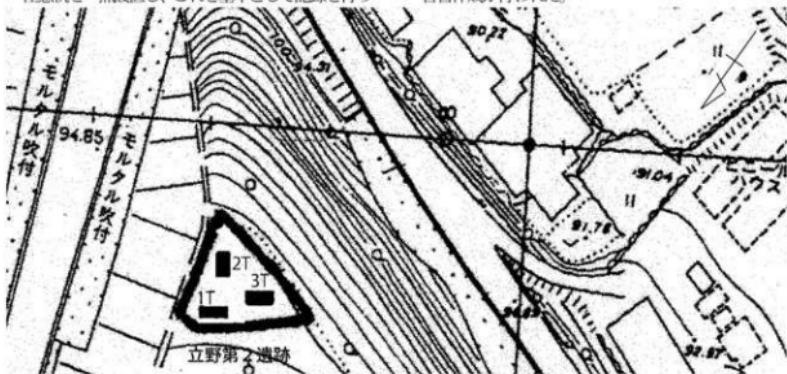
2 整理作業

水洗、注記を行つたのち土器と石器の接合作業を行つた。区に関係なく、同層位内で接合したのち異層位間で試みた。接合作業は1点も接合できなくなるまで継続した。

石器は接合作業後、全点計測を行つた。石材の分類は立野第5遺跡と共に基準を統一した。

繩文土器は調査面積の関係か、破片が大きくなるものがなかった。口縁部を中心に、器形・調整が復元できるものを図化した。

立野第5遺跡の原稿と同じくデジタル処理での報告書作成が予想された。



第4節 旧石器時代

旧石器時代の遺構・遺物はIV～V層を中心に礫群1基と石器類が確認された。一部III層出土もある。遺物出土層位の幅が大きいのは、竹根等による二次的移動によるものと考えられ、旧石器時代の遺物が本来位置していたのはV層と考えられる。

VI層以下はトレンチ調査を行った。VII層からホルンフェルス製の剥片1点と赤化礫1点が出土したのみであった。それらが出土した周囲を拡張したが、他の遺物等は見つからなかった。

【礫群】

SI16

集石遺構を除去して掘り下げた後にV層で検出された。礫のまどまりはまばらであったが、周辺には他の礫は検出されなかつた。10～20mmの大河原石で構成されており、最大長14m、最大幅10mを測り、掘込みはない。炭化物、付着物等は確認できなかつた。石材は全て尾鈴山酸性岩質であり、赤化している。礫自体の表情は集石遺構のそれと変わらない。

【遺物】

個々の遺物の詳細は割合表に記している。

ナイフ形石器に関連する資料と礫石器が出土した。石材は流紋岩が中心で、ホルンフェルスが少数と黒曜石がすくに含まれる。

黒色系流紋岩が相対的に多くをしめ、白色系流

岩には石核が認められなかつた。また、目立って大きな剥片も出土しなかつた。これは、立野第5遺跡と同様の傾向である。

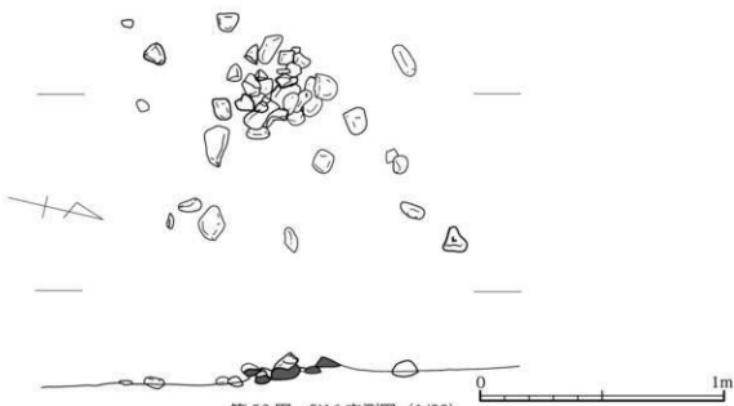
第60図1は楔形石器の破損品と考えられる。一部礫面を残す。

2・3はいわゆる今井型ナイフ形石器である。4の剥片、5の剥片同士の接合、6の石核はその生産に伴う資料と考えられる。

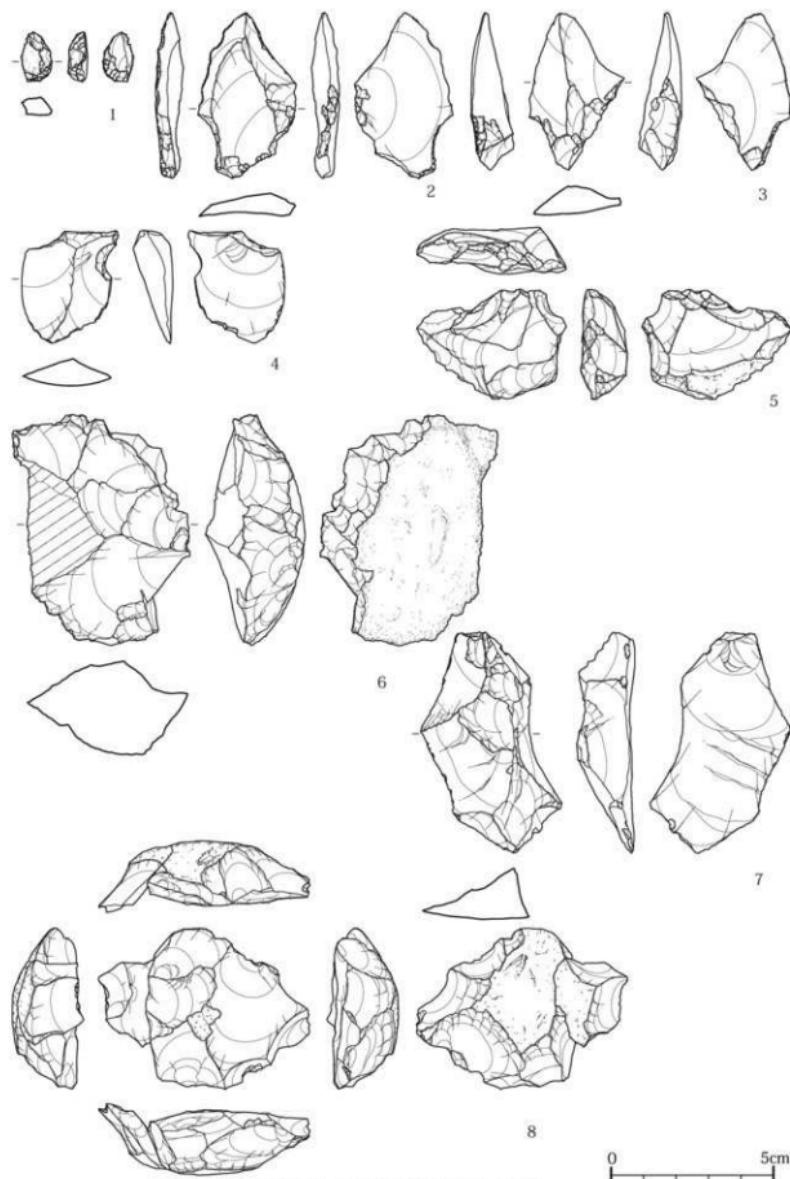
9は10～15の接合資料であり、14が石核である。15は打面調整しきものも見られるが、アクシデントルな割れによって生じた剥片であろう。16は17～19の接合資料であり、17が石核である。目的とした剥片のみどこかに移動されたのかもしれない。打面転移を介在し、不定形剥片が剥離されたと考えられる。

ホルンフェルスの一群は縦長剥片獲得を意識した接合資料と考えられる。ホルンフェルスの資料は風化が著しく、層を移動しているものは縄文時代期の遺物との弁別困難しかつたが、形態より類推し旧石器と判断した。

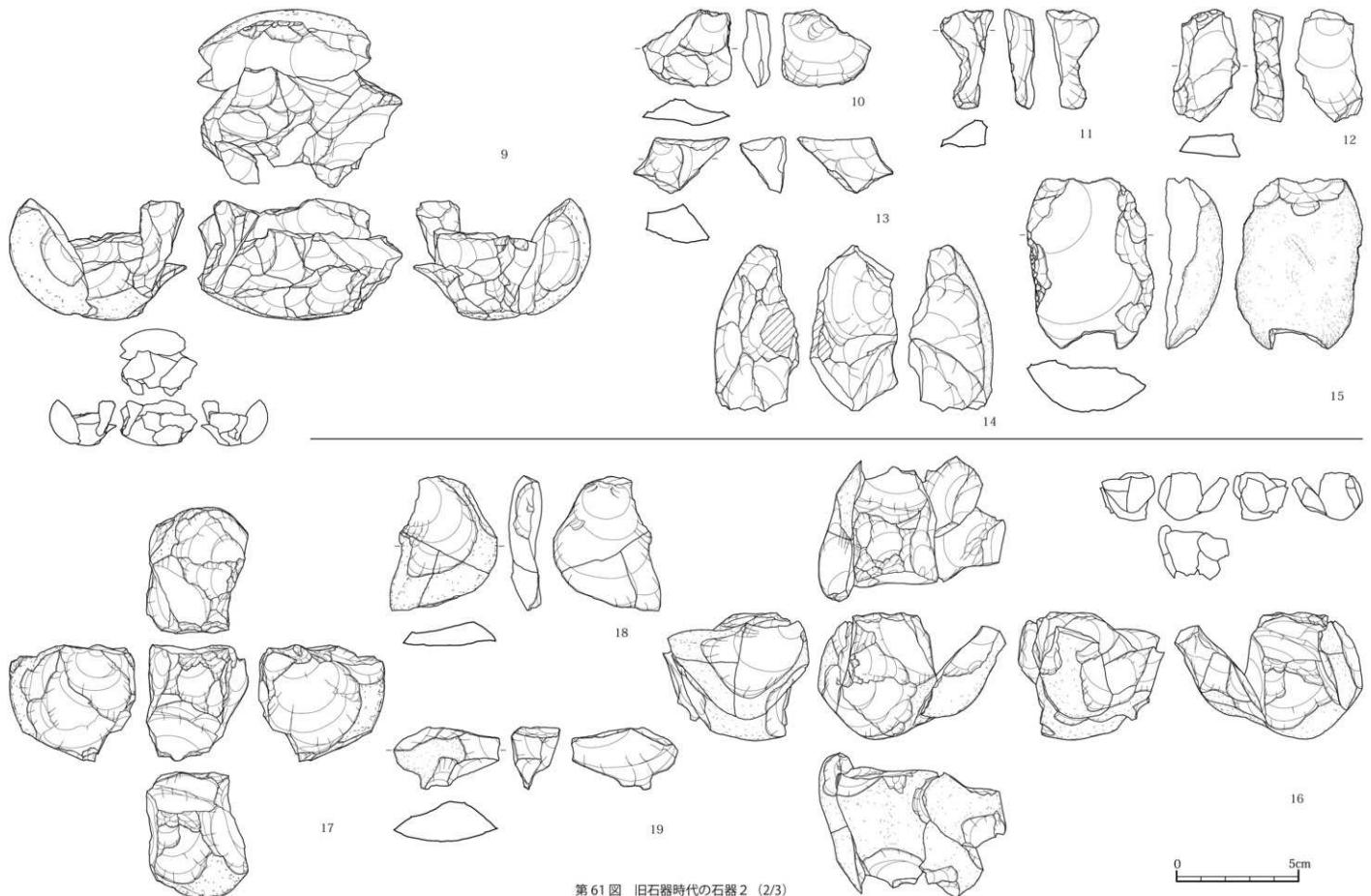
第62図24は礫器で、他に同一母岩は見あたらなかつた。25は尾鈴山酸性岩質の意識的な剥片と判断した。26は表面のすべらかな砂岩である。敲石か磨石であったろうと考えられるが、両端が欠損しているため詳細は不明である。



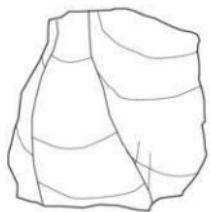
第59図 SI16 実測図 (1/20)



第60図 旧石器時代の石器1 (2/3)

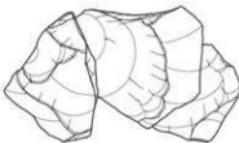
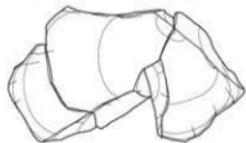


第61図 旧石器時代の石器2 (2/3)



20

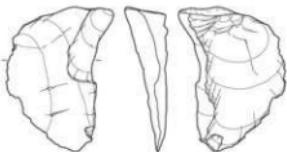
21



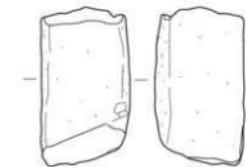
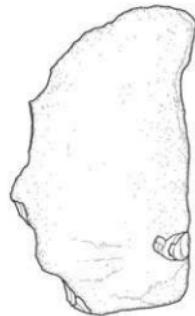
22



23



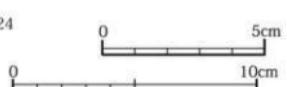
25



26



第 62 図 旧石器時代の石器 3 (2/3・1/2)



(25・26)

第5節 繩文時代

Ⅲ～Ⅳ層にかけて集石遺構と土器、石器類を検出した。ほとんどが早期の所産であり、遺構は調査区外にも広がっている様子が、壁面から観察できた。アカホヤ降灰以降の遺物は、表土中から、姫島産黒曜石の石核等が出土している（第65図27）。

縄文時代早期

遺構は散礫を伴う集石遺構15基が検出された。遺物は土器、チャート、頁岩製の打製石器、剥片獲得に伴うホルンフェルス製石器、敲石等の礫石器類が出土した。

【集石遺構】（第7表参照）

散礫と集石遺構はすべてⅣ層で検出された。散礫はB区北部側とA区南部端側に密集しており、それらの下部にある集石遺構は散礫除去後に認定を行った。散礫除去前から、特に礫が密集しており、下部に集石遺構があると推定される箇所も、周囲と一緒に礫を一定の厚さで取り除いた。散礫の疎な部分は集石遺構の範囲が明らかであったため、そのまま認定した。そのため、図化時の平面形態が散礫の粗密による影響を受けている。

集石遺構埋土と周辺の土色に変化がなく、掘込みを認識するのは困難であった。そこで、礫を全て取り除いた後にできたくぼみを、掘込みとして記録した。構成礫の配置等から、少なくとも一部に関しては確実に掘込みが存在していたことが予想されたからである。

SII3は調査区外にさらに伸びている可能性があったが、I基全ての範囲を検出しているものとして、図化した。図中の、SII2の破線は掘込みの予想ラインである。

集石遺構同士の切り合いではなく、検出面からも積極的な時期差の可能性は見いだせなかった。礫材は全て尾鉛山酸性岩類の拳～幼児頭大の礫を利用していた。円～亜角礫を中心であり、河原石の転石利用であろう。集石遺構内からは別府原式土器が出土している。

SII4は、その形態と検出状況が他と異なっていることから、単独で、時期差を持って存在していた可能性がある。

【遺物】

打製石器

チャート製と流紋岩製がみられる。チャートは数種の母岩が見受けられるが、それぞれに対応した素材剥片、二次加工剥片、碎片が出土している。目立った石核がみられないため、剥片状態での搬入か、再加工の場であろう。流紋岩は薄い剥片の周囲を調整して中心に素材面を残すものと、全面加工のものがある。製品のみの確認であり、搬入品である可能性が高い。

37は石錐であり、39は35と同じ母岩の二次加工剥片であるが、削器の可能性もある。

ホルンフェルス製石器

剥片が多く出土した。微細剥離、二次加工等があるかもしれないが、粉がふくような著しい風化のために観察できない。そのため、図化もほとんど行っていない。46・47は石核であり、球心状に剥離されている。剥片獲得に伴った石核と考えられる。46は礫器又は、スクレイバー的な要素も残す。

削器

48は頁岩製の削器である。

磨石・敲石

磨石は質の良い緻密な尾鉛山酸性岩類を利用しておらず、表面は丁寧に磨かれ、一部赤化している。敲石は砂岩で、SI1を構成していた礫のひとつであった。周囲の礫に比べ、目立てて赤化度が低く、SI1を検出後すぐに認識できた。

土器

Ⅲ層、Ⅳ層から縄文土器が出土した。小片が多く、口縁部から底部まで復元される物はなかった。土器の個々の詳細な観察は土器觀察表にゆずる。

第69図52～67は胎土に1cm前後の繊維痕を含む無文の一群である。

52～63は明赤褐色を呈した無文土器である。条痕調整の後丁寧なナデを施し、明瞭な指痕跡が残る。口縁部は端部を丸く成形したものと、とがるように作り出すものとがある。出土個体それぞれは非常に似通っており、胴部のみだと一見同一個体であるかの様であるが、口縁部の形状から数個体あることがわかる。3cm程度残存した底部より、尖底の最深形

第7表 集石遺構観察表

遺構名	Gr.	層	最大長 (m)	最大幅 (m)	掘込 (m)	検出状況 認定方法	種の状態	その他の所見
SI1	A	IV層 上面	1.0	0.9	0.08	散謫除去前	破損した尾跡山酸性岩類で構成。	別府原式底部伴出
SI2	A	IV層 上面	1.0	0.7	0.14	上部から密集部が推定で ききため、集石の部分を 残すように意識しながら、 散謫を除去した。	破損した尾跡山酸性岩で構成	別府原式伴出
SI3	A	IV層 上面	0.8	0.6		散謫除去前だが、調査区 外に残している様の部分 があつたため、正確な形 態は不明。	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI4	B	IV層 上面	1.2	1.0	1.00	散謫除去前	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI5	B	IV層 上面	0.6	0.4		散謫除去後に認定	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI6	B	IV層 上面	1.0	1.0	0.28	散謫除去前から認識し ていたが散謫除去後に 固定化した。	比較的完形に近い円錐が瓶込みに沿って散き詰め られている。	
SI7	B	IV層 上面	1.1	1.0	0.15	散謫除去前に認定	破損した尾跡山酸性岩で構成	別府原式伴出
SI8	B	IV層 上面	0.8	0.7	0.20	散謫除去後に認定	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI9	B	IV層 上面	1.2	1.0	0.18	散謫除去後に認定したが 輪部は除去前から意識し ていた。	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI10	B	IV層 上面	1.4	1.0	0.24	散謫除去後に認定したが 輪部は除去前から意識し ていた。	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI11	B	IV層 上面	1.1	1.0	0.18	散謫除去後	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI12	B	IV層 上面	1.4	1.1		散謫除去後	集石内を大い竹根が通っており、大部分が破壊さ れていたが石と並びから集石遺構と判断した。本 来はSI9やSI10等と同じ形態だったと思われる。	
SI13	B	IV層 上面	0.7	0.5		散謫除去後	破損した尾跡山酸性岩で構成	
SI14	B	IV層 中	0.5	0.5	0.18	IV層削削中。IV層上面で は検出できず。	IV層削削中で出土する。表面は黒色理土上層 破砕した10cm前後の小片数個。	微細な炭化物を 含む。
SI15	B	IV層 上面	0.6	0.4	0.08	散謫除去後	破損した尾跡山酸性岩で構成	

の器形をしていたことがうかがえる。大分県域でいう陽弓式に相当する上器と考えられる。

65～67は52～63に比べると色調が暗く、薄手で条痕調整が明瞭である。図示した物は全て同一個体であろう。64は無文の一群ととらえたが、胎土や色調はむしろ68・69に近い。条痕調整が明瞭に残る。

68・69は小片であるが、下部に擦糸の跡があり、器壁の薄、窓ノ神式土器である。

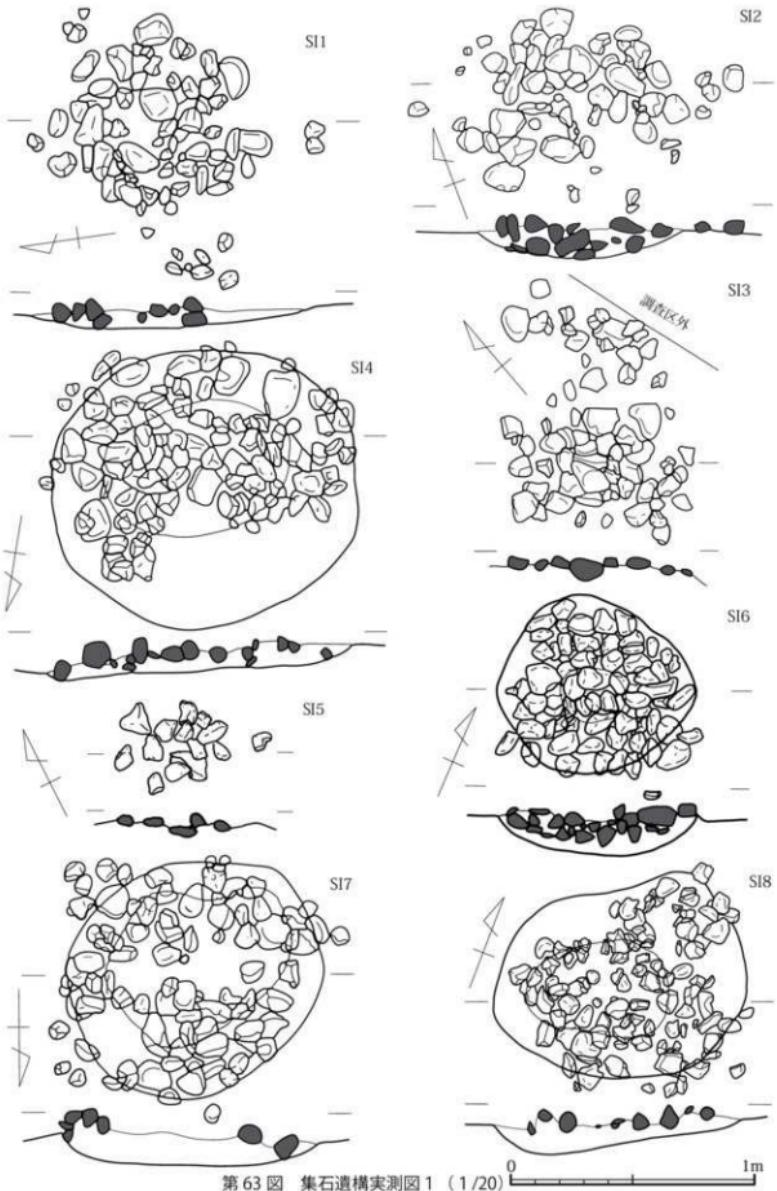
第70図70～79は貝殻条痕を持ち、いわゆる別府原式土器と呼ばれる一群である。本遺跡の集石遺構に伴う型式と考えられる。外器面は横位または斜位の貝殻条痕、内器面は丁寧なナデで調整されている。胎土がやわらかく摩耗が激しい。図示した口縁部は全て別個体である。貝殻条痕による刺突、棒状

工具による刺突等のバリエーションがみられる。

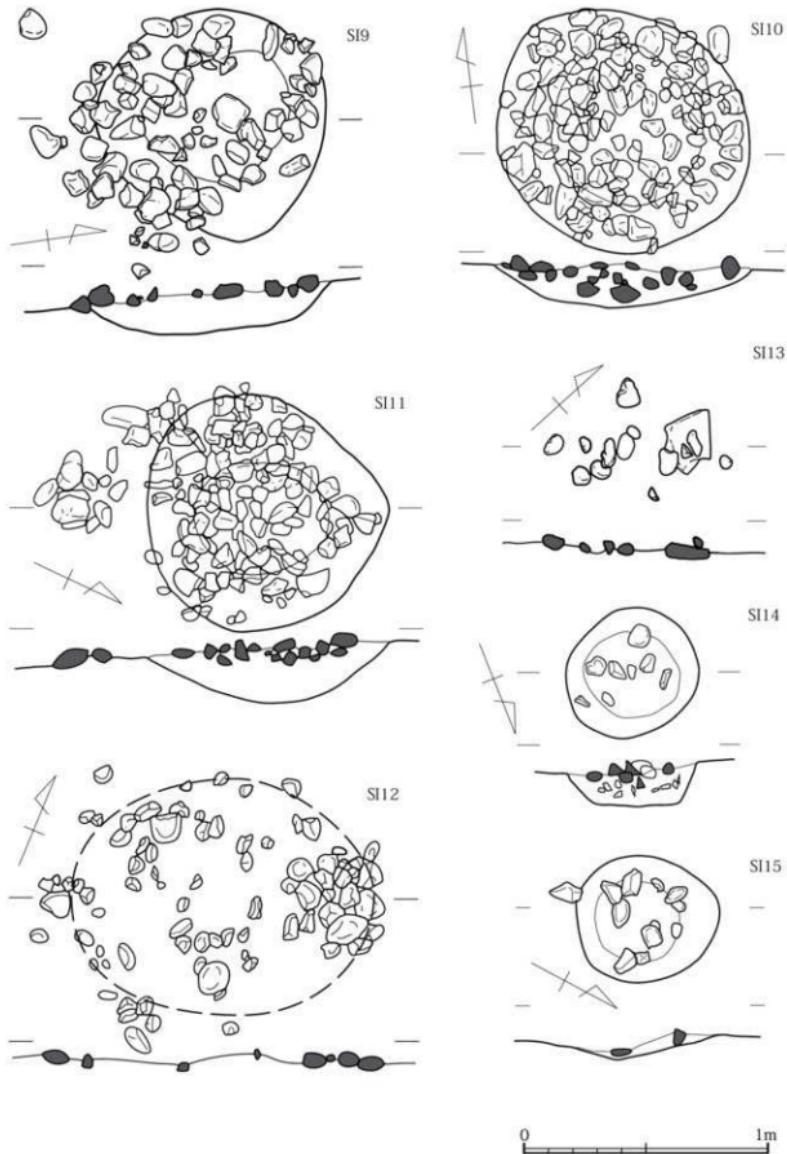
明赤褐色を呈する繊維を含む無文の一群は、別府原式土器群の平面分布とは、異なる箇所で出土した印象を受けた。また、取り上げの際出土層位も若干、別府原式土器よりも下部にあつたような感触を、調査者は持っている。

しかし、ドットデータではなく一括して取り上げたため、出土レベルの詳細なデータが残っていない。

出土層位（Ⅲ・Ⅳ層）による全体重量の比較を試みたところ、明赤褐色の無文土器の方が数十g重かった。とはいえ、二次移動や、土器の重量による分析に対する厳密性の問題もあり、決定的要素にはならないのが残念である。



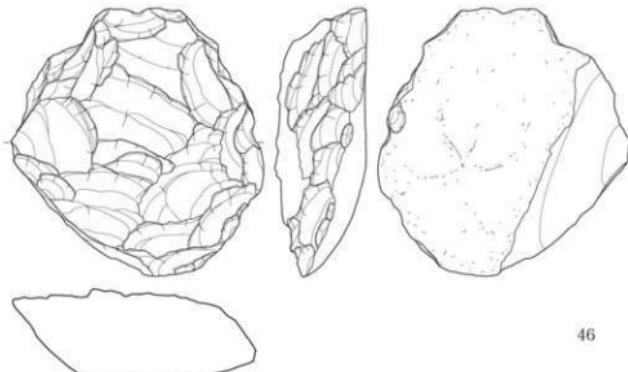
第63図 集石遺構実測図1 (1/20)



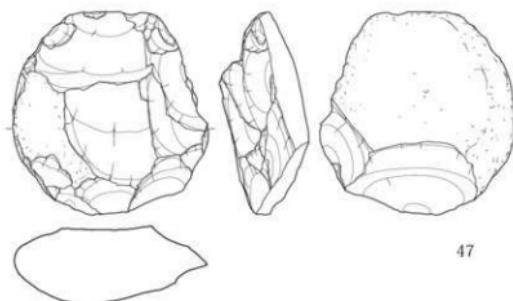
第 64 図 集石遺構実測図 2 (1/20)



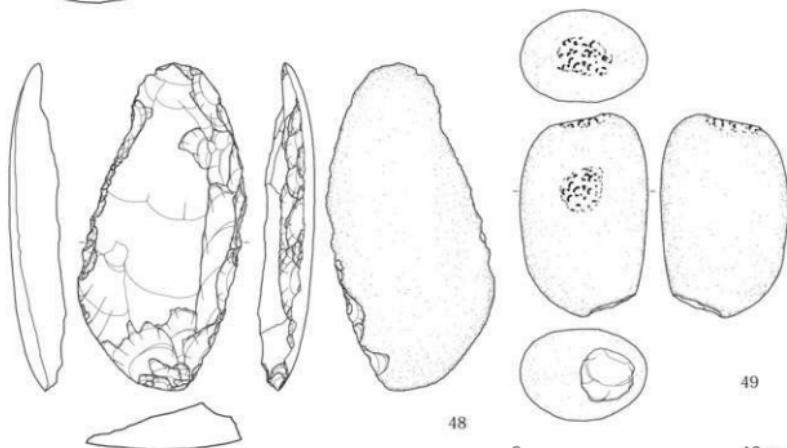
第65図 繩文時代早期の石器1 (2/3・1/2)



46



47

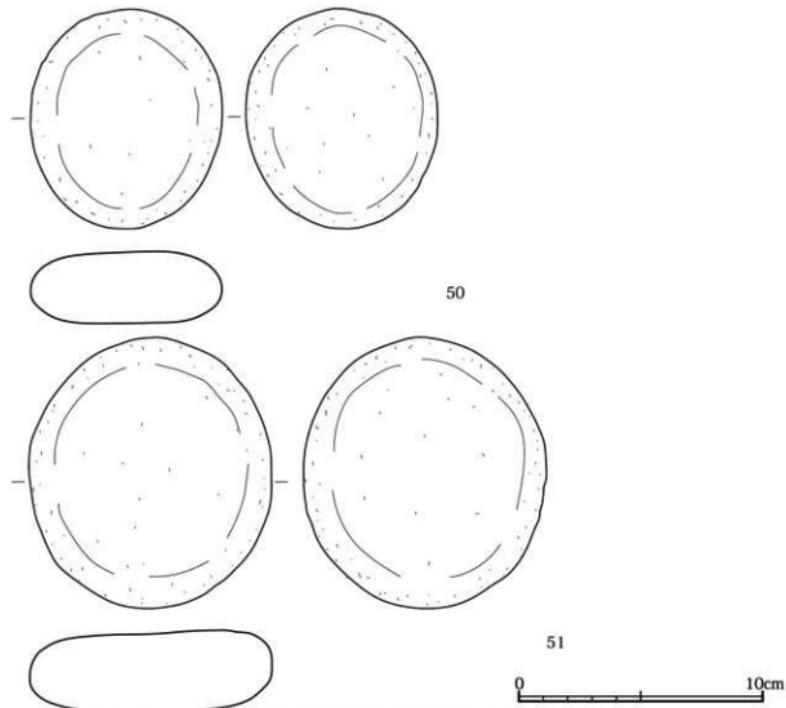


49

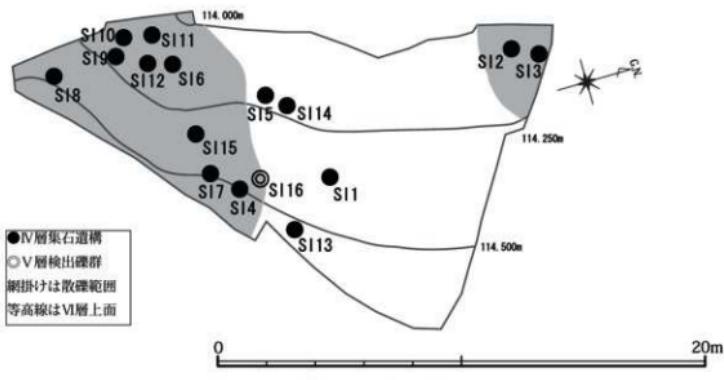
48

0 10cm

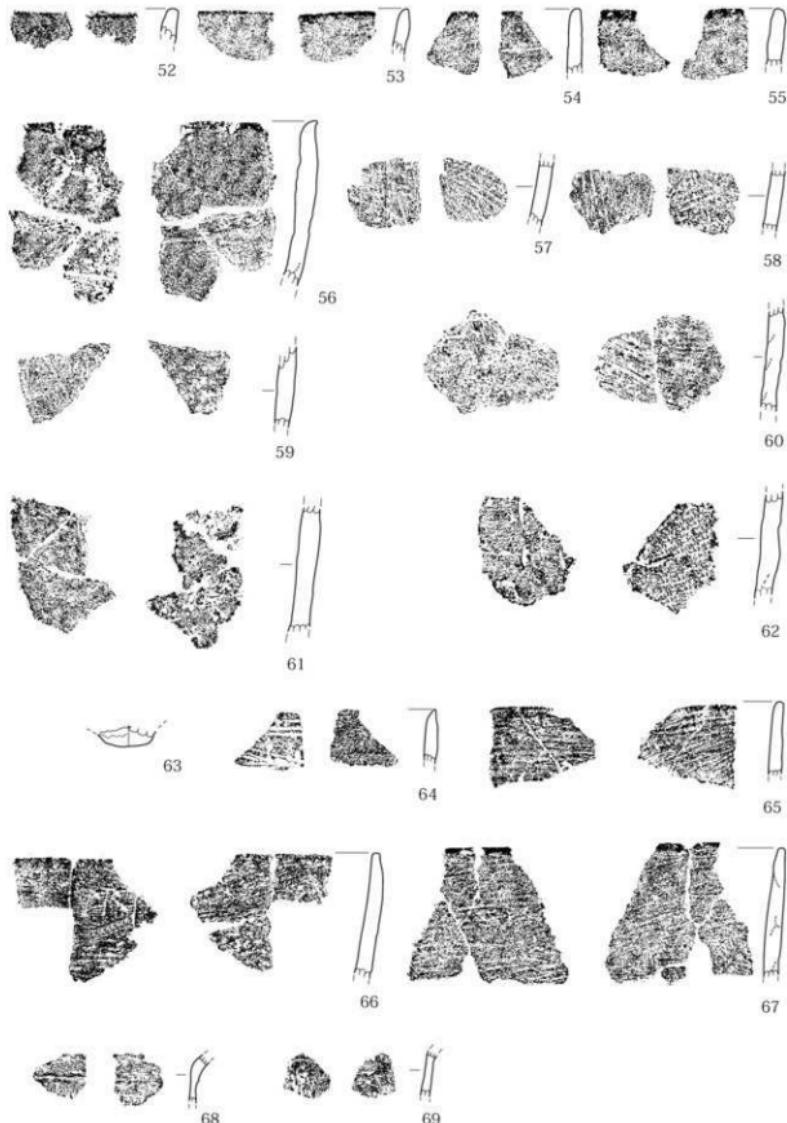
第66図 縄文時代早期の石器2 (1/2)



第67図 縄文時代早期の石器3 (1/2)



第68図 遺構配置図 (1/200)



第69図 繩文時代早期の土器1 (1/3)

0 10cm



70



71



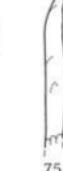
72



73



74



75



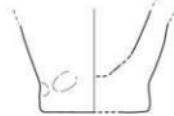
76



77



78



79



第 70 図 縄文時代早期の土器 2 (1/3)

第6節 小結

立野第2遺跡では後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての良好な包含層が確認された。約200m足らずの調査区のため、調査はさらに広範な遺跡の一端を表しているにすぎないと考えられるが、遺構・遺物の密度は高かった。ここにその成果を概略する。

【旧石器時代】

旧石器時代の資料はB区にかたまって出土した。単独時期で存在しているように思われる。礫群の周囲からは石器は見つかっていないが、検出層位は同じである。しかし、同卵辨别は明言できない。

遺物は今岬型ナイフ形石器に関する資料が出土した。第60図2は横剥ぎで刃部に加工があり、高鍋町北牛牧第5遺跡でみられるような典型的な今岬型とは様相が異なっている。

石器石材は黒色系の流紋岩が主体となり、白色系流紋岩には大きな剥片が見られないというのは、注目すべき点である。

ホルンフェルスの利用状況は、調査面積の関係もあり、明らかではない。

【縄文時代】

縄文時代の調査は、集石遺構が台地の端部又は斜面地に密集するという、宮崎県の縄文時代早期遺跡のあり方と重なるものであった。本遺跡のそれらはおそらく、別府原式土器期に存在しており、全てが同時に存在していないにしても、形成スパンはかなりの短期間であったと考えられる。

出土した石器は石核が中心であった。石核が見られず、欠損品や剥片が主体であった。このことから、本遺跡が石核の再加工の場であったか、或いは獲物処理する場であった可能性が高いだろう。

他に、剥片生産に伴うホルンフェルス製石器が大量に出土した。剥片は風化のため、使用痕や二次加工を観察する事が著しく困難である。けれども、石核2点に対しての剥片量の多さと、上記の石核からみた場の利用の観点から、刃器としての利用を積極的に想定したい。剥片を生産後、すぐにその場で使用する状況であったということも十分考えられるだろう。

また、検出されている集石遺構の礫材は、尾鷲山酸性岩類がほぼ100%を占めるにもかかわらず、剥片生産に伴う石器石材はホルンフェルスであった。利用目的により、明確な石材選択が行われていたことが推察される。

縄文時代早期の時期、名貫川は現在流れる箇所より、さらに遺跡に近い場所に位置していた。名貫川の河原から、目的に沿って石を採集してくる様が想像される。

明赤褐色を呈する無文土器と、黄白色を呈する貝殻条痕文土器については第5節で出土位置が分かれると可能性を指摘した。陽弓式に比定されるであろうこの土器は近年、押型文土器や貝殻条痕文系早期土器との分離や並行関係が議論されているところである。

本遺跡出土の土器は、県内では北部に多く、南部側に希薄な様相を呈している。都農町はその中間地点に位置するといえる。また、高千穂町古城遺跡出土土器に見られるようなコブを持つ土器の特徴と、とてもよく似ている。おそらく復元される器形は陽弓跡跡や古城跡跡出土のものより、小形である。

別府原式土器の編年的位置づけが、押型文土器に並行すると言われる無文土器の後にくるとすれば、別府原式土器が貝殻条痕文土器と別系統に位置するという見解を支持することになる。また、無文土器が単独型式で存在するとも言える。

本遺跡の調査記録では、積極的に評価できない状況であるが、可能性は指摘しておきたい。

参考文献

- 締貫俊一 1996 「第4章 陽弓遺跡」『横手遺跡群発掘調査報告書』大分県文化財調査報告書 第93集
九州縄文時代早期研究ノート 2004 『縄文時代早期研究ノート』第2号
菅付和樹・福田泰典編 2003 『布平遺跡 古城遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第74集

第V章 立野第5遺跡と立野第2遺跡の調査を通して

今回、直線距離約200m、比高差約30mの隣り合つた2遺跡を同時に発掘調査、整理作業をする機会に恵まれた。立野第5遺跡と立野第2遺跡は時間的に、旧石器時代と縄文時代早期という共通した要素を持っていた。両遺跡を同時に調査することで、ここは似ている、ここは違う、と比較する機会が自然と多かった。ここでは調査中、気になった点を中心まとめてみたい。

【礫群、集石遺構の礫材について】

立野第5遺跡と立野第2遺跡では、礫を素材とする遺構がほとんどであった。これは東九州自動車道建設に伴う旧石器・縄文時代の調査では普遍的な状況といえる。ここでは両遺跡内に存在する礫の確保と利用についてまとめる。

両遺跡の集石遺構及び礫群に使用されていた石材は、90%以上が尾鉛山酸性岩類で残りがチャートという、石材分類の必要がない程、尾鉛山酸性岩類が主体であった。また、立野第2遺跡では、調査中に現場内での観察のみしか行っていないが、チャートすら混じていなかった。

立野第5遺跡の礫材の組成は当地域の段丘礫層の構成と全く同じである。そして、使用されていた礫も質の悪い人頭大～1m前後の大きさを持っていた原形を、分割したような状態であった。立野第5遺跡の北東側には過去に段丘礫層の露頭であったろう部分が存在していた。従って、礫はここから（または掘り起こして）利用していた可能性が高い。

礫の整理中に多数観察されたのは、巨礫の皮面のみ、または、皮面が剥がされた中身のみ存在しているケースである。

石器を製作する時の石器石材採取の時、火を焚き露頭から石材を割って得る民族例がある。この種の礫の割れ方は、そのような採取のされたも想定させる。これは後に述べる赤化度とも関連している。

立野第2遺跡では、立野第5遺跡で使用されていた礫よりも、質の良い尾鉛山酸性岩類が使用されていた。川を流れ、質の良い部分が比較的残った転石であろう。そして、ホルンフェルスが大量に石器石

材に使われているにもかかわらず、集石遺構の材には混じっていないかった。名豊川の河原から選択的に採取されていたと考えられる。

この両遺跡の礫材差の解釈は、遺跡地点の差による要因が最も大きいと考えるのが妥当である。少なくとも時期差ではないのは明確である。なぜなら、立野第2遺跡では旧石器から縄文時代を通して河原石の利用であり、逆に立野第5遺跡などの時期も段丘礫の利用が中心だからである。

遺跡内の礫について、しばしば、礫の大量搬入といったことが議論されるが、実際には、礫材入手する場所はごく近くにあり、人自身が礫を確保しやすい場所に移動していた可能性の方が高いと言えるだろう。それが立野第5遺跡では露出した段丘礫層であり、立野第2遺跡では河原石であったのだと考えられる。

礫の赤化度について、両遺跡について共通して言えることは、質の良い尾鉛山酸性岩類ほど、赤化度が低いことである。そしてチャートは非常に赤化度が強くなる傾向にある。

礫の赤化度は被熱の割合にも左右されるだろうが、一方では礫材に制約されるとも考えられる。段丘礫層の皮面のようなもともと風化している粗い石材はより赤化しやすいとの結論を立野第5遺跡での礫整理で得た。再利用しているような傾向も認められた。また、石材の種類により赤化比率は変化する。石材種ごとの赤化度の半角が必要となってこよう。

東九州自動車道の一連の調査は宮崎県内を縦断しており、近年は旧石器時代の礫も収蔵している。礫材の再検討を行うことが可能である。礫材の入手がどこにあるのか、各地点での石種を時期を問わず礫材の消長を検討することで、礫材の確保行動等の解釈に今後つながっていくと考えられる。

※段丘礫と河原石について

厳密に言うと段丘礫も過去の河原石である。しかし、ここでは以下の定義としたい。

段丘礫は人類史以前に存在した河川の上流側の巨

礫のことを指す。河原石とは河川の河口側に行くにつれて河原に堆積する、岩石が削減した小形の転石のことを主に指す。

立野第5遺跡については、この人頭大以上の段丘礫を使用していると判断した。整理作業時の礫の接合作業による原形の復元を根拠としている。皮面という表現もそのために使用しており、それは數十年の風化面を持つと考えられ、オレンジがかっている。皮面の内部も使用されており、中身という表現をとっている。

【石器石材について】

立野第5遺跡と立野第2遺跡では多くの石器が出土したが、その中心となるのは流紋岩であった。また、尾鈴山酸性岩類の石器も数多く見つかった。都農町は宮崎平野最後の北端部に位置し、宮崎県北部の要素が流れ込んでくる地域である。石器石材の傾向は、両遺跡共通していることから、このこともまた、その影響下にあると思われる。

確実な地元石材である尾鈴山酸性岩類の多用はその一端である。第IV章6節で、尾鈴山酸性岩類石器の特徴を述べたが、それらに利用されているのは質の良いものばかりである。礫群や集石遺構に使われる礫材と異なり、石器石材では遺跡外からの選択的搬入が想定される。

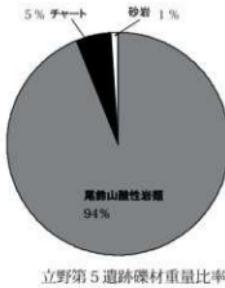
白色系流紋岩(以下白色系 Ryu)は県北部に特徴的な石材である。東九州道関連遺跡でも、調査地が北に移るにつれて黒色系の石材の中に白色系の石材が、ちらほらと見られるようになってくる。両遺跡では白色系 Ryu がかなりの割合で出土した。しかし、黒色系 Ryu に対し、白色系 Ryu には明確な石核が見受けられないのが注目される。大形のトゥールの存在に対し、対応する石核がないのである。

黒色系 Ryu は石核もあり、接合資料も多く存在し遺跡内生産力が確実である。白色系 Ryu は二次加工剥片、或いは大形の剥片が素材となっているのが目立つ。

これらのことから当地域は白色系 Ryu の強い影響を受けながらも、搬入はまだ、分割礫状態での持ち込みに至らない地域であることかわかるのである。

参考文献

- 藤木聰編 2006『唐木戸第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第126集
徳永貞紹 1990「九州の縄文時代集石遺構」『肥後考古』第7号
宮崎県農政水産部農業振興課 1984『土地分類基本調査・都農』



第8表 石材分類表

大分類	小分類 (略称)	特徴
流紋岩（黒色）系	Ryu1	黒褐色で、流れるような縞模様が入る。縞面はなめらか。
	Ryu2	黒色で、風化面にまだらの模様が入る。手触りはすべすべしている。
	Ryu3	漆黒を呈し、緻密。手触りはなめらか。從来頁岩とされていた種。
流紋岩（白色）系	Ryu4	白色。手触りはすべすべしているものと、風化の度合いによりわずかに粉をふくものがある。内部は黒色緻密。縞面はなめらかで、イトミズのような溝が入る。
	Ryu5	白色。灰色の縞模様が入る。手触りはすべすべしている。
	Ryu6	灰白色。手触りはすべすべしている。内部は黒色緻密。
チャート	Ch1	緑色を呈し濃い、緑色の筋が網状にはしる。表面なめらか。
	Ch2	黒色を呈し、表面は光沢がある。不純物がなく非常に質がよい。
	Ch3	灰色に黒色の筋が網状に走る。表面なめらか。
	Ch4	層状の節理が多く走り、石器製作にはあまりむかない。色も数種混じる。
	Ch5	白色で表面は若干がさつく。日にかざすと半透明。質はよい。
	Ch6	灰緑色で半透明だが日にかざしても透けない。表面なめらか。ナイフ形石器1点のみ確認。
ホルンフェルス系	Ho1	明るい茶色を中心とした色調。粉をふいている。風化が著しく、表面は柔らかい。内部は黒灰色緻密。尾鈴山酸性岩類を捕獲しているものがある。
	Ho2	灰色を中心とした色調。粉をふいている。風化は著しいが、Ho1より風化面は多少硬め。内部は黒灰色緻密。
	Ho3	その他のホルンフェルス
黒曜石	Ob1	胎色を呈し、硬質で透明度が高い。不純物はわずかだが、気泡を含む部分がある。縞面はざらざらしている。桑ノ木津産に比定。
	Ob2	黒色で不純物を多く含む。日東産に比定。
	Ob3	黒色硬質で不純物が入らない。腰岳産か。
	Ob4	灰青色を呈し、風化面はがさがさしている。内部は灰黒色でにぶい光沢を発する。北部九州産と思われる。
	Ob5	乳白色を呈する。姫島産に比定。
尾鈴山酸性岩類	Os	
頁岩系	Sh1	黒灰色を中心とし、薄い層状に剥離する。ホルンフェルス化が進んでいるものもある。
	Sh2	赤色を中心とし、表面が薄い層状に剥離する。
砂岩	Sa	
泥岩		
珪質頁岩		チャートではないが、表面がなめらかで有機質なもの。
安山岩	An	風化面は白灰色、内部は黒灰色。表面ざらざら。

遺物觀察表

立野第5遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	類	記号	材質	形種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所見
1	F4	VII	1981	RyuI	Kn	3.0	1.1	0.4	1.1	製品。二側縫加工
2	E4	VII	2131	RyuI	Kn	3.2	1.1	0.6	1.6	製品。二側縫加工
3	F4	VII	1925	RyuI	Kn	4.0	1.0	0.5	1.6	製品。二側縫加工
4	E5	VII	1591	RyuI	Kn	4.5	1.1	0.5	2.7	製品。二側縫加工
5	E5	VII	1633	RyuI	Kn	3.2	0.9	0.4	1.2	製品。二側縫加工
6	F4	VII	2496	RyuI	Kn	3.0	1.0	0.5	1.3	製品。先端部欠損。二側縫加工
7	E5	VII	1625	RyuI	RF	2.6	2.1	0.5	2.9	ナイフ未製品か
8	E4	VII	1707	RyuI	RF	2.6	2.1	0.8	5.0	
9	E5	VII	1603	RyuI	RF	2.1	3.8	0.9	4.6	ナイフ未製品か
10	F4	VII	1928	RyuI	RF	4.3	1.8	0.7	4.8	ナイフ未製品か
11	E5	VII	2547	RyuI	S c	6.3	3.2	0.8	19.8	縱長剥片素材。ノッチを持つ。末端が尖るよう加工。
12	VII		1532+1533	RyuI	S c	6.3	4.1	1.7	29.6	複合資料 13 の一部。端部に縫面を残す。折れは作業跡か。
13	VII		1532+1533+1888+1916 +2495	RyuI	接合					縱長剥片素材。端部に微細剥離がみぐる。末端を尖るよう加工。
14	F4	VII	1915	RyuI	S c	6.8	3.1	0.9	20.6	4 点接合。12 の背面に 2 点の小形剥片が接合する。
15	VII		1853+1808+1917+2105+ 2438+2487+1859	RyuI	接合	4.3	5.9	2.4	32.5	縱長剥片が 7 点接合。縫面を残す
16	VII		1557+1559+1562	RyuI	接合	5.0	4.9	5.2	114.3	石核に端正な縱長剥片が接合。石核は縱長又は幅広剥片を打削移して剥離。
17	VII		1778+1922+2086+2121	RyuI	接合	8.7	8.8	2.8	52.6	4 点接合。幅広剥片と端正な縱長剥片。道部調整持つ。
18	VII			RyuI	接合					24 点接合。20 ~ 31 を含む。縱長剥片を志向した大小の不定形剥片を剥離。
19	VII			RyuI	接合					
20	F4	VII	2442	RyuI	Fl	2.5	2.3	0.8	2.2	
21	VII		1912	RyuI	Fl	3.4	1.6	0.5	1.9	
22	VII		1850	RyuI	Fl	3.1	2.1	0.7	3.5	
23	VII		1866	RyuI	Fl	3.7	3.2	1.4	13.5	
24	VII		2507	RyuI	Fl	3.3	3.8	1.2	13.4	
25	VII		2099	RyuI	Fl	3.8	3.1	1.1	11.1	
26	VII		1882	RyuI	Co	4.3	5.0	3.0	66.2	縫面を残す
27	VII		1920	RyuI	Fl	4.3	2.5	1.3	12.4	
28	VII		890+1863	RyuI	Fl	4.4	4.8	1.2	12.7	剥離時の偶発的割れによる接合
29	VII		2043	RyuI	Fl	2.9	5.0	1.9	24.0	
30	VII		2523	RyuI	Fl	5.5	4.8	1.7	37.6	幅広剥片。縫面残す
31	VII		2518	RyuI	Fl	7.0	3.8	1.4	30.9	縱長剥片
32	E5	VII	1626	HoI	Kn	2.0	0.6	0.6	0.8	製品。二側縫加工
33	F4	VII	1986	HoI	Kn	2.3	0.8	0.6	0.9	製品。切削されているか。二側縫加工
34	F4	VII	1993	HoI	Kn	2.3	1.0	0.4	1.0	製品。切削されているか。二側縫加工
35	F4	VII	1820	HoI	Kn	2.3	1.0	0.6	1.4	製品。未製品の可能性を残す
36	E4	VII	2420	HoI	Kn	2.3	1.3	0.5	2.0	先端部欠損の製品か未製品二側縫加工
37	F5	VII	1531	HoI	Kn	3.0	1.1	0.9	3.1	渦巻した剥片を素材とする製品。二側縫加工
38	E5	VII	2687	HoI	Kn	3.6	1.2	0.6	2.0	製品。二側縫加工
39	D5	VII	2560	HoI	Kn	2.6	1.6	0.7	3.8	ナイフ未製品か。
40	F4	VII	1971	HoI	RF	2.1	1.2	0.3	1.3	
41	F4	VII	1979	HoI	RF	2.5	1.3	0.6	2.5	
42	F4	VII	1977	HoI	RF	3.7	1.9	0.6	5.6	縱長剥片
43	F4	VII	2085	HoI	RF	2.8	1.5	1.3	5.2	
44	E4	VII	1718	HoI	RF	4.4	1.5	0.6	3.5	製品の可能性もある。
45	F4	VII	2018	HoI	RF	4.3	1.8	1.0	6.8	ナイフ未製品か
46	F4	VII	1988	HoI	RF	4.3	1.1	0.6	2.5	
47	D4	VII	817	HoI	RF	4.7	1.3	0.7	3.8	
48	E4	VII	1763	HoI	RF	2.3	1.4	0.6	2.7	未製品。先端部の折れた製品とも考えられる。
49	E5	VII	2426	HoI	Fl	6.5	2.6	2.3	38.2	縱長剥片
50	E5	VII	1615	HoI	Fl	2.2	0.9	0.5	0.9	
51	F4	VII	1910	HoI	Fl	2.7	1.6	0.9	2.4	打面再生剥片
52	F4	VII	1802	HoI	Fl	4.7	1.3	1.1	6.0	縱長剥片
53	F4	VII	1995	HoI	Fl	2.7	0.8	0.4	1.1	縱長剥片
54	E4	VII	1672	HoI	Fl	3.3	1.7	0.6	3.3	縱長剥片
55	F4	VII	1846	HoI	RF	6.4	2.7	0.6	8.5	大きめの剥片を大きく二次加工で変改
56	E4	VII	2468	HoI	Fl	4.0	2.7	0.4	4.7	縱長剥片
57	VII		1749+1847+2450	HoI	接合	4.1	5.6	1.2	23.0	幅広剥片を直接接合。接縫面での剥離が見られる
58	E5	VII	2511	HoI	Fl	5.7	1.8	0.8	12.2	縱長剥片
59	E5	VII	1601	HoI	Fl	4.3	3.2	1.2	15.8	
60	VII		2549+2454	HoI	接合	3.9	5.0	1.5	15.9	縱長剥片を直接接合

立野第5遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	品	目記 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g.)	所見	
61	VII		1827+2039	Ho1	接合	6.6	4.1	1.5	27.3	縫合どうしの接合	
62	E5	VII	2550	Ho1	Fl	3.7	5.1	1.3	24.0	輪状片	
63	F4	VII	1803	Ho1	Fl	4.9	2.8	1.8	20.2	腹面側に凸曲した縫長剝片	
64	E3	VII	1755	Ho1	Fl	5.4	3.0	0.8	13.6	腹面側に凸曲した縫長剝片	
65	E4	VII	1768	Ho1	Fl	6.2	4.4	1.5	37.7	腹面側に凸曲した縫長剝片	
66	E6	VII	2692	Ho1	Fl	5.9	3.0	1.7	27.5	断面三角形の縫長剝片	
67	E5	VII	2688	Ho1	S c	4.5	4.0	1.1	24.2	65のような剝片を形成したと思われる	
68	F4	VII	2031	Ho1	Co	3.5	2.6	1.8	15.2	縫長剝片	
69	D5	VII	1647	Ho1	Co	5.6	2.9	1.8	31.0	縫長剝片	
70	F4	VII	1988	Ho1	Co	4.3	1.1	0.6	2.5		
71	F4	VII	1919	Ho1	Co	3.2	1.5	1.4	8.7		
72	F4	VII	2117	Ho1	Co	4.3	3.7	2.2	39.7		
73	F4	VII	2436	Ho1	Co	4.5	2.2	1.7	16.2		
74	VII		1597+1783	Ho1	接合	3.4	6.2	3.2	72.8	偶発的な割れによる接合か	
75	D5	VII	2657	Ho1	S c	5.3	7.0	1.8	55.0	縫長剝片素材	
76	VII		2664+2657	Ho1	接合	6.8	7.9	2.1	62.3	76と剝片との接合	
77	D4	VII	2289	Ho1	Fl	6.7	8.0	1.4	62.9	断面により縫長剝	
78	VII		2660+2567+2649+2647	Ho2	接合	6.5	5.1	1.5	28.5	端正な縫長剝片どうしの接合	
79	VII		2557+2559+2656	Ho2	接合	6.6	4.1	1.5	27.3	縫長剝片の接合	
80	VII		Ryu3	接合					81~83の接合資料		
81	VII		Ryu3	Fl					縫長剝片		
82	VII		Ryu3	Fl					縫長剝片		
83	D4	VII	1651	Ryu3	Co	4.8	4.2	5.1	112.0	縫面を下に残す	
84	E6	VII	2694	Sh	S c	10.3	7.3	2.0	198.1	縫面を大きく残す。末端部を加工。頭部調整	
85	E6	VII	2695	Ch	Fl	5.9	2.4	0.9	17.5	縫長剝片	
86	VII		Ch	UF					縫長剝片素材。		
87	VII		2464+1762+2475	Ryu4	RF	6.6	8.2	2.4	68.8	3点接合。縫長剝片素材。	
88	VII		Ryu5	Fl					縫長剝片		
89	D5	VII	2745	Ryu6	RF	6.6	4.6	2.7	78.9	種類の可能性	
90	E4	VII	2536	Ho2	RF	8.0	4.0	3.4	103.5		
91	F4	VII	2522	Ho2	RF	7.7	5.2	2.0	91.8	縫長剝片	
92	D4	VII	2737	Sa	Ha	9.5	8.0	3.0	342.5		
93	D5	VII	2541	Sa	Fl	6.3	4.0	1.8	36.4	縫面を残す	
94	F5	VII	1554	Sa	Ha	11.5	6.1	4.2	353.0		
95	VII		Os	RF							
96	VII		1161+1612+1720	Sa	台石						
97	E6		1369	Ho1	Tr	2.6	1.7	0.7	3.0	製品	
98	E5		1056	Ho1	Tr	3.3	2.0	0.7	3.7	製品	
99	E6		1069	Ho1	Tr	2.8	2.1	0.8	4.0	製品	
100	E6		1171	Ryu4	Tr	2.6	1.5	0.7	2.4	製品。横削ぎ素材か	
101	E6		1178	Ryu4	Tr	2.7	1.6	0.7	2.3	製品	
102	E6		958	Ryu4	Tr	2.8	2.2	0.8	3.6	製品。横削ぎ素材か	
103	E6		1390	Ryu4	Tr	3.0	1.6	0.8	3.2	製品。横削ぎ素材か	
104	E6		2208	Ryu4	Tr	3.5	1.4	0.7	3.0	製品	
105	E6		1336	Ryu4	Tr	3.0	2.1	0.7	3.6	製品	
106	D4		503	Ryu4	Tr	3.5	2.0	0.9	4.4	製品	
107	E6		1241	Ryu4	Tr	2.5	1.8	0.8	4.0	製品。制作時の折れか	
108	E6		1343	Ryu4	Tr	3.5	2.0	1.0	5.4	製品。先端部に加工または使用痕跡有り。	
109	E6		1152	Ryu4	Tr	3.4	1.7	0.9	6.0	製品。	
110	E4		1106	Ryu4	Tr	4.8	1.5	1.0	6.7	製品。先端の横削ぎは使用歴か。	
111	E6		942	Ryu4	Tr	4.2	2.3	0.9	6.3	製品	
112	E6		2592	Ryu4	Tr	5.0	3.0	1.1	10.1	製品。斜軸、横削ぎ素材か	
113			Ryu4	UF					切り出し型で、先端に微細削離を持つ。		
114	E5		1586	Ho3	Kn	3.5	1.5	0.9	3.3	製品。擗谷型。復刻出土だが、VII層上位の文化層に属すると判断。	
115	E6		1377	Ryu4	Kn	3.7	1.6	0.6	3.4	製品。擗谷型	
116	D6		2399	Ryu4	Kn	5.3	2.2	0.7	8.0	製品。端正な縫長剝片の基部を加工。剥片尖頭部の可能性もある。	
117	E5		907	Ryu4	Kn	9.2	2.6	1.8	40.0	製品	
118	D5		2746	Ryu4	Co	3.0	3.1	2.1	23.0	製品	
119		一括	Ryu4	RF	2.7	2.0	0.7	3.8	縫長剝片素材		
120			T14	Ryu4	RF	3.8	2.0	0.8	5.8	縫長剝片素材	
121	D3		348	Ryu4	RF	5.3	2.7	1.1	20.8	縫長剝片素材	

立野第5遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	類別	記号 No.	石材	形種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所定
122	E6		929	Ryu4	Co	5.1	2.8	22.0	28.1	右刃鋸削の柄部
123	E5		961	Ryu4	RF	9.3	4.9	1.8	81.4	縱長剥片
124		一括		Ryu4	S c	3.9	4.2	2.0	30.7	縫曲を残す。石核剥片
125	F4		13	Ryu5	Fl	5.3	3.5	1.6	29.9	
126	E5		1048	Ryu6	Fl	3.3	7.0	1.4	21.7	横長剥片
127	E3		1481	Ryu4	Fl	4.2	2.9	1.8	15.5	打面再生剥片
128	C4		1499	Ryu4	RF	5.0	4.3	1.5	30.9	
129	E6		1335	Ryu5	Fl	4.4	4.7	1.8	39.9	幅広剥片
130	V		2600	Ryu1	Co	5.3	4.7	3.9	83.8	縱長剥片剥離
131	V			Ryu1	Kn	3.5	1.2	0.4	1.5	二側縁加工。未製品か。
132				Ryu1	Kn	3.3	1.0	0.6	2.0	製品。二側縁加工
133				Ryu1	Kn	2.8	1.4	0.3	1.2	製品。二側縁加工
134				Ryu1	Kn	3.0	1.0	0.6	1.6	製品。二側縁加工
135				Ryu1	Kn	3.1	1.3	0.3	1.8	製品。二側縁加工
136				Ryu3	Fl					石核
137	V			Ryu1	Kn	3.3	1.3	0.4	1.8	製品。二側縁加工
138	V			Ryu3	接合					縱長剥片を剥離した後打面再生をこころみる
139	V			Ryu2	Co	4.8	6.0	4.6	162.8	140の石核。幅広、縱長剥片を剥離
140	V			Ryu2	接合					139に剥片が接合。
141	E6		955	Ryu2	Co	5.0	5.2	5.2	142.7	
142	E3		337	Ryu2	RF	3.4	1.4	0.5	3.1	
143	F4		604	Ryu2	RF	2.4	2.5	0.8	4.1	斜軸剥片素材。今時型の可能性も
144	E6		1415	Ryu2	RF	1.8	3.0	0.7	3.7	斜軸剥片を素材。先端部を横切る形で細かな剥離がある。今時型の可能性も。
145	F2		1313	Ryu2	RF	3.9	1.8	0.9	6.2	
146	F5		264	Ryu2	RF	4.4	2.0	1.0	9.2	
147	E5		2242	Ryu2	Kn	3.9	2.0	0.8	5.4	製品
148	E3		707	Ryu2	Kn	4.9	1.6	1.0	7.8	製品
149	D4		808	Ryu2	Kn	5.6	1.7	1.3	16.1	製品
150	D6	V	2730	Ryu2	Kn	5.6	1.7	1.0	7.4	製品。打削除去
151	D6	V	2153	Ryu2	Kn	5.3	1.7	0.8	6.8	製品。縫曲を残す。
152	F5		454	Ryu2	UF	5.8	2.7	1.3	12.1	側縁、端部に微細剥離がある。抜削の要素
153	E5		209	Ryu2	Kn	5.2	2.2	1.0	9.9	製品
154	F4		204	Ryu2	Fl	4.2	4.2	1.1	13.7	縫曲を残す。幅広剥片
155		T14		Ryu2	Kn	4.1	1.8	10.0	5.8	
156	E6		1151	Ryu2	Ka	4.1	2.0	1.8	14.7	未製品
157	D3		373	Ryu1	Kn	4.5	2.3	1.8	14.9	折れ
158	E5		1096	Sh2	FP	5.2	2.7	1.3	14.9	先端部折れ
159	F4		17	Ryu1	FP	5.8	3.1	1.9	32.8	先端部折れ
160	F5		467	Ryu1	S c	6.3	4.0	1.4	35.5	縱長剥片素材
161	D5		772	Ryu1	RF	7.7	2.5	2.2	23.5	
162		726-844		Ryu2	S c	7.6	3.7	1.0	22.8	端正な縱長剥片素材。側縁、端部に微細剥離がある。抜削の要素。
163		2571		Ryu1	RF	7.1	2.4	2.7	25.8	
164		571		Ryu1	Co	7.4	3.0	3.1	76.9	
165		777-768-2571		Ryu1	接合	8.1	7.9	3.0	112.3	3点接合。163を含む。
166	E3		690	Ryu1	S c	6.4	4.4	1.6	28.4	
167				Ryu2	S c					
168				Sh2	FP					
169				Ryu6	Kn					
170				Ryu2	RF					
171				Ryu2	RF					
172	E6		1006	珪質	Kn	2.7	0.7	3.9	1.0	製品。二側縁加工
173			536	Ryu2	Kn	2.0	0.9	0.3	1.0	製品。二側縁加工。打削を残す
174	E4		111	珪質	Kn	1.9	1.0	0.4	1.0	未製品か
175	F4		66	Ryu3	Co	6.5	6.2	5.5	23.4	
176	F4		4	Ch	Kn	2.4	1.1	0.4	1.3	178と同一母岩。製品。
177	E5		1418	Ch	Kn	2.5	1.1	0.3	1.1	製品。
178		121-457		Ch	接合	2.6	6.3	4.4	62.6	石核と剥片1点接合。176と同一母岩。
179	C3		731	珪質	Tr	2.9	1.5	0.6	3.5	
180	D6		2134	Ch	Ka	4.3	1.4	1.1	8.1	製品と未製品の可能性を複数。
181	D6		2161	Ch	Ka	1.4	1.4	0.8	2.3	角錐状石器かナイフ形石器の未製品の可能性。

立野第5遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	規	目記 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g.)	所見
182		T13		珪質	Ka	6.4	3.1	2.1	38.1	木製品
183	F5	265		Ch	Kn	6.9	1.8	1.1	14.1	
184	F3	908		Co	4.7	4.7	2.8	49.8	多方向から幅広削片を剥離。	
185	E6	2622		Ho3	Kn	4.0	1.2	0.5	2.4	製品。二側面加工
186		先行トレンチ		Ho3	Kn	3.2	1.2	0.5	1.6	製品。二側面加工
187	E6	1337		Ho3	Fl	6.7	2.6	1.4	33.5	縦長削片
188		2325-2327+板		Ho3	接合	2.8	8.5	3.9	63.1	
189	D3	1493		Ho2	FP	6.2	2.8	1.6	24.6	先端部欠損
190		T18		Ho2	Ka	6.4	2.1	1.5	14.9	
191	D6	2586		Ho2	FP	7.3	3.1	1.1	23.5	
192	E5	489		Ho2	RF	5.4	3.2	1.2	23.7	縦長削片
193	D3	381		Ho2	Ka	7.0	3.3	2.8	64.5	
194	E6	1330		Ho2	RF	7.4	4.6	1.6	50.1	縦長削片
195	E4	43		Ho2	Fl	4.5	4.7	3.4	61.1	
196		T13		Ho2	Fl	5.8	4.8	1.9	47.8	
197	D4	2273		Ho2	Co	6.6	4.8	2.9	107.7	
198		一括		Ho2	Co	1.8	3.0	0.7	3.7	礫器の可能性も持つ。
199	F5	2313		Ho2	RF	6.7	5.4	2.3	69.4	
200	F4	5		Ho2	Co	6.2	5.2	5.3	207.2	
201	D5	746		Ho1	FP	5.7	2.7	1.3	20.7	
202	F6	1023		Ho1	FP	6.4	4.2	1.9	49.7	
203	D6	2329		Ho1	FP	7.4	3.3	1.3	33.8	
204	D5	2243		Ho1	FP	5.7	2.4	1.7	24.9	
205	E2	722		Ho1	Fl	9.1	6.6	3.1	192.7	縦長削片
206	E6	1373		Ho1	Fl	8.4	3.2	1.2	30.5	縦長削片
207	E6	2193		Ho1	FO	12.6	3.6	1.3	53.9	大型の縦長削片素材。打点側を粗く調整して底部をつくる。
208	F4	15		Ho1	Co	6.5	6.0	4.0	210.8	
209		594		Ho1	Fl	4.2	6.0	1.9	37.7	縦長削片
210		352-1209		Ho1	接合	4.1	7.6	5.7	149.3	石核に剥片1点接合。幅広削片を多方向から剥離
211	F4	145		Ho1	Co	5.0	4.3	3.8	99.3	
212	D6	2326		Ho1	Co	5.2	3.6	3.9	97.4	
213		T13-T8		Ho1	接合	8.5	6.5	4.7	193.0	石核に剥片1点接合
214		496-2257		Ho1	接合	5.4	8.1	2.1	79.5	
215	D6	2729		Ho1	UF	5.5	8.4	1.9	63.1	横長削片素材。縦面を残し、打面調整らしきものがみられる。
216	E6	1341		Ho1	Fl	3.3	5.4	2.4	39.5	
217	F4	140		Ho1	Co	5.0	4.0	3.5	74.9	
218	D2	1518		Obl	Co	1.5	2.1	1.1	3.7	幅広削片を多方向から剥離。縦面残る。
219	E6	959		Obl	Fl	1.7	2.3	0.5	2.5	打面調整をもつ二次加工削片
220	D5	774		Obl	RF	2.0	2.1	0.7	2.7	
221		Obl	MB							
222		Obl	MB							
223		Obl	MB							
224	D5	441		Obl	MC	1.8	1.6	1.0	2.6	
225	D6	2135		Obl	MC	1.8	0.8	0.6	1.5	
226		一括		Obl	MC	1.4	1.4	1.6	1.0	
227	F4	1310		Obl	MC	1.4	1.1	0.6	1.3	
228	F5	1119		Obl	MC	1.1	0.8	0.6	1.3	
229	E5	867		Obl	MC	1.7	1.5	0.5	2.4	
230		Obl	MC							
231		Obl	MC							
232	E6	2731		Obl	MC	1.5	1.1	0.7	2.1	
233		Obl	MC							
234	E6	1274		Obl	MC	1.7	1.2	0.7	2.8	
235	E5	88		Obl	MC	1.4	1.6	1.1	2.9	
236	E5	94		Obl	MC	2.5	1.0	0.9	3.2	
237	D3	1496		Obl	MC	1.8	1.6	1.1	3.2	
238	E4	418		Obl	MC	2.5	1.5	1.1	5.0	
239	F5	298		Obl	MC	2.7	1.5	1.8	8.3	
240		Obl	MC							
241		Ryu3	MB							
242		Ryu3	MB							

立野第5遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	品目	記号 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所見
243					MB					
244	E5		471	Ryu3	MC	2.0	2.5	2.2	12.3	
245	E4		415	Ryu3	MC	1.8	3.9	2.7	21.7	
246	D6		2144	Ryu3	MC	1.8	2.0	3.0	14.0	
247				泥岩	MC					柱原型。玉砂利を分割したような素材。西海技法の切妻
248	F5		446	Ryu1	MC	2.1	3.7	1.2	10.0	
249				Ryu4	MB					
250				Ryu4	MB					
251				Ryu4	MB					
252	E3		831	Ryu4	MC	1.3	2.4	2.2	4.2	
253	E6		1387	Ryu4	MC	1.8	1.7	2.2	7.2	
254	一括			Ryu4	MC	2.7	3.0	1.8	12.6	打面移行を介在。縫面残す
255	E3		838	Ryu4	MC	2.1	2.7	2.4	18.1	
256			T13	Ryu4	MC	3.1	2.9	1.8	7.5	
257	D6		2137	Ryu4	MC	1.4	2.5	2.5	23.0	
258	E3		347	Ryu4	MC	3.0	2.5	1.5	12.6	
259	D5		683	Ryu4	MB	2.9	4.8	2.9	41.1	
260	D6		1446	珪質	MC	1.5	1.9	2.0	8.6	
261				珪質	MB	2.8	1.4	0.3	1.2	
262	D3		664	Ho3	MC	2.1	2.9	2.7	22.4	
263	E6		957	Ho3	MC	2.8	3.7	2.4	29.1	
264	一括			Os	Fl					縫長剥片
265			727+1227	Os	接合	5.0	5.8	2.3	63.6	縫長剥片2点接合。縫面残す。
266	F5		260	Os	RF	6.8	3.6	1.5	43.3	縫長剥片素材
267	E4		107	Os	Co	8.0	5.8	3.1	147.5	
268			51+45	Os	接合	8.3	6.3	3.6	184.9	2点接合
269	F4		2253	Os	Co	1.4	1.4	0.3	0.5	
270	E6		1079	Os	Co	7.5	6.8	4.8	304.8	縫長剥片剥離か。縫隙の可能性も。
271			2410+2573+2726	Os	接合					石核に剥片2点接合。不定形剥片を多方向から剥離。
272	F6		1452	Os	Co	1.9	5.1	1.0	8.8	縫隙の可能性
273	F4		207	Os	縫隙	13.2	9.6	5.1	829.5	縫隙を多く残し、互い違いの1回の打撃を与えている
274	E4		38	Os	Co	10.0	6.6	3.6	252.1	縫隙の可能性
275			298	Os	縫隙					
276	D5		642	Sa	Ha	7.3	2.2	1.4	33.8	使用痕が明顯でなく、全面すべらか。
277	D3		377	Sa	Ha	1.1	1.7	0.3	0.5	
278	D5		2682	Sa	Ha	2.5	1.5	0.6	1.3	
279	D5		851	Sa	Ha	6.0	3.7	3.6	123.1	
280			T16	泥岩	Ha					
281	E6		1010	Sa	Ha	7.0	5.4	3.6	205.4	折れている
282	F4		267	Sa	Ha	6.7	4.3	3.5	126.5	折れている
283	一括			Ryu3	Ar	2.1	1.6	0.5	1.3	製品。末端部欠損
284	一括			Ryu3	Ar	2.0	2.3	0.4	1.3	製品。先端部欠損。
285				Ch	Ar	1.2	2.3	0.5	2.4	製品。全面押圧剥離
286	D5		423	Ho	1	3.1	1.8	0.5	3.3	全面風化で剥離が確認できない
287	D6		964	A n	Ar	1.8	4.2	0.9	5.1	模型。基部はぐじりにより欠損

凡例

剥片…Fl、二次加工剥片…RF、微細剥離のある剥片…UF、石核…Co、ナイフ形石器…Kn、台形石器…Tr、剥片尖頭器…FP、角錐状石器…Ka、石礫…Ar、敲石…Ha、細石刃…MB、細石刃核…MC、搔器・削器…Sc

立野第2遺跡出土石器計測表

No.	区	層	試験No.	石材	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所見
1	A	N	115	Obs	複合石器	1.5	1.0	0.58	0.8	欠損
2	B	V	284	Ryu 1	ナイフ形石器	5.1	3.0	0.83	9.0	今峰
3	B	V	400	Ryu 2	ナイフ形石器	4.8	2.9	1.29	10.6	今峰
4	B	V	306	Ryu 2	二次加工	3.4	2.9	1.19	6.3	今峰に関連する
5	B		428・432	Ryu 2	接合					今峰に関連する
6	B	V	387	Ryu 1	石核	7.1	5.4	3.03	94.2	今峰に関連する
7	A	V	149	Ryu 1	剥片	6.7	4.3	1.75	31.4	
8	B		426・438	Ryu 1	接合					
9	B		294・301～303・ 308・383・395・ 396・454 301	Ryu 1	接合					
10	B	V	454	Ryu 1	剥片	3.1	3.6	1.10	10.9	
11	B	V	294	Ryu 1	剥片	4.6	2.7	1.30	17.3	
12	B	V	395	Ryu 1	剥片	2.3	3.9	1.85	9.9	
13	B	V	303	Ryu 1	石核	6.8	3.6	3.43	90.8	
15	B	V	302	Ryu 1	剥片	7.0	5.2	2.33	95.5	
16	B		214・370・347・ 423・443・444	Ryu 1	接合					
17	B	V	397	Ryu 1	石核	4.7	4.1	5.12	129.5	
18	B		214・443・444	Ryu 1	剥片	5.5	4.4	1.32	25.4	
19	B	V	370	Ryu 1	剥片	1.8	4.3	2.69	16.6	
20				Ryu 1	剥片					
21				Ryu 1	剥片					
22	B		217・264・320	HoI	接合					
23	B		364・376	HoI	接合					超長剥片
24	B	V	304	Os	剥片	9.5	5.7	3.67	184.7	
25	B	N	271	Ryu 1	礫器	5.9	4.3	1.72	24.9	
26				Sa	磨石?					両端部欠損。表面滑らか
27				K1	Obs					
28	ZT	II	K3		石器	2.8	2.3	0.46	1.6	
29	A	II	5	Ryu 1	石器	2.3	1.7	0.36	0.9	欠損
30	A	N	141	Ryu 1	石器	2.9	2.3	0.48	2.3	欠損
31	A	N	52	Ch	石器	2.1	1.7	0.37	0.8	
32	B	N	258	Ch	石器	1.6	1.4	0.39	0.7	
33	A	II	128	Ch	石器	2.7	1.7	0.52	1.5	欠損
34	B	N	215	Ch	石器	2.9	2.0	0.83	3.3	未製品
35	A	N	135	Ch	石器	1.8	1.3	0.41	0.7	欠損
36	B	N	324	Ch	石器	2.2	2.1	0.74	2.6	未製品
37	ZT	II	K1	Obs	石器	2.2	1.8	0.68	1.6	二次加工の可能性も
38	ZT	II	K2	Ch	剥片	2.8	2.4	0.79	2.6	石器生産に関連
39	A	II	33	Ch	二次加工	4.0	2.8	0.84	9.7	削器か、石器生産に関連
40	B	II	177	Ch	二次加工	3.5	2.3	0.62	2.6	石器生産に関連
41				Ch	剥片					石器生産に関連
42	A	II	125	HoI	剥片	7.7	5.0	2.30	82.7	Ho剥片生産に関連
43				Ch	剥片					石器生産に関連
44	A	II	42	HoI	剥片	7.4	7.7	1.62	77.6	Ho剥片生産に関連
45	B	II	172	Ch	剥片	4.2	3.3	1.26	12.0	石器生産に関連
46	B	N	196	HoI	石核	11.0	10.3	3.73	474.0	Ho剥片生産に伴う
47	B	N	238	HoI	石核	8.3	8.0	3.61	234.7	Ho剥片生産に伴う
48	A	N	158	Sh	骨器	13.4	7.0	2.30	169.7	縦面残寸
49	A	N	SI1	Sa	磨石	8.3	5.2	3.74	202.3	
50				Os	磨石					一部赤化
51				Os	磨石					一部赤化

立野第2遺跡出土縄文土器観察表

No.	出土区	器種	部位	胎土	焼成	色調(内面) (外面)	調整(外面)	調整(内面)	繊維	備考
52	A III	深鉢	口縁部	~0.5mmの透明、白色、黒色光沢、金色粒	良好	明赤褐色 赤褐色	ナデ	ナデ	○	
53	3T III	深鉢	口縁部	~1mmの透明、白色、黒色光沢、1~3mmの白色粒	良好	褐色 にぶい黄褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ、指頭痕	○	
54	B IV	深鉢	口縁部	~2mmの透明、白色、灰白色、黒色光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
55	B IV	深鉢	口縁部	~2mmの透明、白色、灰白色黒色光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
56	A IV A V	深鉢	口縁~胸部	~1mmの白色、透明、1mmの黒色脱光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	ナデ、指頭痕	○	
57	3T III	深鉢	胸部	~1mmの透明、3mmの月黄色、赤褐色粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
58	3T III	深鉢	胸部	~2mmの白黄色、1mmの白色粒	良好	褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
59	一括	深鉢	胸部	1mmの白色、黒色光沢、~1mmの灰白色、白色、黄色粒	良好	明赤褐色 にぶい黄褐色	条痕後あらいナデ	条痕後ナデ	○	
60	B III	深鉢	胸部	~2mmの透明、白色、~1mmの黒色光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
61	A IV	深鉢	胸部	~1mmの透明、灰白色、茶褐色粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
62	A IV	深鉢	胸部	~0.5mmの透明、白色、黒色光沢粒	良好	にぶい赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ、指頭痕	条痕後ナデ、指頭痕	○	
63	2T	深鉢	底部	~2mmの茶色粒	良好	褐色 褐色	ナデ		○ 内面現存か?	
64	3T III	深鉢	口縁部	繊維なし白色、黒色光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	横ナデ	条痕後あらいナデ	摩滅	
65	1T III	深鉢	口縁部	~1mmの透明、~2mmの茶色粒	良好	赤褐色 赤褐色	貝殻条痕後あらいナデ	貝殻条痕後あらいナデ、指頭痕	○	
66	B III・IV	深鉢	口縁部	~2mmの茶褐色、赤褐色、黑色粒	良好	にぶい黄褐色 褐色	貝殻条痕後あらいナデ	貝殻条痕後あらいナデ	○ 外面スス付着	
67	1T III	深鉢	口縁部	~2mmの黄褐色、茶色、~2mmの透明、黒色光沢粒	良好	にぶい黄褐色 赤褐色	貝殻条痕後あらいナデ	貝殻条痕後あらいナデ	○	
68	3T III	深鉢	胸部	~1mmの透明、白色、黒色光沢粒	明黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ墨系	ナデ			
69	3T III	深鉢	胸部	~1mmの透明、白色、黒色光沢粒	褐色 明黄褐色	ナデ墨系	ナデ			
70	B IV	深鉢	口縁部	~0.5mmの白色粒	黒褐色	貝殻条痕	ナデ		摩滅、貝殻剥離付引付?	
71	IV	深鉢	口縁部	1mmの灰白色、微細な黑色光沢粒	良好	明黄褐色 浅黄色	横位貝殻条痕、貝殻脱離	ナデ	摩滅	
72	A IV	深鉢	口縁部	1~2mmの透明、白色、1mmの金色粒	良好	明黄褐色 にぶい黄褐色	斜位の貝殻条痕、口縫部付近ナデ	ナデ	摩滅	
73	B III	深鉢	口縁部	~1mm白色、金色粒	明黄褐色 にぶい黄褐色	横位貝殻条痕、壁位の貝縫列の刺突(工具不明)	ナデ		外側スス付着、摩滅	
74	A IV B III	深鉢	口縁部	1mmの透明、白色粒~胸部	良好	明黄褐色 にぶい黄褐色	横位貝殻条痕後あらいナデ、壁2列の棒状工具による刺突	ナデ、指頭痕	外側スス付着、摩滅	
75	A III	深鉢	口縁付	~1mm白色、赤褐色粒	良好	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	貝殻条痕、斜位の貝縫	ナデ	穿孔あり、外側スス付着	
76	A IV	深鉢	胸部	~2mmの透明、白色、黒色光沢粒	良好	浅黄色 灰黄色	貝殻条痕	ナデ		
77	A IV	深鉢	胸部	~3mmの赤白色、1mmの透明、白色粒	良好	明黄褐色 にぶい黄褐色	貝殻条痕後あらいナデ	ナデ、一部ミガキ?		
78	B III 3T III	深鉢	底部付	~2mmの透明、白色、灰白色粒	明黄褐色 浅黄色		ナデか		摩滅著しく、外側剥離	
79	A SII IV	深鉢	底部	直好	にぶい黄褐色 灰黃褐色	ナデ	ナデ			

図版



立野第5遺跡調査区近景（北東側より）



調査区全景（写真下部が北）



遺跡北東側 K-Ah 落ち込み



確認調査風景



二次堆積黒色土堆積範囲



SI2（北西側より）



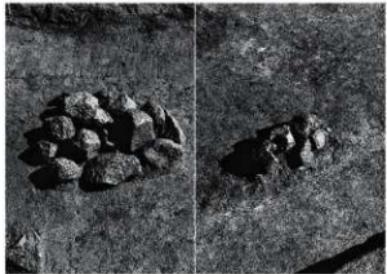
SZ1 半蔽状況（東側より）



SI22 半蔽状況（西側より）



SI3（東側より）



SI14（西側より）

蝶群の痕跡



SI27（北側より）



SI13（北東側より）



SI23（東側より）